

終幕のあと

盤坂万

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀河英雄伝説10巻のあとのお話です。群像ものみたいなのを目指しましたが大変ですね。新しい登場人物とか世界観を壊してしまう要素も出てくるので心配です。

ガイドラインを確認してから投稿しましたが、不備あればご指摘ください。

10月16日現在中断をさせてもらいます、、、いつか完結させるか全部推敲しなおして再投稿したいと思います。

20	19	18	18	17	16	15	14	13	12	11	11	10	9	8	7	7	6	5	4	3	2	1
		5								5												
		幕間その②								幕間その①												
127	121	115	107	99	91	84	77	70	64	59	52	43	38	34	31	27	19	16	11	7	4	1

目次

深淵の宙空に火球が閃いたように見えて、男はその一点に目を凝らした。ガラス一枚を隔ててすぐそこに広がっているように見える宇宙空間は、実際には分厚い隔壁によって宇宙から隔てられている。肉眼に映っているように見える光景は光源ディスプレイによって映し出された映像で、床から天井まで全面に張り巡らされたそれは、宇宙船の艦橋を三六〇度ぐるりと囲むものと同じ代物だ。

鈍色のブロンド髪の男は、さきほどの火球とも閃光ともいえる光源の発した方向に注意を向けて佇んでいた。背後の宇宙港口ビーには大勢の旅客が往来しているが、異常に気付いた人間はいないようである。

しばらく眺めていると先ほどの宙域から天頂方向へ三十度ほど傾いた点で、さつきより比較的大きな光源が続げさまに二つ三つと閃いたがかなり遠い。明らかに人為的な爆発が起こっているが、宇宙港の保安室では事態の把握をしているのだろうか。構内はいたって平常と変わりがない様子で、警報ひとつなる気配もない。

男は壁面のディスプレイに張り付いていた。そうしていると両の掌から僅かに振動を感じるが爆発によってもたらされたものではないだろう。爆発の振動を伝えるには少々遠すぎる。

「事故……いや、戦闘か」

男は新年の活況に賑わう帝国新首都星フェザーン宇宙港の展望デッキにいる。ここは多くの人が行き来しそれぞれがそれぞれの目的地へ向かう人と物の中間地点、今や全銀河の中心地がここフェザーンである。

この賑わいの中にあつて、隔壁の外の宇宙空間に注意を向けている者は男の他にいないようだった。

しばらく宇宙空間に目を凝らしていたが、続いでの変は起こらない。目の前を巨大な商船が横切っていくのが見える。ドックに入港するのだろうか、普段と変わらない光景が男の前にあつた。悠然と進む艦の様子は、外に何も異常が起こっていないことを示すかのようだ。

「中佐」

背後から声を掛けられて男は意識を重力場のはたらく宇宙港内へと引き戻した。振り返ると長身の優男がビールの小瓶を二つ提げて男の様子を覗いていた。自分も中佐だったろうに、と感想を持ったが口には出さず片手を軽く上げる。二人は同年輩のようで身長も同じくらいに見えた。姿勢のいい鈍色のブロンド髪に比べて、ビールを運んできた優男の方は少し背中を丸めるようにして歩いている。太陽光を蓄積したエメラルドのように明るい色の瞳をしていた。水準よりハンサムな部類に入るだろう。

「外を眺めていたようだが」

「爆発があったように見えたものでね」

ふうん、と相槌を打ちながら優男はブロンド髪に並んでディスプレイに映し出される宇宙空間に視線を投げかけた。見渡す限りフェザーンの宇宙は静かに見える。

「どれくらい先だ？」

「二〇キロほどかな、仰角三〇度十一時の方向だ」

「……少し遠いか」

優男たちの頭に浮かんだのは最近流行りの宇宙海賊のことである。銀河が単一国家によって統一され、百五十年ぶりに平和になったというのに、人類はいつかな平穏とは無縁であるかのようにだった。

「先日も宇宙海賊騒ぎで半月ばかり航路を塞がれたことがあったらしいからな」

缶詰にされるのは御免だぜ、と優男は舌打ち交じりに独り言をこぼした。宇宙海賊があたりを荒らしているとなると周辺宙域はたちまちに警戒エリアにされてしまう。帝国軍やら警備隊による排除が完了されるまで、旅客が宇宙港に足止めされることは、超長距離間移動をする者にとって日常のことになっていた。

「帝国軍も存外だらしない。宇宙海賊程度に手を焼くなんざカイザーラインハルトが草葉の陰で泣くぜ」

「艦隊同士の会戦とは違ってゲリラを対象とした殲滅するのはまず不可能に近いだろうな。それぞれが身勝手に跋扈していて意思統一が

されている訳でもない」

「いたちごっこだ。そう感想を述べる男に詰まらなさそうな視線を送りつつ、優男は手にしていたビールのガラスボトルをひとつ差し出した。」

「貴官、ぐくぐくまっとうなことを言う。よく似たやつを知っているぜ、とつくに死んでしまったがね」

「自明のことを言ったに過ぎないのだが……」

困惑気味に受け取ったガラスボトルに視線を落とすが、一転「よく冷えているな、ありがたい」と男は嬉しそうに呟いた。

「宇宙が平和になったというひとつの証左だろうさ。サービスが良くないと物が売れないまっとうな世の中が戻ってきているってわけだ」

まるで独創性のない意見を、どの口が言うのだと皮肉に思いつつ男も做ってビールを一口含む。その時足元がわずかに振動するのを感じた。今度は気のせいではなかった。視線を上げると優男と目が合った。彼も同じ違和感を感じ取ったようだ。その直後、宇宙港全体に警報音が鳴り始めた。

「……平和ボケだな」

飲みかけのガラスボトルを手近なダストボックスに投げ入れて、優男は不意に歩き出した。

「中佐どこへ」

「ここでは状況がわからん。ひとまず宇宙港関係者をとっつかまえる」

「やれやれ、と男は鈍色のブロンド髪をかきむしる。目立つと困るのだがな、と呟きつつ優男の後を追った。周囲はようやく異変に気付いた人々が、鳴りやまない警報に怯えるように右往左往し始めていた。」

宇宙港のすぐ外では文字通り戦闘行為が起こっていた。一機の単座式戦闘艇ワルキューレを、同じく別な二機のワルキューレが追っている。後続機から光線が放たれるたび、前を行く一機が優雅に艇をくねらせて躲す。後続の二機ははつきり焦れていた。

「野郎、なんて操艇技術だ。エースなみだぞ」

「エースとやったことがあるのかよ。戦争はとつくに終わってんだ」

二機同時に放った光線を、軽々躲す敵機を目の当たりにして、後続のパイロットが無線交線で悲鳴をあげた。

「このまま追ってもジリ貧だぞ」

「ああ、エネルギーも持たない」

「だが……」

後続のパイロット二人は同時に息を呑んだ。

「手を緩めると確実にやられる。逃げる隙もない」

「警備隊が来るまで追い続けるしかないか」

ここまで戦闘開始から二〇分程度しか経っていないが、彼我の技量差は二対一であるにも関わらず圧倒的であることが判る。判るからこそ手を緩めることも逃げることもできないでいた。二機で追っているように見えるが、必死なのは追っている方で、追われている方は平然としたものだ。少なくとも追っ手の二人にはそれが判る。遊ばれているのは自分たちの方だろう。二機が連携しているから何とか逆撃をこうむらずに済んでいるに過ぎない。すぐ近くにはフェザーンの宇宙港が迫っている。生きて帰るには宇宙港の警備隊を刺激して彼らの介入を誘うのがベストだろう。そうして警備隊と交戦状態に入る直前に何とかして離脱するしかない。敵機に増援が来るのも時間の問題だった。

「クソ、宇宙海賊風情が！」

二機のパイロットたちはヤケクソ、狂乱の一步手前で何とか踏みとどまっている。そこから先はヴァルハラだ。それが判るだけに何とも歯痒い。口惜しいとはまた違う感想がそこにあった。その時二人

のヘッドセットに同時に音声が届いた。ノイズの中に彼らの忠誠の対象が放つ音楽的な響きが漏れてくる。

「ミハエル、ヒルデブランド。宇宙港警備隊の発進を確認しました。二個小隊が一〇〇で現着です。一〇〇で三連斉射で攪乱を行いますので両機はそれを合図に戦域を離脱しなさい」

それは若い女の声で優美かつ峻烈に響いた。彼らの母艦からの通信である。フルフェイスのヘッドセットの下で、二人の表情に生気が戻った。バイザーの内側に彼らの指揮官たるうら若き女性の無表情な美貌が映し出されている。

「お嬢、敵機は一。ただしエースクラスだ。離脱も命懸けだぞ。それに……」

それにどうやら敵に後続があるらしい。ジャミングの霧が濃くなる中、レーダーに敵機襲来時の波長が時折紛れ込んでくるのをミハエルは見て取っていた。

「ミハエル」

ミハエル機からの通信に、駆逐艦を改装した武装商艦の女主人は艦橋で冷たい微笑をこぼした。近習のクルーがその表情を見つけてしまい慌ててコンソールに向き直るのを見かけて、お嬢と呼ばれたこの艦の主人はそつと目を閉じる。

「泣き言はおよしなさい。ヴァルハラへは私のお遣いで行ってもらう予定です」

「……ミハエル機了解。御心のままに」

ミハエルが通信を終えると、ヒルデブランド機から大きな笑い声が割り込んできた。

「生きてお嬢の美しいご尊顔を拝せられるよう、全力離脱するつもりすかな」

「ヒルデブランド、戻ったら憶えておきなさい。二人ともその呼び方はよすようにと言ったはずですよ」

冷たい微笑を微動だにさせず、女艦長は通信を切った。静かに立ち上がると砲撃主に鋭く命じる。

「ポイントアルファへ狙点固定」

「狙点固定しました。警備隊機八、サンマルで現着」

砲撃主の声に応じて女艦長は右手を顔の側面にそっと上げた。

「ミハエル、ヒルデブランドの両機は散開、これより三連斉射を行う」
「カウント入ります」

そしてコンソールのタイマーが細かく明滅するのに合わせて右手を薙ぎ払うように振り下ろす。

「ファイエル」

武装商艦から三筋の光線が三度続けて放たれた。直前でミハエル機、ヒルデブランド機は宙返りをしながら散開し、直後に警備隊機八機が戦域に到着した。二機は見事に、というよりはうまいこと戦域を離脱した。

「ゾフィー様、二機とも無事戦域を離脱しています。帰還は約六〇〇で完了します」

名を呼ばれた女艦長はそこでようやく柔らかく微笑した。後ろで一つに束ねたシルバーのロングヘアを解いて、豊かな髪をかきあげる仕草は健康的そのものだ。戦闘中のいかめしさはなりを潜めて、年齢相応な年若な娘が指揮席に認められた。

「両機を接收後、全力離脱します。今回の依頼は失敗ね」

ゾフィーは盛大にため息をつく。指揮席にだらしなく寝そべった。

「おやおや、これはまずい」

「一機で二個小隊相手に圧倒的だな」

戦況を眺めていた二人組は宇宙港警備隊の指揮所内でボソボソと会話している。どんな魔法を使ったのか、優男は難なく指揮所に堂々と入場してみせた。

「なに、この身分証のおかげさ。どんな伝手があつたものか、キャゼル又中将なかなか気を利かせてくれたもんだぜ」

それは偽名の身分証だったがここまで問題なく旅を進めてこられたのだから、身分証自体は本物に違いない。本当にいったいどんな細工が施しているのだろうか、身分証のタグを弄びながら、皮肉屋を自認するキャゼル又という男に得体の知れなさを抱いていた。

「あつ、やられたぞ。また！ なかなかやるね、大したもんだ」

ぼんやりしているうちに二機が瞬く間に墜とされた。先に交戦していたという二機は既に戦域を去っている。指令所の監視官の話によると、武装商船の護衛戦闘艇だったらしい。惨憺たる戦況に指揮所内はあちこちで怒声と悲鳴があがる。刻一刻と悪化する戦況に誰も対処しえない醜態を露呈していた。

「司令官！ 優男が突然声を張り上げた。「相談がある」

ブロンド髪の方は嫌な予感を感じた。きつと彼はこう言いだすに違いない。

「空いているワルキューレはあるかね？」

それは男の想像と一字一句違わなかった。眉間あたりを力強く右手中指で抑えてブロンド髪はため息をついた。問いかけられた司令官は沈鬱な表情で振り返つたが、その表情からはつきりと迷惑がつているのが判る。

「ランペルツ中佐、まさかとは思いますが出るおつもりか」

「無論だ」呼ばれた名はもちろん偽名だったが、ランペルツ中佐は自信満々に言い放つた。「俺は元・撃墜王でね」

宇宙港警備隊は軍隊ではないが、指揮所の司令官は大佐相当だ。年

齢も司令官の方が二回りほど年長だろう。だが、軍と警備隊には歴然たる格差がある。それを踏まえた上での演技であれば見事なものだが、この無分別さは彼の生まれ持った資質だろう。いつの間にかこの男のペースに多くの人間が巻き込まれるのである。かく言う自分も、とブロンド髪は思わないでもない。

「俺と、この……」と言いつつブロンド髪を振り返るが、どうやらランペルツ中佐は連れの名前を思い出せないでいるらしい。そちらも偽名だから仕方ないと言えば仕方ないが、そういう迂闊さがたまに顔をのぞかせて肝を冷やさせる。

「シーフェルデッカー中佐もですか」

運よく司令官が引き継いでくれたものの、無用の不安を抱かせないでもらいたいものだ、と偽名のシーフェルデッカー中佐は密かに息をついた。

「失礼ですが両中佐のワルキューレでの戦果は？」

「まあ軽く三桁を越えている。もう少し戦争が続いていれば歴代撃墜王トップの座は間違いなかったな」

ランペルツ中佐の言葉に指揮所内にざわめきが起こった。「お二人共に？」と、司令官は青ざめたまま二人を交互に見やった。もしそれが本当なら空戦史に名を遺すほどの偉業の持ち主である。シーフェルデッカーを名乗るブロンド髪はやにわに割り込んで控えめに言葉を挟んだ。

「小官のスコアはせいぜい三〇程度です。ランペルツ中佐とは格が違います」

これは事実であったが何せ搭乗時間が桁違いである。シーフェルデッカーも十分な戦果を持つているが、根っからの戦闘艇乗りであるランペルツとはそもそも舞台が違った。シーフェルデッカーの事実確認に、ランペルツは気をよくしたらしく「生きて還って来さえすれば立派なものさ」とうそぶく。

「それだけのスコアであれば現役では全銀河の五指に数えられておかしくないはずですな。しかしランペルツ中佐のお名前は聞いたことがありますか……」

そう指摘されてランペルツは言葉に詰まった。やり過ぎたようだと自覚したときには後の祭りだったが、シーフェルデッカーが助け舟を出す。

「身分証のIDを解析してみればよいのでは？」

「そうだそうだ、是非そうしてくれ」

ランペルツは闊達とした口調と軽快な仕草でIDを差し出す。指揮所のクルーがそれを解析している間、自信満々に言ったもののランペルツはそわそわしていた。

「あれ、大丈夫かな」

その心配にシーフェルデッカーは冷ややかな視線を連れの男に注ぐ。自分で蒔いた種だろうに、とシーフェルデッカーは思ったが、口に出しては別のことを言った。

「キャゼルヌ中将の仕事だからな。身分偽造にしてもそのあたり実際に即したものを用意してくれているだろう」

「随分と買い被るものだ。もし適当な中身だったら放り出されるだけでは済まないな」

「そう思うのなら、軽々な行動は以後謹んでもらいたいものだ」

「以後があるのならそうしよう」

そうしているうちに解析が終わったのだろう。モニターをのぞき込んでいた司令官を含む数人が、解析結果にどよめいている様子である。その雰囲気からどうやらシーフェルデッカーの考えは的中していたらしく、司令官たちの態度がさらに改まったのを敏感に感じた。

「ランペルツ中佐、大変失礼を致しました。亡きラインハルト陛下直属の特殊部隊の所属であれば、ご身分に秘匿性があるのは当然のこと。知らぬこととは言え大変な無礼を致しました」

さつきまでの慇懃無礼な態度とは打って変わって、指揮所の雰囲気は恭しいもになった。どうやらキャゼルヌのはつたりは効果覲面だったようである。それにしても皇帝直属とは、嘘も極まったものだ。

「スコアも確認できました。凄まじい戦果ですな」

司令官のまなざしに尊敬の色が滲んでいる。ランペルツは少々た

じろぐ様子だ。彼に年長者に憧憬の念を向けられる趣味はない。先ほどより少し距離の近い司令官を両手で制してたじろぐ。

「それでワルキューレは借りられるかね」

「是非ありません。所属不明機に来援が来るようで、こちらも追加戦力を出さざるを得ません。何卒我々をお助け下さい」

そう言われて、シーフェルデツカーに振返った優男はウイंकをして寄越した。ブロンド髪は苦笑するほかなかった。

「ところで先ほどの五指に入るパイロットと言うと誰が拳がるのかな？」

「そうですね。ファルコ・フォン・スプリンガー、アーデル・ウッツ、ヘルマン・フォン・ケーニツヒ、ホルスト・シューラー……」

指折り数えながら司令官は枚挙していたが、最後に「旧同盟軍であれば、オリビエ・ポプランでしような」と締めくくり、ランペルツは満足そうにうなづいた。翻ってシーフェルデツカーは苦笑をため息に変えた。

「ところで貴官、ワルキューレは動かせるのか？」

パイロットスーツに着替えた二人はワルキューレの射出場にいた。シーフェルデツカーが連れにそう声を掛けたのは、この男が旧同盟軍のエースだったからで、戦闘艇乗りと言っても帝国軍のワルキューレと、旧同盟軍のスパルタニアンではそもそも機体構想に違いがあり、スパルタニアンに超一級の操縦能力があるからと言って、ワルキューレにも対応できるとは限らないためである。

「以前拿捕したものを試したことがある。破壊力こそスパルタニアンには劣るが、取り回しはワルキューレの方が良さそうだ」

「ところで」とランペルツはフルフェイスを合わせながらシーフェルデツカーを振り返る。「貴官こそ実戦の方はどうなんだ。艦橋の人というイメージしかないが」

ランペルツの疑問はもつともだ。シーフェルデツカーは長年司令官付きの副官兼作戦参謀として従軍してきた。自らが小艦隊を指揮することもあつたくらいで、一局所戦闘に従軍する機会があるろうとも思えない。シーフェルデツカーの方も別段こだわりなく正直なところを口にする。

「さっきこの司令官に話した通りだ。空戦も白兵戦も一通りはやっているがどれも戦果は凡庸でね」

「謙遜だな。専門でもないのに三〇機ばかりも墜としていけばエース候補だ。背中を預けるには十分さ」

そう太鼓判を押されてシーフェルデツカーは自嘲気味にフルフェイスの下で笑った。まあ、五年ほどブランクがあるのだがなんとかなるだろう。

敵機の来援は中隊規模とのことだった。所属不明部隊の戦力はなかなかの規模である。司令官であるトロメル司令からの通信では、こちらの増援は大隊規模で行うそうで、シーフェルデツカーとランペルツは大隊には編入されずツーマンセルでの独立運行を言い渡された。

「あの司令官、なかなか気前がいいな」

「戦力の逐次投入は余計な損害を出すことに繋がる。それに敵方の戦力は最大限投入されたとみて間違いない」

「敵戦力の母船の位置が捕捉できていない。敵さんかなり遠出をしているようだから戦闘可能時間を考えると、な」

二人はそれぞれの操縦席に収まって機器のチェックを始める。プレイヤーと回線をシーフェルデッカーが繋いでいるため、二人の会話は指揮所には伝わっていない。

「では敵機十二ないし十六といったところか。中佐、ここはひとつ勝負というじゃないか」

「ハンデを貰いたい。貴官と私とでは技量差がありすぎる。勝負にならない」

シーフェルデッカーの独白に、ランペルツは快活に笑った。「ではこうしよう」と言って指を鳴らすが、無線には聞こえてこない。

「俺の三機に対して貴官は一機。これでどうだ？」

それではほとんどを自分たちで撃墜せねばならないではないか、とシーフェルデッカーは呆れたが、この男はきつとやるのだろうなとも即座に思った。

「賭けの賞品は何がいいかな」

そううそぶいているうちに指揮所から発進を促す通信が入った。それぞれ指揮所からの指示に受領を出し、発進シークエンスへの移行を受任する。

「例の一機以外にもエースクラスがいると面白いんだが……」

ランペルツの独り言に勘弁してくれと胸の内を呟いて、シーフェルデッカーは射出のGに耐えるべく操縦席に身体を沈めた。

戦闘は予想していたよりも長引いた。敵戦力が規模以上の戦闘能力を誇っていたこともそうだが、シーフェルデッカーらが機体に慣れるのにも想定以上に時間がかかった。二人とともに戦列参加した僚機三十八機のうち帰投したもの二十二、撃墜されたもの七、不明が九という惨憺たるもので、敵機十五のうち撃墜は四、あとはすべて逃がしてしまっている。

無論二人も無事帰投したが、撃墜はシーフェルデッカーが一機、ランペルツが三に留まり勝負は引き分けとなった。撃墜数の全部を二人で成した訳だがランペルツの機嫌は底抜けに悪かった。

「畜生、何たるザマだ」

射出場に戻ったランペルツは右手の拳をもう一方の掌に打ち付けて苛立ちをあらわにした。仕方あるまい、とシーフェルデッカーは思うが彼我の数的な戦力差を考えれば、一方的に蹂躪を許したようなものだ。

「機体に慣れるのに時間がかかり過ぎた。ヤキが回るとはこのことだな」

フルフェイスを脱ぎ、思わず叩きつけようとするのを思いとどまり、自称撃墜王は髪を掻きむしった。二人で四機を葬ったものの、むろんながら敵のエース機は取り逃がしている。次に戦場で会ったら目にモノを見せてやる、と息巻きながらランペルツは射出場を後にした。シーフェルデッカーはその間一言も口にせず、ただ彼の後を追った。手の中に操縦桿の感触が残っている。実戦は久しぶりだった。昂った精神は冷静さを取り戻すのに時間を要するだろう。わずかに震える右腕を、同じく震えの止まらない左手で抑える。これが戦争だったと身体が思い出したのだった。

「いやいや、さすがランペルツ中佐！ 慣れない機体でもあれほどの動きとは恐れ入りました」

司令官のトロメルは二人の姿を認めると手放して褒めそやした。自軍の戦闘艇が十六機も失われた事実をどう捉えているのか、シーフェルデッカーは正気を疑う思いだった。それはランペルツの方でも同じらしく、彼にしては珍しく苛々したままの様子で強く鼻息を鳴らした。

「司令官、あまり他人のことは言えんが、明らかに練度不足だ。訓練計画を練り直すべきじゃないか」

おや、とシーフェルデッカーは目を丸くした。前々から感じていたことだが、この人物はシリアスな場面になればなるほどまっとうなこ

とを口にする。普段とぼけたりふざけたりしている様子からは、戦争狂を疑う言動が散見されるがその実きっちりしていて、ある種のリアリストであることを感じさせた。

言われたトロメルはと言えば、少し嫌な表情を見せたが仰る通りですな、などと調子を合わせている。元皇帝直属という経歴が効いているのは言うまでもない。無論その身分は偽造されたもので、そういう意味からもここは早い目に退散したいところだ。シーフェルデツカーの本来の目的にはこうした行動は良い方向に作用するとは思えない。

ところがランペルツの方はと言うと、ここぞとばかりに情報収集をするつもりらしく、あれこれとトロメル司令に質問を投げかけている。敵の正体は何だとか、こここの管轄はどこなのかとか、オーディンに向かうのに特例を活かせる方法はないか、などのべつ幕無しに問いかけている。

「先ほどの敵兵力は旧門閥貴族の私軍崩れが宇宙海賊化したものかと推測されますが、正体などは判然としないのです。叩いても叩いても湧いてくる困った連中でした……」

「宇宙海賊にしては統制が取れていたが、なるほど旧門閥貴族の私軍崩れね」

新事実に感心している様子のランペルツをトロメルは胡散臭そうに横目で見やった。

「中佐のような立場の方がご存知ないわけではないと思うのですが」
そう言われて優男はグクリとした。表情の動きまでは読み取れなかったろうがなかなか危うい。トロメルも伊達に司令官職にあるわけではなく鼻が利く様子である。慌ててシーフェルデツカーは助け船を出す。

「ところで先に戦闘していた戦闘艇の所属は判っているのですか」
「ああそれでしたら」とシーフェルデツカーに振返ってトロメルは指を立てた。手近にいたクルーにデータを出すように指示してデイスプレイに向き直る。

「星間商船の護衛戦闘艇ですな。まあ商船というのは表向き、連中は

賞金稼ぎとでも言いますか、薄汚いハイエナどもですよ」

ほう、と高い声を出したのはランペルツだった。さっきの苛立った表情はどこかへ行ってしまうって新たな興味ごとに関心を示している様子である。

「バウンディーハンターとは面白い。そんな商売が成り立つんだな」
「面白いなどとんでもない！」トロメルは憎々しげに言い放った。
「航路のあちこちで勝手に戦闘を起こしたかと思うと、さっきのように窮地に陥れば我々や軍に災厄を押し付けて寄越して、後は知らぬ存ぜぬときたものです。これが笑っていられますか！」

唾を飛ばしながら喚きたてるトロメルを宥めて、シーフェルデツカーは素早くディスプレイのデータに目を走らせる。

「ヴォルフス・ブリガード……というのか。輸送艦十隻に駆逐艦を五隻も持っている。なかなかの規模だな」

商船団のオーナーは、とデータを読み進めていくうちにシーフェルデツカーは息を呑んだ。

「へえ、オーナーは女か。華やかさには欠けるが放っておけない雰囲気のある美人だ。銀髪つてのもいいね」

ランペルツが持ち前の軽薄さでディスプレイに映る女性オーナーの画像を評した。なあ中佐、とシーフェルデツカーを覗ったランペルツは僚友が驚愕している様子に気付いて眉を顰める。

「おい、お前さんどうかしたかい」
「……ゾフィー」

ディスプレイに意識を奪われているシーフェルデツカーの様子に、ランペルツは「まさか知り合いか」と勘を働かせたが、自分もデータを読み進めてシーフェルデツカーとほとんど同じ反応をした。

「ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカツ……、おいおいおいおい」
ランペルツは思わず額に手をやった。「こいつは驚いた」と言ったきり二の句を告げずに黙り込んだ。二人の旅の目的地が思いもよらぬところに現れたのである。

「で、俺を訪ねてきたってわけか。単純な連中だね、おたくらも」

切れ者で通る旧フェザーンの独立商人は、突然訪問してきた二人連れから来意を聴いて、呆れたもんだと付け足した。

「情報を商品に手広くやっているんだろう。元フェザーンの辣腕家」

「……旧知を頼って来るあたり、まあ可愛げがあって何よりだな」

そう言うフェザーンの辣腕家と呼ばれた男は右手を差し出した。ランペルツと握手を交わすと、隣に佇むシーフェルデッカーとも挨拶を交わす。

「久し振りと言っても一年あまりか。元気そうで何よりだ、シュナイダー中佐」

「コーネフ船長も相変わらずで喜ばしい」

そう言われてボリス・コーネフは皮肉げに笑った。堅い堅いと揶揄したが、握手を解くと肩を叩いて再会を喜んで見せた。

「しかしランペルツとはポプラン中佐、偽名を戴くにしても程度というものがあるぜ」

「実在するのか？」

「ああ、実在する。というよりも実在したと言うのが正しいな。それにこいつは相当な曰く付き……まあ後でいいか」

ボリス・コーネフの調査したところによると、公式には生存していることになっており、旧同盟軍との戦闘で捕虜になった後、移送中に事故に巻き込まれて行方不明になっている。その後の経緯は不明だが、無事発見され予備役に編入され休暇中となっていて、移送中の事故というところから先がキャゼルヌの創作らしい。

「実際には捕虜になった後自裁している。皇帝ラインハルトの直属だったのは本当みたいだ。しかしキャゼルヌ中将という人はなかなか食えない御仁だな。絶妙に疑惑の目を逸らすギミックがそこかしこに仕掛けてある。初めからこれは想像の産物だと言う前提と、キャゼルヌ中将の為人を知ってはじめて疑惑に気付くことができる」

シーフェルデッカーを名乗っていたシュナイダーも同感を認めた。

ほんの一時期とは言え、新生銀河帝国の大軍と、一戦場に於いて拮抗し続けたヤン・ウエンリーの女房役だった人物だ。一筋縄で済むわけがなかった。

「じゃあシュナイダー中佐のシーフェルデツカーはどうなんだ」

ポプランの興味本位の質問にボリス・コーネフは呆れた様子の鼻息で返事をする。

「こちらも曰く付きだな。ローゼンリッター連隊に所属してスパイ活動を行っていたが、かなり長い間シェーンコップ中將に泳がされていた人物だ。こちらも生きていることにはなっているが、実際にはな」と言うことはどこかの場面では同じ空間にいたかもしれないのだ。なんだか奇妙な感覚を二人は覚えた。

「それにもう一つ奥にギミックがあるんだが、そいつの答え合わせは後にしよう。さて、もうひとつの本題だが……」

辣腕家の独立商人は手元のコンソールを操作してディスプレイに情報呼び出す。目の前の空間に大小さまざまな情報が広がっていくのを目で追いながら、シュナイダーはこちらに向けて無表情な視線を送って来る女性の画像に目をとめた。面影はしつかりとそこにあるが、写真に写る女性をシュナイダーは初めて見るような気分で眺めている。

「ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカツ」ディスプレイの情報に目を落とし、ボリス・コーネフは淡々と整理した内容を披露し始めた。「現在二十六歳、言わずと知れたメルカツ提督の一粒種だ。今はヴォルフス・ブリガーデという武装商船団のオーナーをやっている。いずれも軍籍にあつた輸送艦、駆逐艦やワルキューレを転用した編成で、商船団と言っても商売はもっぱら要人や別の商船の護衛、宇宙海賊討伐だな。賞金稼ぎみたいなことも請け負っているようだ」

「それは儲かるのか」

ポプランが口を挟むのに顔をしかめつつコーネフはさらに続ける。

「船籍はオーディンだが商船団だからな。普段どこを拠点にしているかなどは航路データを漁らんことには判らん。先の戦闘行為も宇宙海賊討伐の賞金稼ぎ絡みだろう。なかなか高位ランクの稼ぎ手のよ

うだ」

そう言つてヴォルフス・ブリガーデの戦果をディスプレイに呼び出す。ボリス・コーネフが調査内容を読み上げる間、顎に手をやってメルカツツの忘れ形見に視点を結んでいたシュナイダーは、読み上げが終わつて沈黙が訪れてもしばらくの間そうしていた。一体どうした事情でこんなことになつていいのか、常識人を自認する彼には到底想像もつかない。考えることをあきらめたのか、シュナイダーは表情の力を緩めた。

「どこに行けば会えるかな」

そう尋ねたのは返答を期待してのことではない。これからの方針を固めるための入り口を探る程度のつもりで口にしたのだが、フェザーンの辣腕家は「まあアテがない訳でもない」とこともなげに言つてのけた。

「だがその前に行く場所がある」ボリス・コーネフはそう続けると大儀そうに機器の電源を落として、携行しているマイクロフォンに向け「マリネスクに繋げ」と指示した。端末のAIが指示に従つて彼の副船長を呼び出している間にボリス・コーネフは立ち上がつてもう出かける様子だ。

「まずはそのIDを本物にしよう。さっきの答え合わせもせねばなるまいしな」

ろくな説明もしない船長が歩き出すのに、二人は否応もなくあとに続いた。

三人がマリネスクに案内されて到着したのはどうやら帝国軍の施設のようなものである。久々の再会に互いの壮健を喜び合った後、マリネスクはいつもの柔和な雰囲気ですユナイダー達二人に微笑んだ。

「うちの船長を訪ねてこられたのは正解でしたな。お二人の旅の到達地点がかなり近づいたと言っても過言ではないでしょう」

「おいマリネスク、シュナイダー中佐はともかくポプラン中佐に親切にしてやる必要はないぞ」

ボリス・コーネフが面白くなさそうな様子で言つてよこすのに「差別反対！ 権威主義者の横暴と断固戦うぞ」とポプランが応酬するが例によつて船長には取り合う様子がない。「なんの権威だか……」と憎々しげに言い捨てる。

「ですが船長、良い商人というのは言葉にして取引の成功を請負うものでしょう」

マリネスクの正論にボリス・コーネフは盛大な鼻息を返す。

「誰にとつての良い商人なんだ？ 良い商人でいるためには良い客を選ぶところから始めねばならん。ポプラン中佐には莫大な貸し付けがあるじゃないか。地球での負債をまったくもつて償却してないんだからな」

反論をするかと思われたポプランは両肩をすくめシュナイダーに目配せをしただけだった。どうやら思い当たる節があるらしく、シュナイダーはどちらの言い分もやり過ぎることにした。

「ところで行先は帝国軍関係らしいが、どこを訪ねるつもりなんだ」

精巧な偽造IDとは言え、軍関連の施設であればそこにミクロンの不審があればたちまちに嘘は看破されてしまうだろう。二人が名乗るランペルツやシーフェルデツカーの本物の知己が一人でもいれば疑惑はあつという間に確信に変わる。まず収監は免れまいし、下手をするとスパイ容疑で極寒の流刑地へ永久追放なんてことも十分にあり得る。半ばある種の覚悟をもつてこの旅をしているシュナイダーだが、志を達しないまま旅を終えることは望んでいない。できれ

ば穏当に目的を果たしたかったのだが、同行者の珍行動や目的である探し人の現状がそれを許さず、思いもよらない方向へどんどん進んでいるのを如何ともしがたく感じている。

「シュナイダー中佐、まあ心配しなさんな。お宅らの心配事のいくつかはここで解消するだろう」

地上車のまま施設の検問を通り抜けたところで、ボリス・コーネフは暢気な様子で言った。

「ま、高くつくがね」

案内されたのは簡素な内装の執務室だった。部屋の住人は執務卓前のソファアセットの一角に陣取っていて、ディスプレイを眼前にくつも展開させながらコーヒーを飲んでいた。室内に入るなりポプランが間の悪そうな表情をしたのをシュナイダーは横目に認めつつ、その人物が誰であるのかすぐに察知して気持ちが悪くなるのを感じた。なんとも大物を引き当てたものだ。コーネフ船長にこんな伝手があるとは、と感心したが地球での出来事とこれまでのイゼルローン共和政府の歩みを考えればそんなに不思議な取り合わせでもないことはシュナイダーにも理解できないことではない。ただ急な訪問に相手方が時間を割いてくれるということに驚いていた。よほど親密な関係にあるらしい。

「やあコーネフ船長、今日は随分と随員が多いようだな」

こだわる様子もなくソファの人は気軽に声を掛けて寄越した。カップをソーサーに戻すと静かに立ち上がる。ボリス・コーネフに対する態度からしても、両者には何らかの利害関係があると見えた。

「おや、見知った顔だな。卿は確かポプラン中佐だな。おや卿にも見覚えがあるぞ」

そう言われてシュナイダーは背筋を伸ばした。彼の方が一方的に知っているのは不思議なことではない。相手は超のつく有名人である。しかし先方がシュナイダーを見知っているとは思ってもよらなかった、面識はなかった。

「ベルンハルト・フォン・シュナイダーと申します。メルカツツ提督麾下

下におりました、ワーレン閣下」

シユナイダーの敬礼を受けて、今や元帥となったワーレンの両目が大きく瞠られた。

「どこかで見た顔だと思っただらそうか、メルカツツ提督の副官だったな。生きていたか！」

古くからの知己を迎えるように、ワーレンは親みをこめて彼の肩を二度、労わるように叩いた。

アウグスト・ザムエル・ワーレンはこの年三十八歳。カイザー・ラインハルトに任せ、ついには建国の功臣として元帥に叙せられていた。ワーレンは帝国に七人存在する元帥のうちの一人で、いまだ空席の次期軍務尚書との呼び声も高い最重要人物の一人だ。

「では用件を聞こうか。私もそれほど時間があるわけではないのでね」

鷹揚にそう言って寄越したが、どれほどの時間も本来はないであろう。僅かでも面会を申し込んでその日のうちに時間を作るあたり、ボリス・コーネフが与えるワーレンへの影響は無視し得ないほどであるらしかった。

「用件は二点です。閣下」

人数分のコーヒーがそろったところでボリス・コーネフが口を開いた。ワーレンも寛いだ様子で話を促したが、マリネスクを含む残りの三人は居心地の悪さを完全にはぬぐい切れずに来客用の深いソファに収まっていた。

「まず一点目は閣下をお願いしたいことです。二点目はご提案ですが、一点目のお願いを聴いて頂くにあたって閣下への見返りになるものですよ」

ボリス・コーネフの発言を聞いてワーレンは唇の端で微笑した。黙したまま続きを促している。

「これなる二名ですが、フェザーン入港にあたって偽名の旅券を用いております」

ポプランがギクリとしたように背筋を伸ばしたが、当のワーレンは平然としたまま「さもあろう」と相槌を打った。旧同盟政府及びイゼ

ルローン共和政府の関係者、また軍籍にあったものの自由な往来はまだ許されていない。特別の許可があった場合も帝国の監視下においてのみ実現可能となる。ワーレンがその程度のことを弁えていないはずはない。

続きを話そうとボリス・コーネフが口を開くや否や、指を鳴らして「わかったぞ」とワーレンは陽気に遮った。

「卿らの要望というのは、その偽造旅券及びIDに私の保証をつけよ申すのだろう。違うかね」

「閣下その通りです」

大袈裟な抑揚をつけてボリス・コーネフが合いの手を入れた。いかにもフェザン商人と言われそうな仰々しさである。この手のやりとりは普段から行われているのか、ワーレンは気を悪くするでもなくやり過ごす体である。上司の醜態に恐縮したマリネスクが目頭を押さえるので、シュナイダーは軽く彼の肩を叩いてやる必要があった。

「ただし一筋縄ではいかんぞ。いずれ精巧なものであろうが身分を偽るのだ。こちらで新しいものを用意するほうが話が早いのではないかな」

ワーレンが言うのへ「閣下、お気遣いなく」とフェザンの辣腕家が二人のIDを差し出して遮った。ワーレンは近侍の部下にそれを渡し携帯端末のディスプレイに情報を呼び出させた。しばらくディスプレイに目を落としていたワーレンだったが、読み進めるにしたがって得心のいった様子である。

「なるほど、そういうことか」と、感慨深げにつぶやいた。「帝国元帥に話をねじ込んできた道理というものだ」

どういふことかと訝しんでいる同行者たちにボリス・コーネフが説明を加えた。

「シーフェルデッカー、ランペルツ、他にもあるようだが、これらのIDは帝国軍の諜報部に付与されるコードネームなのさ。しかも上層部御用達、ランクにしたら超S級とでもいふべき高級IDというわけだ」

そういう話はシュナイダーも噂程度に聞いたことがある。何も戦

争は艦隊戦や白兵戦だけではない。諜報戦という舞台もあり、これの如何によつては実際に戦闘を行う前に勝敗が決することもある。暗殺や潜入も行う特殊工作員がそれだ。

「不死の兵というやつだな。死亡確認がされれば、時を経ず誰かがランペルツなりシーフェルデツカーとして蘇るわけだ」

「まあ、そういうことであるな。新たなランペルツとシーフェルデツカーが生まれていないところを見ると、卿らにこのIDを付与した人物は、こうした背景を正確に洞察した上に、両名の死を巧妙に隠滅していたというわけだ。これはほかも調査をする必要がありそうだな」

ポプランの推察にワーレンはさして深刻ぶるでもなく言つてのけた。

「これはとんだドジをやらかしまつたかな」

ポプランが自嘲気味に言った。帰還後キャゼルヌへの借りが大きく膨らむのを感じてそういつたのだろうが、ボリス・コーネフはワーレンの前にも関わらず「はん」とガラ悪く遮つた。

「キャゼルヌの旦那のことだ。こうなることくらいどうにお見通しだろうさ」

ほかのIDの調査など不要だと言下に彼は言つたわけだが、そこは抜け目のないワーレンのことだ。必ず調査を行うだろう。ボリス・コーネフは胸の内でもひそかにキャゼルヌにわびたところだった。

「よかろう。私がこのIDに権限を付与すれば大抵の場所は怪しまれずに出入りできる。だが卿らの旅の目的は何だ？」

ここまでの大掛かりな仕掛けで、しかも旅の途中でこうした邂逅があることを織り込んでいる。よほど重大かつ秘匿性の高い目的を持つているはずだとワーレンは問い質しているのだ。自分の庇護下に置くのだから全容はともかく行動の目的は把握しておくべきだろうし、万一それが帝国にあだなす類のものであれば言うまでもなく拘禁の対象だ。こうして訪ねてくるからには不穏な目的でないと予測はついているだろうが、コーネフ船長の言うワーレンにもたらされる見返りとやらで払いきれるかどうか。貴重な帝国元帥の時間を割かせたうえでの商談である。この一件で片が付くかも怪しいとシユナ

イダーは考えていた。よほど大きな利益をワーレンにもたらさなければ足りぬ。よもやもすれば、この件が済んだのちも自由の身となれる保証はない。一生涯シーフェルデツカーとして生きることすら覚悟せねばならないだろう。

「だがそれも一興」シユナイダーは呟いて表情を引き締めた。どうせおまけの人生だ、と言い聞かせる。ゾフィーに会って、メルカッツのその後語りができれば、他に彼に生きねばならない理由はなくなる。少なくとも、彼自身の価値観に於いてその人生は完結するのだ。父母や年の離れた妹や旧家臣たちのことを考えなくてもないが、メルカッツとともに旧同盟に亡命した時から、自分は死んだ者も同然で一族もとつくに諦めているだろう。彼の後ろ髪を引く者は誰もいないはずだった。

「ポプラン中佐、ここから先は私一人の方が良さそうだ。ユリアンたちの元に帰ってはどうか」

大真面目に言われてポプランは大声で笑った。帝国元帥の執務室であることをすぐに思い出して首をすくめたが恐縮する様子はない。シユナイダーが言わんとすることを察したうえで、それが善意によるものであったとしても、他人が推すところを容れる性質ではないのがこの男だ。それにすでに乗りかかった船である。

「なに、都合が悪くなったらその時はその時だ。せつかくだから、メルカッツ提督の令嬢のご尊顔を拝したいじゃないか。つれないことは言いつこなしだぜ。それに……」

言葉を切つてちらりとワーレンへ視線を投げる。ワーレンは柔らかな表情のまま小首をかしげた。

「帝国元帥の面前でする相談じゃないと思うがね」

「貴官らしいと言えば貴官らしいが」

と言いながらシユナイダーははつとした。ゾフィーのことはワーレンに伝えていないのである。しかしポプランの発言は取り返しよいうもなく、メルカッツの令嬢というフレーズにワーレンは特別な関心を示した。

「メルカッツ提督に娘御があるというのは聞いた話だが……、という

ことは卿らの隠密行動は旧イゼルローン共和政府や旧同盟政府の意を汲んでのことではないということか？」

シュナイダーは正直に今回の行動についてワーレンに白状をすることにした。メルカツの最後を看取ったものとして、また同盟への亡命を勧めたものとして、彼の家族に会ってその様子を伝えに行くのだと。話を聴く間、ワーレンはいくつか質問を挟んだが最後には笑いを含んだ表情ですががしく言った。

「たったそれだけの為に卿らの同胞はこれだけ大掛かりな仕掛けをやりおせるのか。酔狂なものだな」

政治的な目的も、軍事的な企みもなく、ただ故人の旅の完結をその家族に伝えるためだけに、帝国軍の中にも秘されたスパイ専用のIDを使用し、それにかかる費用をも捻出するのである。これを酔狂と言わずして何を酔狂というのだろうか。帝国軍にあつて開明的であると評されるワーレンをしてそう言わしめるのである。

「なかなか良い話を聞いた。……ではそろそろ商談に移ろうか。卿らがもたらす見返りとは何だ」

鋭い眼光をもって言うワーレンへ、おほんともったいぶった咳払いをしたボリス・コーネフが、静かにしかしはつきりと声を出す。

「閣下がひそかに追っておられるロート・アドラーの調査及び討伐のお手伝い。そして連中の主な産業であるサイオキシン麻薬の販路の解明と撃滅のお手伝いです」

ワーレンはいったん表情を引き締めたが、すぐにそれを崩すとかかる天秤の重さをはかる様子だ。そしてどうやら商談は成立するようである。

「確かにロート・アドラーと称する輩どもには手を焼いている。奴らは真正正銘のテロリストだ。討滅も時間の問題と思うが、それもかかればかかっただけ被害が広がるのは実に悩ましいところだね。卿らのみを頼みにするわけではないが、いいだろう。卿らのIDを本物にする代金としてその申し出を受けよう」

「ありがとうございます」

恭しくボリス・コーネフが礼をするのに続いてシュナイダーとポプ

ラン、マリネスクも起立し、銀河に七人しか存在しない元帥の一人に敬礼を送った。

幾つかの条件や禁則事項を確認したのち、四人はワーレンの元帥府を辞した。その帰路、それまで黙っていたポプランが盛大にため息をついた。

「またまたサイオキシンの麻薬がらみとはな」

心底うんざりした様子でこの経緯の元凶たるフェザーン人を冷ややかな目つきでにらんだが、当の本人はごまかすように口笛を吹いている。

「青春の苦悩ってやつのは、あんたは歩く博物館なんだろう？」

「なっ」と絶句したポプランが、開いた左手に右拳を打ち付ける。「くそ、ユリアンの野郎べらべらと……」

明るい褐色の髪を乱暴にかきむしって呪詛の言葉を並べた元撃墜王は、しかしすぐに表情を引き締めると述懐した。

「しかしお前さんもサイオキシンの麻薬には地球で懲りたんじゃないのか」

地球教の地下教会で、食事に混ぜてサイオキシンの麻薬を無理に摂取させられたあげく、軽い中毒にかかった経験を持つ二人はしばし沈黙したが、やがてボリス・コーネフが神妙な様子で口を開いた。

「商人にとって禁忌の品と言うのは、損益を分ける究極のコンテンツだね。一度取り扱えば莫大な利益をもたらすが、二度と足抜けはできない。商人としても人間としても破滅へのカウントダウンが始まるのさ。触れなければよいという類のものでもなく、存在するだけであらゆるものを毒してしまうし、国だって滅ぼしてしまう代物なのは人類の歴史が教えてくれているじゃないか？」

「腐ったミカンといったところか」

何の気なしにポプランが言うと、マリネスクがこほんと咳ばらいをする。

「地球近代のアヘンや、シリウス戦役の液体麻薬のことですな」

「だから、腐ったミカンのだろうが」

「まあ確かに懲りた。懲りたからこそだな。あんなものはなるべくな

ら世の中に出回ってもらいたくない。それに……」

それに帝国元帥に恩を売るチャンスが呑気にお土産付きで歩いてきたんだから利用しない手はないだろう、と元フェザーンの辣腕家は上機嫌に言った。

「コーネフ船長」

二人の会話にシュナイダーが口を挟んだ。自動運転中の地上車の後部座席に座っていた彼は運転席のボリス・コーネフへ怪訝そうに言葉が続ける。

「お土産付きとはいったい？」

真面目顔の帝国人に、自由商人はいたずらっぽく笑ってみせた。抑揚をつけながら一文一文を区切りながら軽妙な語り口で説明をする。

「あんたらはメルカツ提督の一人娘を探している。その一人娘は武装商船団のオーナーで賞金稼ぎ紛いのことをやっているときた。しかもその商船団とはある宇宙海賊と抗争中で、調べてみるとこの宇宙海賊はロート・アドラーの構成集団だという。以前から伝手のあったワールン元帥がロート・アドラー討滅の任にあたっていることは周知だったので、地球からの知己を利用して売り込みをしたってわけだな。帝国軍スパイのIDを持っている元軍人が小道具を利かせてくれたから話が想定の数倍早く進んだって寸法さ」

なるほどとうなずいたシュナイダーだが完全に得心がいったわけではない。あまりにも話の展開が滑らかだ。確かにワールンの損になる話ではないが、ことに対して招き入れられた懐が広すぎやしないか。何かワールンとボリス・コーネフが連帯する深遠な目的があるはずである。

黙っているシュナイダーの心中に察しがつくのか、ボリス・コーネフは正面を向いたままうそぶいた。

「まあせいぜい稼がせもらうさ。あんたらへの貸し付けは必ず回収してやるからな」

「何か悪だくみをしているな？」

ポプランが割り込んでにやにやと笑う。「中佐、この男はフェザーン商人を地で行く悪徳商人だぞ。油断していると俺たちも値札をつ

けられてしまうぜ」

言われてボリス・コーネフは悪い顔をする。

「さつき売ったところだろうが」

「違うない」

シュナイダーとポプランが同時に笑うと助手席のマリネスクが呆れてみせる。シュナイダーはようやく気分を落ち着かせたが、くだらない話をしているうちに点と点が線で結ばれ合っている可能性に思い至った。

「サイオキシシン麻薬……、ワーレン元帥……、テロリスト……」

うつむくシュナイダーの表情に陰りがありありと広がっていく。

「これは、もしやすると」そう言いかけて突拍子のなさを、続く自分のつぶやきを感じ一旦は睡ごとのみこんだが、一度のみこんだものはかえってその実像を、明白さをもって浮き彫りにするようだった。はつと顔をあげたシュナイダーは、隣に座るポプランに視線をぶつけて、その勢いのまま疑惑を口に出した。

「地球教か」

ほとんど反射的にポプランが「はっ」と嘲るように表情を弾かせる。

運転席にいたボリス・コーネフは深い息をついた。

「そう、ロート・アドラーは地球教の残存勢力のひとつと目されている。それゆえにワーレン元帥の追跡を受けているのだろうな。これは公然とされたものではないが、対地球教施策の全権限は憲兵隊でも内国安全保障局でもなく、ワーレン元帥のもとに帰するという噂だ」

ひとしきりの沈黙の後、助手席から車内を振り返ったマリネスクの目に映ったのは、それまで放埒にあちこちに飛び散っていた意識の飛沫が、情熱にも似た暗く強い意識によって収斂されていく様子だった。いまいましさを強烈に表情に浮かべて笑ってみせたポプランが、皮肉に口をゆがめてはなつた言葉が再び四人を沈思させる。

「いよいよ因縁めいてきやがったな」

シュナイダーたちは、因縁の教団によって斃れた人たちの名を胸に浮かべ慄然とする。コルネリアス・ルッツ、パウル・フォン・オーベルシュタイン、そしてヤン・ウエンリー。ほかにもかの教団に運命ご

と振り回された人々は多い。属する組織も放つ光も、歴史が下す評価も異なる人々であったが、それぞれに宿るテロリズムへの憎しみは共通したものだ。通じたものだった。

新首都星フェザンから旧帝国側へ伸びる宇宙航路は、主要なものが五つあり五大航路と呼ばれる。五大航路は様々な恒星系を経るものの、すべての航路がオーデインに至るが、重視されているのは何も利便性ばかりではない。これは旧門閥貴族時代の悪癖の名残で、往年の貴族同士の微妙な力関係や利権が絡みあつて、とてもではないが整備されていると言えるものではなかった。

これは関税や通行税といったあらゆる名目で貴族たちが利権を貪るための方便で、ひどいものになると経路するだけにもかかわらず税のかかる集積地すらあつた。本来通行税などは、航路の安全を保障するもので、貴族たちが自領の航路を警備したり整備するために使用されるいわゆる権利だったのだが、後年は自由惑星同盟との戦乱も手伝って荒れ放題にも関わらず、しっかりと徴収だけはされていたりもした。これには当初、軍の運用にも大きく影響を及ぼしたりしたが、カイザー・ラインハルトが帝国宰相になつてのちは有名無実化していたが、民間船が往来するにはまだまだ整備が必要な状態であつた。

フェザンへ本拠地を移した帝国航路局が最初に着手したのが、これら猥雑な航路の整備で、成果といえばようやく主要航路の整備が終わったところだった。これによって使用されなくなつた物資集積基地や電波中継基地が山のように出てきたのは言うまでもない。

ローエンングラム朝は強力な中央集権制が敷かれており、ゴールデンバウム朝時代のような貴族による統治というものが一部例外を除いて取り払われつつある。現王朝が勃興するに際して協力をし、かつリップシュタット盟約に参加しなかつた貴族たちが例外的に領地の統治を認められているが、これもいずれは廃されることになるだろう。何せローエンングラム朝における貴族最大の功労者たるマリーリーンドルフ伯爵家が、領地の返還をしたのはつい先年のことである。マリーンドルフ家の一人娘が現皇太后なのだから当然のように思いがちだが、旧来の貴族的思考からすればこれは異様な出来事だつた。

そもそも貴族にとって帝室は形式上神聖不可侵であり、宇宙におけ

る唯一絶対の統治者たる皇帝を擁するものだが、実際には権威として利用すべきものである。まず血筋が重要であり、それを家格が保証する。帝室の威光などというものは、自分たちの血筋や家格を権威づけるための彩にすぎない。すなわち一族から皇妃が出ようが皇帝が出ようとも、帝室よりも自分たちの家が大事なのである。つまりいかに一族の人間が帝室に連なろうと、自分たちの領地を返上するものなどあるわけがないのがこれまでの常識であり通念だった。

ところがこれを、現当主であるマリーンドルフ伯フランツは、カイザーラインハルトの生前に行っていた。これによりマリーンドルフ家は門地をもたず、公職に就くことで帝国から支払われる俸給でのみ生計を立てねばならぬことになる。もはや遊んで暮らせる環境ではないし、あらゆる特権を失したのである。後世の歴史家の一部には、これはカイザーラインハルトが、マリーンドルフ家の一人娘であるヒルデガルドを皇妃に迎えるにあたり、当時の国務尚書の地位を返上しようとするフランツ・フォン・マリーンドルフを思い留まらせるために打った一手であると主張する者がある。事実フランツは国務尚書に留まり、以降定年を迎えるまで政務についている。またマリーンドルフ伯爵家が領地の返還を行ったことにより、わずかに残っていた門地を領有する貴族たちも次々とマリーンドルフ家に倣うことになった。これにより没落しきった家もあつたが、もとより旧王朝時代にローエングラム家を支援した家々である。当時において低能なものが多くあるはずもなく、大体の者が公職に就き俸給で暮らしを立てたという記録が残っている。

こうした背景で旧王朝時代に門閥貴族たちの領地で継ぎ接ぎ状になっていた領内は、ひとつの方針と法則に則った宇宙管区制度によって整備されつつあった。そのため使われなくなった航路や宇宙港が各地に多数発生することになり、宇宙海賊の蠢動に一役買っているのは強力な改革の副作用とも言えるだろう。放棄された補給基地は宇宙海賊や賞金稼ぎたちの格好のねぐらなのである。そしてそれはゾフィーが率いるヴォルフス・ブリガーデなどにとっても同様で、ここ旧クラインゲルト領内にある補給基地ヴェルニゲローデ・ツヴァイ

はいくつかある隠れ家の一つだった。

「ヒルデブランド、お嬢は司令官室か？」

ミハエル・オルトリンゲンは帰投するなりパイロットスーツのままタンクベッドへ潜り込んでいた。来年には四十歳になるせい、近頃戦闘後の疲労がなかなか抜けないのをひそかに悩んでいる。いくら寝ても起床後に身体が重いのも悩みの種だった。

彼の僚機を務めるヒルデブランド・シュトライゼマンはミハエルよりも三歳の年長だが、こちらは強靱そのもので肉体の衰えなどない様子である。彼が言うには、酒とたばこがむしろ精神の疲労が肉体に蓄積するのだそうだ。ミハエルからすれば何かと禁欲の度が過ぎるヒルデブランドだが、抑制している欲求はヒルデブランドの場合食欲とトレーニング欲に発散されているらしかった。よくもまああの体型でワルキューレのкокピットに収まるものだと思ふ。常にトレーニングを怠らない彼の肉体は鋼そのもので、кокピットが快適なものになるとは到底思えない。パイロットなどより、よっぽど白兵戦向きだろうとささやかれるが、これまた皮肉なことに戦技の腕前はからつきしとの噂だった。

「ヤツは血が怖いのか。だからパイロットになった」

そう噂されているが、実際のところ荒くれものの集まりであるパイロット溜まりでも、ヒルデブランドは品行方正で通っており、どちらかと言うと暴れがちな僚友たちを宥めすかすことが多いという。言って聞かないものをその剛腕で最終的には羽交い絞めにしてしまうという話だが、どこまでも気の優しい熊という形容がぴたりとくる物腰だった。

ミハエルが彼らの首領であるゾフィー・ドロテア・フォン・メルカッツの居場所を尋ねたとき、ヒルデブランドはクロスワードに興じていた。とつくに戦闘の汗を流して軍装に戻っている。剃刀まで当てたらしく、彼のかみ合わせのよさそうな下あごは清潔に剃り上げられていた。

「多分展望アツキだろう。例の件についてか？」

クロスワードから目線を移して、ヒルデブランドは巨体に似合わぬ俊敏さでリクライニングシートから起き上る。あくびを噛み殺しながらミハエルは鷹揚にうなづいた。

戦闘後、二人は帰投しながら置き去りにしてきた戦況を追える限り追っていた。戦域を離脱した直後に飛来した宇宙港警備隊は、あつとも言わぬうちにただの一機に散々打ちのめされたがこれは二人の予想通りだった。しかし両者が互いに増援を投じた戦闘の後半戦では状況ががらりと変わったのである。圧倒しかかるロート・アドラーの編隊が不思議と警備隊の増援相手に精彩を欠いたのだ。十五機対三十八機、数の上では警備隊が圧倒的に有利だろうと思うが、練度がまったく違うためこの場合は的が増えたと言うのが適当だろう。

ドッグファイトは艦隊戦や白兵戦と違い、数が多ければいいというものではない。無論両者の技量が拮抗していれば数の多いほうが勝つ。技量が若干相手を下回ったとしても、連携がとれていればある程度は数の多いほうが有利だ。しかし空戦技術に圧倒的な差があれば話は違ってくる。例えばオリビエ・ポプランなどにとっては雑兵が十や二十いたところで射的の当たりが増える程度のもので、エースとそれ以外の差は絶対的なものだった。

精彩を欠いたと言っても結果は帰投後のポプランが歯ぎしりを禁じ得ないような内容だったし、数的には倍以上の警備隊相手に損耗率で拮抗したのだから、ロート・アドラー側の善戦と言えよう。結果だけ見ればその通りなのだが、実際に砲を交えたミハエルたちからすれば、現存の警備隊クラスでは瞬く間に全滅してもおかしくないほどの技量差が両陣営にはあったはずなのだ。にも拘わらず、善戦したのは警備隊の方で、三分の二ものワルキューレが生き残ったことに二人は驚いたのである。

ヴェルニゲローデ・ツヴァイへの帰路、二人は戦域に残してきた使い捨ての監視衛星から送信されてくる戦闘ログを解析し、両陣営が拮抗した原因のひとつに行き当たった。

「明らかに飛びぬけた性能の持ち主が参戦している。しかしたった一

機でこうも戦況をコントロールできるものかね」

うなるようにミハエルが感想を述べるのを、ヒルデブラントは静かに沈思しながら聞いていた。一機ではない、長い沈黙の後、巨漢の僚友が言うのにミハエルは視線で続きを促す。

「一機撃墜しているこのマーカーのワルキューレ……」

戦闘ログをシミュレーターに反映させた三次元モニターの画面を太い指で指し示しながらヒルデブラントは慎重に言葉を発した。

「動きがまるで影だ。このエース機とのコンビネーションは熟練の域を超えているぞ」

「なるほど、エース機の華麗さに隠れてはいるが、攻勢にも守勢にも理想的な支援を演じているな。警備隊側に思ったほど損害が出なかったのもこいつの働きが大きそうだ」

二人は口をつぐんで、ほとんど同時に互いの目を見合った。

「似ているな」

ヒルデブラントの言葉にミハエルも即座に同意した。

「こういうことのできる人物を俺はよく知っているが、しかしこんなニアミスがあるか？ ペトラ様は交易商人に身をやつしてまであなたを探されているというのに」

発見した驚きに天井を仰ぐミハエルの横顔を眺めつつ、ヒルデブラントも小さく自信なさげにつぶやく。

「確かにあのお方ならこういうことができるだろうが、同盟が滅亡してからずっと行方知れずだし、この時期にフェザーン付近におられると言うのも少し状況的に考えにくい」

「ああ」とミハエルは首肯したがやはり自信なさげに首筋を右手で押えると再び天井を仰いだ。「しかしこういうことのできる人というのは、まず間違いなくあのお方だろうな」

二人はそう結論付けると、ヴェルニゲローデ・ツヴァイヘ入港するまでの間それぞれの物思いに耽って静かに過ごした。すぐに彼らの首領に報告しなかったのは、この仮説に確信めいたものを感じつつも傍証がひとつも得られないからであった。仮説を成り立たせるための傍証に仮説を立てねばならない思考的作業はなかなか空しいも

のだったが、二人はそれでもこの可能性について希望的観測以上の予感をもって結論をつけざるをえなかった。何よりこの仮説の正しさを証明して、彼らの女主人を、ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカッツを喜ばせたかったのである。

帰投後二人は考えるのに疲れて一旦休息を取ることにした。ミハエルはタンクベッド睡眠で肉体的に、ヒルデブラントは思考をリフレッシュさせるためにクロスワードに、それぞれのいつも通りの休息方法をとった。

帰投してからはすでに二時間が経っている。ここまでの帰路に二人が導き出した仮説を、結局傍証たり得る傍証の仮説もまとまらなかったが、とにかく可能性についてゾフィーに話すだけの心積もりがついたのである。

「行くのならシャワーを浴びてからにしろよ」

「うん？ お嬢が気にするとは思えんが」

無精に生えた短いあごひげを右手の甲でさすりながら、ミハエルはパイロットスーツの襟を反対の手で掴んで形のいい鼻を近づける。ほんの少し表情を歪めたが、まだ面倒な気分はぬぐえないらしく逡巡する様子が表情に浮かぶ。僚友の迷いを読み取ったヒルデブラントはほんの少し背中を押す言葉を口にした。

「副司令官どのが帰還されている。それで展望室というわけだ」

「なに、ペトラ様が戻っておられるのか！ なぜ早く起こさなのだ、こうしてはおられん」

言うやミハエルは勇躍してシャワールームに向かった。ヒルデブラントは鼻息を強く吹くと「やれやれ」と大きな手で最近薄くなってきた青黒い髪をかき回した。彼にもささやかだが悩み事はある。

「しかしうちの連中はすっかり姫様たちの尻に敷かれちゃって……」

髪をかき回した手に数本の頭髪が絡みついていてのを見つめて、ヒルデブラントは盛大にため息をつく。

「まあ今に始まったことではないか」

シャワーを浴びてすっかり身嗜みを整えたミハエル・オルトリンゲンが、ヒルデブラント・シュトライゼマンとともに展望デッキに向かったのはそれから三〇分が経った頃だった。

展望デッキは部屋というよりも大きな空間である。半球のドーム状になった天井一面に光学スクリーンがはり巡らされており、さながら宇宙空間に身一つでいられるような感覚を持てる。普段狭いコクピットから宇宙に臨む彼らにとっては奇妙な違和感を伴う空間であつたが、彼らの主人たちはこの場所がお気に入りなのである。ゾフィーとペトラが二人で相談事をするときはまずここにいて間違ひなかつた。

二人が展望デッキへ入場すると目当ての人物はすぐに見つかった。ドームのほぼ中央に円状に配されたソファースペースがある。展望デッキは一般にスタツフに開放されていて、簡易なカフェテリアがあるため他にも人影はあつたが今の時間は閑散としている様子だ。ソファース席に近づくと、件の人物のうち小さいほうの人影が軍装の男たちに気付いた。手には小さなカップを持っている。どうやらミルクをたつぷり入れた紅茶を飲んでいるようで、あたりには乳成分と茶葉の入り混じった芳香が漂っていた。

「ミハエル！」

声に喜色を含ませて忠臣に呼びかけたのは、ミハエルの忠誠の対象たるペトラである。今年二十一歳になるペトラ・フォン・シュナイダーは、ヴォルフス・ブリガーデの副司令だ。貴族出身でありながらこの年で商才に長けており、主に経営面でのブレーションとしてヴォルフス・ブリガーデに重要な座を占めていた。

ミハエルはペトラの生家であるシュナイダー子爵家の旧家臣で、ありし日はペトラの護衛士を務めていた。今は時代が変わり子爵家の当主である彼女の父が門地を帝室に返上したため、貴族ではあるが働かずに食えるというわけにはいかなくなり家臣団を解散したのだが、ミハエルは今でもこの旧主に忠誠をささげている。

一方のヒルデブラントの方はと言うと、こちらも同じような事情ではあるが彼の忠誠の対象はゾフィーだ。二人ともパイロットを兼任しているが、本来の役目はそれぞれの主人の副官であり家令であり騎士だった。

名を呼ばれてミハエルはその場で跪いた。恭しく「おかえりなさいませペトラ様」と普段は発しないバリトンを響かせた。日頃の鷹揚さは為りを潜め、姫君に仕える従僕として完全無欠な仕草である。ペトラは駆け出して行って膝をついているミハエルの肩にそつと手を置いた。

「心配した？」といたずらっぽく言う彼女を仰ぎ見て、ミハエルは「この次はお供しようございます」と返す。満足げに笑い合うペトラ主従を見て、ヒルデブラントは毎度のようにやれやれと眩くと肩をすくめた。

「さあ、みんなこちらへいらっしやい。二人もコーヒーでいいかしら」律動的な声音でゾフィーが誘うと、三人はソファアへと移動して車座になった。コーヒーと紅茶の香りが漂う中、最初に口を開いたのは座長でもあるゾフィーである。開始のセリフは質問の形をしていた。「先のフェザン宇宙港周辺での戦闘について、何か報告があるのか？」

ゾフィーの質問には暗黙的にヒルデブラントが答えるようになっていた。巨体の持ち主は少し僚友の方を見やって話を始めた。

「これは報告と言うより仮説の提唱です。先の戦闘でロート・アドラーのワルキューレ部隊と、フェザン宇宙港警備隊との戦闘を解析した結果、飽くまで仮説ではありますが警備隊側のパイロットに、ベルンハルト様がおられるのではないかという結論を得ました」

報告を受ける側の二人は文字通り絶句した。驚きが喜色へ転じるその一瞬にヒルデブラントは釘をさすようにもう一度「飽くまで仮説です。想像と希望の産物にすぎないかも知れません」と言う。

「ですが、あなた方がここでそう報告するのですから、何らかの確証をもっているのでしょうか？」

ゾフィーの声に逸る気持ちを抑える成分が多分に含まれているこ

とを認めて、ヒルデブランドは期待通りの喜びを感じるとともに、冷静にならねばならない自分の役目についても思い至る。

「確証は得られておりません。戦闘ログの解析の結果、ベルンハルト様でなければ成しえない動きをする機体を発見したに過ぎません。かのお方の過去の戦闘ログとの解析結果が、六〇パーセント超一致することから現時点で結論づけました」

「あとは我々の勘です」

ミハエルが付け加えて言うと、ペトラは胸の前で両手を組み合わせたまま大きく息を吸った。しばらくの間躍動する鼓動を抑えるのに息を整えていたが、もう一度大きく深呼吸をして静かに言葉を紡いだ。表情には隠し切れない喜びが浮かんでいる。

「問題は、兄上がフェザーンで何をなさっているかですね」

ペトラが健気に強い表情で場を集約した。もはやペトラとゾフィーは、それと思しきパイロットがベルンハルト・フォン・シュナイダーであると確信している。そしてその希望は事実の核心を捉えていたのだが、かの人の目的が自分たちを探しているということも含めて、当然ながら彼女たちには知る由がない。

何せカイザーラインハルトが崩御し、イゼルローン共和政府が難攻不落の要塞を再度帝国に返還してからというもの、ペトラのライフワークは行方不明の兄を探すことだったのである。

リップシュタットの敗亡から瞬く間に宇宙の反対側へ飛び去り、常に耳目の中心にある陣営に属し続けた彼女の兄の情報は、当時においてはわざわざ探さなくとも容易に入手することができた。

イゼルローン共和政府との最後の戦いで、兄の忠誠の対象たるウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツが戦死したことを知った時も、あらゆる伝手を利用して手に入れた戦死者リストに兄の名がないことを何度も確認し胸をなでおろしたものだ。

しかしイゼルローン共和政府が解散してからというもの、ここ三年ばかりは全くと言っていいほど消息が掴めなかった。それがここに来てようやく細い一本の手がかりを得たのである。喜びはひとしおで済まない。

ただシュナイダーを見つけてどうするか。ペトラはそれについて明確な方策を持つているが、今のところは無事を確認できればいいのみ仲間内には表明している。ゾフィーにはゾフィーの存念があるだろう。兄であるシュナイダーを見つけないという共通の目的はあるが、その動機たる情熱はまったく異なる。

「とにかくベルンハルト兄様については確証を得るためにも、フェザーン方面へ探りを強めましょう。先の案件のクライアントが帝国軍関係者だったから、今後の方策も含めて何か情報がないか調べておきます」

みながそれぞれにシュナイダーへ思いをはせていたが、ゾフィーがそう締めくくると一旦報告会は終了した。

「さきの依頼ですが、やはり失敗ですか」

少しとりなすようにヒルデブランドがゾフィーにうかがいをたてると、女首領はさすがに苦り切った表情をしたが、口に出しては返答とは別なことを言った。

「そもそも奇妙な依頼なのよね。どうもあの小集団と戦闘させることが目的だったみたいなのがあるの」

「どういうことですかい、お嬢」

ミハエルが崩した態度で反応したので、ペトラが手にしていた書類で彼の膝をはたいた。

「物資の裏取引現場を押さえる依頼だったじゃない？ 物は例のものという情報だったし、ロート・アドラーの構成組織だって言うから急行したけど、実際には猪口才なワルキューレに宙域を引っ張りまわされた挙句、見せつけるようにフェザーン宇宙港まで展開したのよ？」

猪口才な、という言葉にヒルデブランドが過敏に反応する。貴族の令嬢が口にしてよい言葉ではないのだが、不思議とゾフィーの放つ雰囲気には似合っていた。

「依頼の報酬はきっちり振り込まれているし、結果的には成功ということになるのかしらね。妙なお話だわ」

ゾフィーはそう言って大げさに肩をすくめた。

「しかし今後は素性の怪しいクライアントの依頼は充分にご検討くだ

さいね。報酬が支払われたからいいというものではないと思いますよ、ゾフィー様」

ペトラの諫言に五歳年長のゾフィーは丁重に詫びを入れた。「ごめんなさい」と頭を下げると自嘲気味に笑う。

「ロート・アドラーとかサイオキシン麻薬関連とか聞くと、ついブレーキが利かなくなるのよね。頭ではわかっているのだけでも」

そういつてゾフィーは場を和ませた。

空に太陽が一つ限りというのは人類が地球のみで生命活動を営んでいた時代の常識であるが、実際に複数太陽が存在する星系には、確認出来る限りどんな生命も活動をすることができないという。

非常に比喩的で独善的な表現ではあるが、やはり人類は頭上に二つ以上の太陽を仰ぐことはできず、今や単一政体にまとまったこの銀河において、全人類の太陽たる統治者は銀河帝国皇帝アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラムただひとりである。

全人類がローエングラム朝の臣民となったのはほんの三年ほど前だが、様々な事情や思惑によってその支配に浴さない集団も当然ながら数多く存在する。つい先だってバーラト星系内の自治を認められた旧自由惑星同盟に属する人たちですら、厳密には帝国臣民として存在しているわけだから、政治体制の思想を帝国と異とするなどということではない。

新王朝下にあつて共和主義者は今後思想犯には問われまいだろう。したがってそれ以外の不支配層とは単純に犯罪者やテロリストなどということになる。

そしてここにも銀河帝国皇帝を太陽と仰ぎ見ることをよしとしない人たちの群れがある。帝都フェザーンからそれほど遠くもない、リップシュタット戦役後打ち捨てられたままになっているとある補給基地には、ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカツの率いる商船団を軽く蹴散らし、シユナイダーとポプラン擁するフェザーン宇宙港第三警備隊と直角以上に渡り合ったロート・アドラーを構成する下部組織の一団の姿があつた。

一団は傭兵崩れの盗賊集団のように世間では言われているが、内実はそこそこの統率の取られている集団でどちらかと言うと軍隊然とした秩序をまとっている。旧地球教の狂信的なテロリスト集団であるロート・アドラーの中にあつて、この一団だけが異彩を放っていた。

投棄されたかのように見える補給基地は電波封鎖が施されている

らしく、よほど近づかなければ活動していることに気付かないほど静かである。ここにあることを知らねば、無数にある隕石小惑星群に混ざりこんで発見することも難しい。

民間輸送船に偽装された船が、帝国軍士官を載せてこの補給基地に到着したのは、シユナイダーたちがワーレンの元帥府を訪れた日から三日後のことだった。

基地に降り立った帝国軍士官は有能なビジネスマンを思わせる顔立ちの少壮の男だった。軍装ではなく一般人の装いだが、身のこなしや視線の配り方で、訓練された人物であることが知れる。

「これは准将閣下」

敬礼を寄越しながら近づいてくる男に油断なく視線を向けるが、相手が知れると准将と呼ばれた男はほっとしたように表情を緩めた。

「クローゼ曹長、壮健そうで何よりだ。公は自室かな？」

堅い握手を交わすと、クローゼ曹長に勧められた煙草を申し訳なきように断って目的の人物の居場所を尋ねた。

「きつと食堂でしょう。結局誰とも口をきかぬくせに、ここにいると寝るとき以外、必ず食堂におられます」

「お寂しいのだろう。お前がお相手して差し上げればよからうに」

そう言われると曹長は困ったように笑って「いや……」と言葉を濁した。

「艦内にカシユニッツ軍曹がいる。ぜひ声をかけてやってくれ」

「おお、今日はカシユニッツですか。久しいですね」

ドックに停泊する輸送艦を親指で男が指すと、クローゼ曹長は嬉しそうに応えてそちらに向かう。よく整理された構内を見渡し、男は少し安堵したように吐息すると、施設の奥へと続く回廊へ足を向けた。

室内にはよどんだ空気が滞っていて、多くの紫煙が垂直に天頂方向へと立ち上り、薄汚れた天井でわだかまっていた。もとは食堂だったが酒場のような風情に変わっている。

男が探す人物は食堂のほぼ真ん中に座を占めていたが、食堂にはたくさんの兵員が詰めているにもかかわらず彼の周囲にだけ、はばかり

ように人影がなかった。男が食堂に入ると、それに気付いた何人かが立ち上がって敬礼を送ってきたが、軽くそれらに応じると、他には座ったままでいいと仕草で合図を送る。髪をかきあげて少し気持ち悪く落ちてから、男は目的の人物へと近づいた。

「公、宇宙港の警備隊と戦闘になったとか」

男は自分よりかなり年少の男、と言うより少年と言った方がいいだろう。彼に対して、丁重さと横柄さを織り交ぜた口調で静かに話しかける。半分眠っていたような様子の少年は、物憂げに両目を薄く開けたが声をかけた男を顧みず応答する。

「准将か。わざわざ様子を見に来なくてもいいのだぞ」

「そうは参りません。座っても？」

許可を求められて少年は右手を対面の椅子に向けて指さす。それを受けて大柄な男はゆっくりと席に着いた。テーブルには戦場食であるレーションが、半ばまでであるが行儀よく片づけられている。大男が正面に座るなり少年は傍らにあつたカップ代わりのコップフェルを隠すように手元に引き寄せた。

「もう少し召し上がらねばなりませんな」

対面にかけた男を薄目で見て、少年は再び目を閉じた。コップフェルを覆う右手に、年に似つかわしくない幼児用の玩具が握られているのを見て、男はここに来た目的を思い出した。軽く咳ばらいをすると、それを合図のように少年は切れ長の目を再度開く。

「バーラト星系の共和主義者たちに自治の許しが出ます」

「そうか。ではようやく……」

右手の玩具に目をやり、少年は遠い目をした。年の頃は十一、二歳といったところか、少し痩せすぎていて身長もそれほど高くないだろう。しかし年長者を前に気負いのない振る舞いは、日頃から大人に対してそうした対応をしていることが窺い知れる。支配者然とした様子は堂に入っていた。

「ハイネセンが共和主義者たちの自治政府に委ねられても、精神病患者である伯爵を移送することはないと思われまます。今でもそれほど厳重な警備がされているわけではありませんが、自治政府下での決行

の方がより成功率は高まりました。ハイネセンへの潜入も容易かと思われず」

小声ではあるが男の声は腹に響く重たさを帯びている。声には少年を気遣う成分も微量に含まれていたが、多くは推し量るような、相手から何かを引き出すような伺い立てする雰囲気醸し出されている。室内の乾いた空気が男の発する低音に響くのを肌で感じて、少年はわずかばかり身じろぎをした。

最初からそうだったと少年は靄のかかったような過去の記憶を思い出す。男ははじめからいつも観察するような冷たい目でこちらを眺めていた。言葉の端々には優れた教養と冷たい知性を感じた。支配者に媚びず端然とし、そして仄かに嘲りを灯したような暗い微笑を放つ男の視線を、少年は九割の苛立ちと一割の怯みをもって浴びていた。

これは誰の記憶か、ずっと長い間少年の邪魔をしていたあの悪魔のような子供の魂の持つものに違いない。だが彼は自分で、自分はその子供から生まれた存在であることを今でははつきりと理解している。あの子供の、サイオキシン麻薬によって毒された精神から分離した、安定を得るために引き離された精神、それが自分の正体であると。

「子細は卿に任せる。しかし決行には私も連れていけ。もしこの願いを違えるのであれば……」

静かに言い募る少年に大男は諦めたように笑い声を漏らし渋面を作って見せた。

「公、願いは、仰りようも随分と変わられた」

「准将、私は変わったのではない。もう違う人間だよ。あの悪魔のような子供はとつくに死んだんだ」

少しの沈黙を挟んで、准将と呼ばれた大男は「そうなのでしようが……」とため息交じりに答えた。話題を変えるためか、少年は自分の背後にある給仕用のカウンターの奥へ振り返って視線を投じる。

「アードルフ、准将に何か身体の温まるものを」

気を利かせてカウンターの奥に姿を隠している老人に呼び掛ける。アードルフと呼ばれた老人が現れて、二人の方に頭を下げた。横目で

それを確認した男は、その老人がかつての新・無憂宮で見かけた侍従の一人であると思ひ出した。それほど記憶力に自信のある身ではないが、あれはなかなか見間違えようのない容貌をしているので容易に掘り出すことができた。おそらくアードルフ老人が不幸な身の上に陥っているのを見つけ、少年がここへ連れてきたに違いない。本当に当時のあの手の付けられなかった子供と目の前の泰然としている少年が同一人物であるとは、世の中何が起こるか判らないものだと思わざを得ない。

「どうぞ、大佐」

物思いが数回目の前を通り過ぎるほどの沈黙を挟んで、ようやく湯気の立つ飲み物が運ばれてきた。しわがれた声の老人が寄越したのは、少年が使っているのと同じコッフエルである。注がれているのはどうやらホットワインだった。

「アードルフ、彼はもう准将だよ」

少年が訂正するのに会釈だけを返して老人はゆつくりと席から離れていく。男はその後ろ姿を見送りながら、コッフエルに口を寄せて香りの飛びかけている液体を少し含んで静かに嚥下する。微かに残るアルコールと液体の熱さで喉が温まるのを感じた。

「物資欠乏の折だ。ロクなワインがないがそうすればいくらか飲めるだろう」

男の感想を敏感に察したのだろう。少年が言い訳を口にしてみせた。少年の言い訳には乗らず、彼が右手に隠すように握るコッフエルに視線を送る。

「公は何をお飲みにな？」

「……秘密だ」

そういつて少年は自分のコッフエルに口をつけた。男と同じものを飲んでいるのだろう。

「公の身にアルコールはあまりよろしくありませんな。お控えくださいますよう」

大人がそれらしいことを言うものだ、と思うでもなかったがここで彼に諫言できるものはこの男をおいてほかにはないから仕方がない。

それを嫌がるかと覚悟していたが、想像に反して少年はこの日初めて柔らかに笑った。

「言うな。何年もの間、酒毒など及びもつかぬ毒を盛られ続けていたのだ。とうに免疫ができているし、今更健康に留意したところでいくらも持たないだろう。見ろ、この矮躯を」

少年は静かに立ち上がると色素の薄い碧眼で男を見下ろす。少年の言う小さな身体に、ただでさえ弱い照明が隠れて男に影が覆いかぶさった。その陰の中、少年の碧眼だけが消えかける暖炉の炎のように瞬いて見える。十四歳になるというのに、公式には五つも年齢を減じて偽らさせられている小さな身体は、せいぜい十歳そこそこにししか見えぬ。

「公……」

「まあいい、生きてあるうちにサイオキシンの麻薬の、地球教残党の掃滅を成さねばな。目的も意味もなくなった人生だが、それくらい成さねば死んでも死に切れぬ」

男は少年の声に黙然と頷いた。男は少年の決意が何によつて生まれたのか子細に承知している。だからこそ、せめて少年の決意を叶えるためにこうして帝国軍に復帰し職責についているのである。

「准将、あまり長居してはよくない。まだしばらく帝国軍に追われる立場を擬態する必要がある」

ほんの少し興奮気味だった少年は気を取り直すと椅子に掛けながら穏やかに言った。男は軽く頭を下げて目を伏せた。

「かしこまりました。ところで些事ですが、先日のフェザーン首都星周辺での戦闘のことで」

「あまり煩く言うな。ワルキューレを駆るくらいしか今の私には能がない。部隊を指揮するなどできぬでな」

少年がため息混じりに小言はたくさんだと呟く。

「いえ、そのことではなく、敵対した部隊のことです」

「ああ」と相槌を打つと仄かに微笑ってみせる。「あれはなかなか手応えのある相手だった。あとの警備隊の方が骨があったが、なんとも逃げざまが軽妙で面白かったな。あれがどうかしたのか？」

「はい」と男は言うや鋭い視線を放った。「どうやら亡くなったメルカツ提督のご息女の指揮する部隊であると知れました」

少年が切れ長の目に驚きを灯した。しばらく男の言葉の真贋をはかるように瞳をしろくろさせていたが、やがて思考を巡らせるのを諦めた様子で再び瞼をおろした。

「なぜとは考えるまい。理由など考えても仕方ないし、そうなっているからにはそうなる理由や経緯があるのだろうからな」

「……………」

「しかしいずれは会って話をしたいな。提督の恩には報いたい。信用できる大人というものがいることを、身をもって教えてくれた幾人かの一人だから」

少年はそう感想を述べると右手をそつと挙げてもう話したくないという意思を示し、男はそれに応じて軽く黙礼すると席を立った。

「准将、私はいつ死んでもいいと思っっている。しかし卿らに救われた命だ。卿らの使いたいように使ってもらって構わぬし、卿らが生きよと言うなら生きられるその日まで生きる。今日はわざわざ来てもらって無聊が慰められた。まことにありがとう」

よく喋るようになってしまったものだと思ひ、少年の視界には映らないだろうが、男はもう一度静かに黙礼をした。忠誠心などというものは最初からないし、現在では臣下であるわけでもない。公式には行方不明のまま生死も知れず、また社会に何の影響力ももたない過去の存在である少年に男が拘る理由があるとすれば、メルカツがかつて口にした大人の責任というものだろうか。自分が流転に次ぐ流転の中にあつて死ぬ日まで生きると考えていることも影響が濃い。少年が口にした、生きられるその日まで生きるというのは、男の持つ現在の死生観に驚くほど似通っていた。

人が生きてあるのに意味も理由も必要としない二人の連帯感がおぼろげにあるに過ぎなかったが、彼らにとってはさしあたってそれで充分なのだった。

補給基地に停泊させていた偵察艦の艦橋に戻ると、男は待機してい

たカシユニツ曹長に出航を指示し通信封鎖を解除させた。

「クローゼとは話せたか？」

男が水を向けると、コンソールから席ごと振り返ったカシユニツ曹長は嬉しそうに笑った。

「近況報告をと話しておりましたが、気が付くといつもアッシニボイヤ溪谷で開拓をやっていた頃の話にばかりなるから不思議です」

そうか、と返答して男は沈鬱な表情をした。それに気が付いたカシユニツはコンソールにそつと向き直ると、何事もなかったかのようには張りのある声で不在の間の出来事を上伸する。

「准将、帝都のシュトライト中将より折り返しの指示がありました」

男は声の主に頷くとすぐに繋ぐよう指示をした。敬礼をした下士官はかつて四散していた古い彼の部下の一人だった。何人かは行方知れず、また何人かは死んでしまっていたが十三名を復命させることができた。彼らの多くは敗残兵として捕虜の扱いを受け、流刑地で刑務に服していたが、身請け人として男が申し出ると全員が当然のように復命したのだった。安楽なことよりも悲痛な経験ばかりが多い者たちだったが、こういう連帯が家族的などでも言うのだろうか。長く取り戻そうともがき続けていたものだったが、いざ手にしてみると本当に望んだものだったのかどうか、判らなくなるから度し難い。

出港して数分が経つ頃帝都から超高速通信が入り、デイスプレイに口髭を整えた紳士然とした将官が現れて男は敬礼を送った。

「シユーマツハ准将、卿に召集命令だ。急ぎフェザンへ戻りワーレン提督の元帥府へ出頭せよ」

「承知いたしました。ワーレン提督、ということは地球教関連でしょうか」

相変わらず表情を読み取るのが難しい相手だ、とシユーマツハはデイスプレイ越しに恩人の様子を窺う。

銀河帝国正統政府が同盟と共に消滅したのち、ハイネセンで収監されていた彼を今の地位に引き立てたのは、かつてリップシュタット盟約軍とともに現体制であるローエングラム軍と矛を交えたシュトラ

イトである。生前のカイザー・ラインハルトにして「惜しいな」と言わしめた経歴の持ち主を現役に復帰させる際、シューマツハの出した条件はかつての部下たちを探し出し、それぞれの希望する処遇を与えることだけであった。無欲すぎる彼の申し出に底意を疑う者も軍内にはいたが、シウトライトが彼の為人を保証するとなるなり異見は収まったのである。かのオーベルシュタインが健在であれば、シウトライトは別の苦勞をせねばならなかったであろうが……。

「まあ、卿になら今話しても問題ないか」

そう言ってから数秒沈黙したままディスプレイ越しにシューマツハを観察していたが、最後まで表情を動かさないまま淡々と続く言葉を発した。

「ロート・アドラー討滅の任務とのことだ。何やら協力者を得たらしい」

「ほう、協力者」

シューマツハが目を細めるのを無表情に眺めていたシウトライトは更に数拍の間無言でいたが、「では」とだけ口にするると敬礼をしたまま画面から姿を消した。通信が終了して画面が暗転した後も、シューマツハは腕を組んで画面に視点を結んでいたが、やがて口元を釣り上げてほくそ笑んだ。

「なぜ、みんなベルンハルト様が帰ってこないと決めつけているのか。私にはそれがわからん」

ゾフィーが前回の依頼者と再度コンタクトを取るようになったので、出立の準備に立ち回っているうちに、突然ヒルデブラントがずっと疑問に思っていたことを口にした。どうやら前回の小会議の際、積極的な接触を避けるといった流れになったことが、彼には納得できない様子である。

資材のリストを腕時計を模した端末に呼び出して作業を進めていたミハエルは、仕事に打ち込めない同僚に冷たい視線を向ける。どうやら問いに応えてやる気はないようだ。黙ったまま歩き出し目的の資材置き場へと向かう。ヒルデブラントは上の空でただミハエルの後を追ってついていった。

「なあ、おぬしもお二人と同じ意見のようだが、なぜなんだ。なぜ迎えに行こうとしない。ペトラ様はあれほどベルンハルト様をお探しだったじゃないか」

追いつがる巨漢にミハエルは正直辟易していた。目に見えるものしか見えない純然たる正直者……。好ましくはあるが、時にその性質は彼をひどくいらだたせる。こういう純粋な人間が、気付かないうちに人の心を散々に傷つける。相手が致命傷になっても気づかないまま、無邪気に尖ったナイフを突き刺し続けるのだ。いつか血塗れになった自分の手を見ても、なぜそうなったのか理解できない。

だが、それは彼の、彼ひとりの責任だろうか。ミハエルはようやく何か言う気になって興奮しているヒルデブラントを見上げた。

「逆に問うが、かのお方が我らの前にお姿を見せるといふ、貴様の意見の根拠はなんだ」

今度はヒルデブラントの方が黙り込んだ。こめかみに青筋を浮かべて質問の意味を吟味している様子だ。

「だって、ゾフィー様がおられるじゃないか？」

巨躯の持ち主はようやく子供みたいな言葉遣いで、僚友にひそやか

に問いかけつつ答えた。

「なぜ、お嬢がいればベルンハルト様が帰ってくるのだ？」

愚問を、とばかりに取り合わないミハエルにヒルデブランドは少しだけむっとした様子で二の句を継ぐ。

「お二方は想い合っておられるのだと思っていたが？」

さつきから互いに質問を返し合っていることを煩わしく思いながら、ミハエルは形の良い額を右手で抑えて、しばらく僚友の解し兼ねる様子たたずまいに呆れたような、面倒くさいようなため息をついた。なかなか苛立ち収まらない。むしろ募ってくる。

「貴様、お嬢の従者のくせにそんなことも知らなんだのか」

思わず強い語気が口から吐き出される。ヒルデブランドはかっとした様子で一歩迫った。

「知っているからこそ問うているのではないか。おぬしの言いようは聞き捨てならん。私が何を知らないと言うのだ」

ヒルデブランドは巨体をゆすって、どこか飄々とした様子僚友の行く手を遮るように立ち止まる。しばしの無言を再びのため息で中断させて、ミハエルはじっとりとした目つきでヒルデブランドを眺める。

「お二方はおそらく貴様の言う通り想い合っておられる可能性がある」

「……………」

「だがそれは許されないことだ」

「…………なぜ許されんのだ」

「ベルンハルト様は養子だ。子爵家の遠縁から十歳の時に縁付かれた」

「…………養子？　しかし跡取りだっただろう」

「そうだ。だがそのままでは子爵家を継げない。より血筋の濃いペトラ様がおられる」

「それはそうだが、しかしそれが何だと言うのだ。許されんとはどういうわけだ」

「家を継ぐには正統な血筋のお方と婚姻せねばならん。ご当主様の実

子であられるペトラ様との婚姻が不可欠だ」

ミハエルが冷淡に応えるのに、ヒルデブランドは頭で理解するのがやつの様子で大きな頭部をやはり大きな両手で抱えた。

「……お二人はご兄妹であられるじゃないか」

「ベルンハルト様は養子だと言ったろう。十二歳になられた年にペトラ様がお生まれになり、ご当主が婚姻をすぐにお決めになられた。血縁とは言え遠縁だし、ご当主はベルンハルト様をずいぶんお気にいられていたから、ペトラ様の婿にして名跡を継がせるおつもりだったのだ。それこそ、大恩あるメルカッツ提督にお預けになるほどにな。ご期待のあらわれだった。貴族の家にはよくある話だ」

つまりシュナイダーとペトラは義理の兄妹であり許嫁なのだった。そしてそれをどうやらヒルデブランドだけが知らなかった。秘されていたわけでもないが、公然とされていたものでもない。それにシュナイダー自身が亡命した時点で、手続き上はリップシュタット軍に参加した時点で廃嫡されている。婚約も自動的に立ち消えたとするのが一般だろう。

ヒルデブランドはシュナイダーがメルカッツ家にやってきた頃のことをよく憶えている。彼はその頃すでにメルカッツ家の令嬢であるゾフィーの護衛士の一人だったのだ。士官学校に在学中だった当時十六歳の青年は、メルカッツの部隊に配属されるだけでなく、家士のような立ち位置でメルカッツ家へやってきた。帝都にあつたメルカッツ家に寄宿し、士官学校へ通いつつ、さながら家臣のように献身的に立ち回っていた。当時十歳になつたばかりのゾフィーはこの青年にずいぶんと懐いたもので、ヒルデブランドはその頃から二人の仲をひそやかに見守っていたのだ。

もともとメルカッツの持つ爵位は実家の伯爵家から分家した一代限りの騎士爵だったし、一人娘とは言え家を継ぐ必要のないゾフィーは、相手方にある程度の家格があれば持参金付きでどこへでも嫁ぐことができる。シュナイダーは子爵家の跡取りという触れ込みだったこともあり、当主のメルカッツを除き家の者はみな二人にそういう未来が待っているのだらうと思っていたのだ。

「そんな、しかし恩赦があつたとはいえ、ベルンハルト様から叛逆の罪状が消えることはないだろう？ リップシュタットに始まり、同盟への亡命、正統政府への参加、挙句にはイゼルローン共和政府の客将だったのだぞ。思えばローエングラム朝と常に敵対の陣営に属していたのだ。どういうわけかメルカツツ家もシュナイダー家も存続を許されているが、子爵様もベルンハルト様の家をお継ぎになることは諦めておいでだろう」

「さあな、ご当主のお考えまでは判らぬ。しかしペトラ様のお気持ちは残る。俺にはそちらの方が重要なのだ」

「……まさか、そうなのか？」

あまりに朴念仁ぶりを発揮する僚友に、ミハエルはどこか空しい気持ちを持って余して会話を打ち切った。ミハエルが思うにベルンハルト・フォン・シュナイダーと言う人は、人の気持ちに敏い。ペトラの思慕に気付かぬほど鈍感ではないし、やはり忠義の人だと思う。メルカツツ提督に最期の最後まで尽くしたのは敬愛の念もさることながら、軍人として育てられた恩義によるところが大きいだろう。だから貧しかった生家から自分を引き取り、衣食住に加え教養を与えてくれた子爵家にも大きな恩義を感じているはずだ。そして彼は望まれば間違いなくそれに報いるを果たすに違いない。だからこそ戻ってはこない。

だが区切りなりはじめは必要だ。それはペトラにこそ必要だと思う。だからシュナイダーを探すペトラに付いて、彼は彼なりの兄妹への忠義を果たそうとしているのだった。

彼女たちの忠臣が不思議な口争いを演じている頃、二人は交易に関する事業についての話し合いをしていた。前回の奇妙なクライアントから再度の接触があり、クライアントのいるフェザーンへ直接面会に行くことになったことから、そちら方面での活動における方針を相談していたのである。

シュナイダーが健在であるという可能性に触れたあの日から、何度か二人は顔を合わせていたし、時には食事を共にしたりもしたが、お

互いに触れようか触れまいか、話の糸口を探るだけで今日まで一度も話題に上ってはいない。しかしいつまでも触れないわけにもいかない話題なのは、二人の微妙な心情からは明らかで、やがて年長者の側からそれについて切り出した。

「ねえペトラ。ベルンハルト兄様が見つかったとなれば、あなたの旅の目的は果たされたも同然。旅の同行はこのあたりまでかしらね」

ゾフィーはコーヒーを口に運んで、年少の同志に優しく微笑みかけた。その表情にどこか硬いものが混じっているのをペトラは敏感に察したが、口に出しては別のことを言った。

「ですがまだ兄上ご本人と決まったわけではありません。ミハエルたちの話では、当の人物は帝国軍籍のIDで警備隊の戦闘に参加していたと言います。常識的に考えれば他人と考えるのが当然です。お声やお姿を認めた訳でもないのですから……」

本当はペトラも件のパイロットがシュナイダーであると不思議に確信めいたものを感じている。だが理性的に考えれば考えるほどそれはあり得ないという結論にたどりつく。

旧同盟領内でのことならまだしも、帝国軍にマークされているに違いないシュナイダーが、新帝都たるフェザンにわざわざ近づく理由がない。あるとすれば旧イゼルローン共和政府の人材として本名で堂々と現れるに違いない。そうでなければ更なる叛逆を自ら誇示するようなものである。だからかのパイロットが兄であるはずがないと、ペトラの理性がごく控えめに彼女に主張するのだ。

ペトラの逡巡を見守っていたゾフィーは、横に流していた長い脚を組むと尖った顎に右手の甲を添えて、父親と同じ色をした双眸を、透過壁の向こうにある宇宙空間へ向けた。時々ゾフィーはこんな眠たそうな眼をする。よく知っている人物が見れば、父親であるメルカツツとよく似ていると評するに違いない。

「どういう経緯があるにしろ、奇跡や信じられない強運が作用したにしろ、そうなっている以上はそれが事実よ。あそこにおいてになったのはベルンハルト兄様だし、何故そういうことになっているかというのは考えても意味がないことだわ。どんな時も過程があつて結果が

あるというのは自明のことだけど、結果なくして過程は過程たらしめないわけじゃない？」

どこか困ったような表情で、ゾフィーは小さく肩をすくめてみせた。ペトラは息を飲む思いで彼女の話を聞いている。この人の考え方はいつも自由で大胆で、でもどこか説得力がある。あれがシユナイダーであるという仮定の事項が仮定のままであるにも関わらず、ゾフィーの考えの中では限りなく事実に近い仮定として展開している。しかしそれがゾフィーの勝負勘の強さなのだろう。考えても仕方のないことには一切のリソースを振り分けない。しかも結果としてそこに破綻が生じないのだから、彼女の勝負勘の精密さは侮れない。女だてらにと揶揄されるこの武装商船団が今日まで無事に生きながらえているのもゾフィーのこの気性あつてのものだった。それを思うとペトラはますますこのひとに対する勝ち目の薄さを感じずにはいられない。

勝ち目……。いったい何の勝ち目だろう。この人と何を競おうと
いうのか。度し難い劣等感を感じてしまうのだった。

「ペトラ？」

少しうつむいていたのだろう。のぞき込むようにゾフィーがテーブルに乗り出している。

「いえ、なんでもありません」ペトラは硬く微笑った。今度の交渉には私も同行いたしますから、と話題を切り替える。ゾフィーもその意見に賛成して、そうねと返事をした。

「いずれにしても、ベルンハルト兄様であると確認できるまでは引き続き私たちにお付き合い願うわね。前回は大物を引き当てちゃって大変だったけど、まあ何とかなるでしょう」

不敵に笑ってゾフィーは指の長い両手を顎の前で合わせた。

「あのゾフィー様……無理はおよしになつてくださいね」

少しとりなすように言いかけるペトラへ、ゾフィーはわざとらしく驚いたような表情を閃かせる。

「まあ、ペトラ。私は勝ち目のない戦はしませんよ。ちよつと借りを返しておきたいだけね」

「……………」

返事もままならないペトラを置き去りに、ゾフィーは銀器のコーヒポットから自身のカップへ、この日三杯目のコーヒを注いだ。流行り歌を鼻唄に胡麻化して唄いながら瞼を閉じる。頭の中ではおそらくロート・アドラーに一矢報いる辛辣な作戦を検討しているのだろう。長く天頂方向に反りあがる睫毛がペトラの視線を捉えた。

ペトラは静かに自問する。いったい自分は何を成しえたいのだろうか。ペトラはゾフィーと同じ宙に視線をやったが、きつと見ているものはまるで違うのだろうか、などということにいつまでもとらわれていた。

11. 5 幕間その①

ふと見覚えのある人影を見かけたような気がして、ダスティ・アツテンボローは思考と歩行の両方を一旦停止した。通りの向こうを歩いていくのはどうやら彼らの元要塞事務総監である。アツテンボローと違ってスーツ姿の彼は、鉄色の髪をした駆け出しジャーナリストには気付かない様子で歩いて行ってしまふ。

アツテンボローは何の気なしに、かつての同僚を雑踏越しに見送っていたが、思うところがあつて後を追いだした。追いつければそれでいいし、そうでなければそれで構わないという程度の動機だったが、意外に早くその背中に追いついた。

目当ての人物は立ち止まって、耳に装着した通信機で誰かとしきりに通話している。途中で白熱したらしく自動歩道の手前で立ち止まって小さな身振り手振りで話していた。カメラをアクティベートすればその様子も相手に送ることができるが、往來の真ん中であるためかカメラは閉じられていて相手方が誰であるかアツテンボローには知れなかった。

通話が終わるのを待つて声をかけると、案の定彼の追跡にキャゼルヌは気づいていないようだった。

「これはこれは自称ジャーナリスト。自称元革命家の誰かさんじゃないか」

「どちらにも確かな実績がありますがね、キャゼルヌ先輩」

相変わらずさび付いているユーモアセンスに苦笑しながらアツテンボローは訂正した。後輩の抗弁に先輩の方はと言うと、にやにや笑いながら両手でまあまあと制して見せる。

「実績ね。まあどちらもいずれ後世の歴史家が評価してくれるだろうさ」

「さぞ来世では先輩方も鼻が高いことでしょう」

二人はお互いの軽口に笑い合おうと、キャゼルヌが行く先を示して少し同道することになった。

「お前さんのことだ、暇だろう。少し付き合えよ」

「心外ですな。これでもあちこちから引つ張りだこなんですけれどね」
「よく言うよ。今回もさっさと抜け駆けしちまいやがって。おかげでお前さんの分も仕事をしているようなもんだ」

それについては返す言葉もなく、アツテンボローは肩をすくめて口の端を釣り上げて無言で笑うにとどめた。数ヶ月会わないでいた間の話題を出し合いながら歩いてきた二人は、手ごろなバーを見つけるとガラス戸の自動扉をくぐる。

「で、どうなんです。無事に送り出したんでしょ、シユナイダー中佐を」

カウンターに肩を並べて、それぞれブレンデッドのオールドウィスキーのオン・ザ・ロックを乾杯酒に再会を改めて祝福しあうと、アツテンボローがずっと聞きたかったのであろうことを口にした。

「無事というかなんというか、まあ荷物付きでなんとかね」

「……荷物？」

なんのことやらと首を捻ったアツテンボローに、キャゼル又はいたづらっぽい微笑をたたえたまま無視を決め込む。

「しかし送り出すのにこれほど時間がかかるとは思わなかったな、三年とは……」

グラスのアイスを転がしながら述懐するアツテンボローを横目に見つつ、二元同盟軍きつての能吏はさっそく一杯目を飲み干した。カウンターの中のバーテンダーに追加を注文して、手元のナッツをいくつか口に放り込む。

「しかもかなり大掛かりな仕掛けをして送り出したと、ユリアンの奴から聞きましたよ」

「小細工はしたがね。まあ臨機応変の下準備と言ったところかな。……記事にはするなよ」

店内は酔客で賑わっていたが、多くの人の会話と音楽と、時折響く食器やグラスのぶつかる音で溢れており、誰も二人の会話に注意している者はいない。

カウンターの中につるしてあるソリヴィジョンでは、このほど布告されたバーラト星系内での共和主義者による自治が許されるという

ニュースを、もう六十日間ほど連続で毎日毎日放送していた。

皇太后ヒルデガルドの布告演説は何度も放送され、それに対する世論やら専門家の意見や協議、一部非難やら何やらがニュースショーを盛り上げている。

今回の自治の認可はある程度予測と期待の両方がされていた。先年のロイエンター元帥による叛逆、それに伴う混乱は、直後に皇帝が失われることによって旧同盟領に対する帝国の支配意識を鈍らせるのに効果があった。無理に統治するよりも、ある程度の自治に任せ、ともかくにも平和な状態を維持することに決めたのだ。

判断基準の根本が性善説に傾いているのも影響しているだろう。オーベルシュタイン元帥が死去してからと言うもの、帝国の施策にはどこかゆるみを感じる、とキャゼルなどは捉えている。

しかしここにひとつ帝国側の皮肉ともいえる辛辣な一手が組み込まれていた。皇太后ヒルデガルドの演説を聞いた者はみな、その痛烈な施策に対して同様の反応を示した。つまりみな茫然とした。なぜなら自治の勅許のあて先が、旧自由惑星同盟政府あてではなく、旧イゼルローン共和政府あてだったからである。

「あれにはさすがに驚きました。でもフレデリカさんの応対はご立派でしたね」

少し酔いの気に捕まりだした元青年提督は、グラスを額のあたりまで掲げると、誰かと乾杯するかのようには捧げ持った。

「あれは極端のようには見えて実に現実的なシロモノさ。旧同盟は完全に瓦解しているし、かつての指導者たちは大半が鬼籍に入っちゃまっている。残りは戦争犯罪者で収監されているからな。健在なのはホワーン・ルイ氏と、使えそうなのは最近快癒したという元国防委員長のアイランズくらいだろう。それに帝国側としても、旧同盟とイゼルローン共和政府と、どちらに矜持を感じるか、むろん皮肉もあるだろうが火を見るより明らかだからな」

キャゼル又はイゼルローン共和政府を自分たちとは表現しなかった。そのことに気付きつつアッテンボローも琥珀の濃い香りを喉奥へと流し込む。

「そう言や、二回目のラグナロック作戦の時に停戦交渉にフェザーンまで行ったらしい、ウイリアム・オーデッツの野郎が方々でヤン夫人やヤン提督の不当性を訴えていましたよ。一度ニユースシヨウの対談でやり合いましたかね」

三流政治家者が、と揶揄しながらアツテンボローが管を巻く。年長者の方は余裕を見せて四杯目のグラスを傾けた。

「まあ、そのうちユリアンにでもミンチボールにされるだろうさ」
「そいつはいいや」

ミンチボールにして豚の餌にでもしてやりましょう、いやそれだと豚が気の毒か、などと調子づく後輩を宥めつつ、キャゼルヌは遠い目をする。

「やれやれ、喧嘩仲間がいなくなるとお前さんも空回りをするものなのかね。これはそうそうとポプラン中佐には旅から戻ってもらわんとな」

キャゼルヌの独り言に反応してアツテンボローが起き上る。グラスをカウンターに音立てて叩き置くと、まさか、と言って士官学校時代の先輩を酔眼でにらむ。

「シユナイダー中佐のお荷物というのはポプラン中佐か」
「なかなか苦労を忍ばせるストーリーだろう？」

力を込めて何とか立ち上がると、アツテンボローは宇宙めがけて拳を突き上げる。

「こつちが苦労してるって時に毎度毎度、面白おかしくやりやがって……。戻ってきたらこきつかってやるから覚悟しやがれ」

「おいおい、お前さんももう民間人じゃないか。ちよつと酔いすぎだぞ」

「いいや」と言つて青年はさらに拳を固める。「市井に居ては野郎の専横を抑えきれんでしょうからね。私も自治政府に参加しますよ。参加、しますから。いや、参加しなくて立つ瀬も、何もありません！」

奇妙に言葉を詰まらせながら、とうとうカウンターに突っ伏した。こんなに酒に弱かったか、と呆れるキャゼルヌは、寝息を立て始めた元ジャーナリストに苦言を呈した。

「アツテンボロー、大人になるって言うのは、自分の酒量を弁えることだぞ」

やれやれと、この日何度目かのため息をつくとき、アレックス・キャゼルヌは五杯目のウイスキー・オン・ザ・ロックを、とっておきのシングルモルトでオーダーした。

「まだまだ青二才には吞ませられんな。酒も夢も現実も……」

ユーモアのセンスが壊滅的だと評する恋女房を思い浮かべて、どちらかと言うと家庭的な人間であると自任する彼は、さきほど通話で妻と口論になった件を、どのように彼女に謝罪するか沈思しはじめた。

昨日からの嵐がようやくおさまり、外の雨が小康状態になったのに気付いたのは、フェザーン本星から旧同盟領方面に建設中であるシャータンブルク要塞の司令官室より、至急の通信が入っていると部下から報告を受けた時だった。主人が未だ不在の軍務省の尚書オフィスでは、前任オーベルシュタイン元帥の副官であるアントン・フェルナー准将が今日も業務を黙々とこなしている。

「シュトライト中将からだど？」

部下から受信の報告を受けたのは、宇宙航路局からの報告書に目を通している最中だった。旧王朝時代に門閥貴族たちが利権のために猥雑にしてしまった航路の整備を行っているわけだが、要所ごとに中継基地を配置したり、補給基地を設置する検討を彼がほぼ一人で受け持っている。

軍務省の業務自体は仮想上も敵国がないことから、以前に比べるとかなりコンパクトになっていた。それで尚書不在でもなんとか運用できているのだが、それにはフェルナーの働きがかなり大きいと目されている。そのおかげで彼のスケジュールは毎日朝から晩まで真っ黒だった。フェルナーが業務を回しているうちは新しい軍務尚書が置かれるのは遠い将来のことになるかもしれない、というのは性質の悪いジョークだったが……。

強力すぎる個性のあとに誰をその任にあてたものか、尚書代行に任じられているアウグスト・ザムエル・ワーレンは、思うところがあるのか一度もこのオフィスへ登局せず、自身の元帥府で必要な決済を行っている。

その激務の中、フェルナーはかつての上司が飼っていた老いたダルメチアンの面倒まで見ている。上司の横死後、その執事が屋敷の管理をしながら犬の世話もしていたが、先に死ぬと思われていた老犬より早くに老執事の方が病に倒れることとなった。ラーナベルトという名の老執事に相談された際、フェルナーはなぜ自分が声をかけられたのか一切身に覚えがなかったが、身寄りのない老人に後事を託された

とあつては無下に断ることもできず、不承不承犬の面倒を見ることにした。しかもこのダルメチアンはかねての噂通り、柔らかく煮た鶏肉しか口にしないため、ほぼ毎日フェルナー自身が帰宅の際に肉屋へ買い物に立ち寄ることになっている。

「こちらで受けますか？」

部下が言うのに、いやと遮って「通信室へつなげ。そちらへ出向く」と席を立ったのは、少しでもあらぬ誤解を抱かせないためである。このくらいの機微を読み取らねば、ドライアイスの剣に付き従ってきた自身の沽券に関わる。そう思うほどには、フェルナーは元上司を敬愛していたのかもしれない、と昨今思うことに当の本人は苦笑を漏らさざるを得ない。

比較的近距离とはいえ、シャーテンブルク要塞からの距離はフェザーン本星から高速艦で六時間ほどはかかる。危険中域内の安全地帯である回廊内ではワープができないことが時間的距離の原因だった。戦争状態が解消したため、通信衛星の中継がスムーズに行えるせいか、以前に比べると映像はかなりクリアに映る。しかしそれで会話自体がクリアになるわけではない。

「何か御用ですか。これでいて私も忙しい身の上でして」

冗談を言つてもにこりもしない男を前に、超高速通信のスクリーン前に立つて三十秒程度であったがフェルナーはすでに疲労を感じていた。もつともフェルナーの冗談はほとんど皮肉の要素で構成されており癖が強い。あのオーベルシュタイン相手にも頻繁に提供していたらしいが、亡き人の琴線に触れたことは一度としてないしかなかった。

「明日そちらへ出向くことになったのだが、人と会うのでどこか部屋を借りたい」

ほう、とフェルナーは尖った顎に手をやり、さては秘事だなと察した。軍務省内であれば、よほどのことがない限りその秘匿性は守られる。昨今憲兵隊でも容易に検閲することはできない。死して尚、権勢衰えぬオーベルシュタインの威光が窺い知れる一事だった。

「一体どちらの令嬢とお会いになるのです？」

無論、フェルナー流の冗談、皮肉であったが、ディスプレイの向こうの人物は意表を突かれたのか珍しく驚いたような表情で彼の言葉に反応した。むしろ言ったフェルナーの方がその反応に戸惑ったくらいである。

「なかなか油断がならんな。どこで知りえたか」

「……………」

冗談だったのだが、とは言えずフェルナーは無言を通す。咎めたわけではなかったので、シュトライトは画面の中で平静を取り戻すと、別段隠すつもりもないが、と前置きをする。

「どちらにせよ先方を通してもらわんといけないからな。客はメルカッツ提督の遺児で、ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカッツ令嬢だ。何人か供もあるとのことだ。部屋と茶菓の用意を頼む」

訪問客の名を聞かされて、フェルナーは少し沈思した。シュトライトとメルカッツの娘の組み合わせから導き出されるものは何だ。彼の頭脳の中には、帝国内における陰謀や謀略の可能性に関する情報が相当量詰まっている。現在脅威となりえる事項はほとんどないが、今わざわざ帝国軍内でシュトライトが動くような案件となると、宇宙海賊関係くらいしか思い当たらない。メルカッツの娘は軍務省でも一応マークしている。確か武装商船団を組織して賞金稼ぎまがいのことをやっているはずだ。これといって注意を向ける存在ではなかったが、直接軍の重鎮が会うとなるとその出自からして無視はできかねる。

「会談の内容を伺っても?」

「……………」

シュトライトはフェルナーの問いかけに無言で応えた。束の間スクリーン越しに対峙する格好になったが、視線を外すとフェルナーの方から降参した。

「……承知しました。それで時間は?」

「正午に頼む」

「ランチのご用意はいかがいたしましょう」

「卿が令嬢のお相手をしてくれるなら願おうか」

「……承知いたしました」

フェルナーの送った敬礼に答礼したシュトライトが、いつもの無表情でディスプレイが暗転するのに消えると、通信室の外に待機している警備兵に聞こえない程度の音量で「鉄面皮め」と吐き捨てた。

確かシュトライトの手下には、フェルナーと同じくリツプシユタツト戦役で門閥貴族側に付いた男がいる。彼らとは違い、カイザー・ラインハルトが崩御してから許されて復命した異色の経歴の持ち主、レオポルド・シユーマツハは准将として宇宙海賊討伐を主任務にしているはずだ。彼が先日フェザーンに一時帰投してワーレンの元帥府に出頭したことは掴んでいる。取るに足りない情報だと一度は黙殺したが何か関係があるのだろうか。尖った顎をなでつつフェルナーは雨後の夕焼けに染まる窓外の空に目をやった。

「まあ少し調べてみるか」

誰にいうでもなく独り言をこぼすと、ディスプレイに点灯している時刻の表示を見て「いかん」と独語を続ける。

「やれやれ、肉屋の閉店時間を基準に任務についている士官は俺くらいのものだろうな」

さっさと身支度して帰らねば。老い先短いだろうから好きにさせてやってくれ、と犬について語った元上司の死相に染まった表情を、昨日のこのように思い出す。もうあれから三年も老犬は生きながらえている。話が違うよな、と夕陽に思いをさせつつフェルナーは通信室を後にした。

「ランチの用意はできているのかな」

翌日正午前に到着したシュトライトを出迎えたとき、フェルナーはシュトライトの発した言葉が冗談なのか本気なのか測りかねて少しの間唾然としてしまった。

「無論、用意しております。閣下の分のザワークラウトは塩味と酸味を抑え気味にしておりますよ」

咄嗟に返答するとシュトライトは口の端で少しだけ笑ってみせた。この人物は亡き主君の前で狼狽えるようなことはあっても、同輩や部

下たちにそうした姿を見せることはフェルナーの知りうる限り一度もなかった。そのため、主君の前での醜態は演技ではなかっただろうか、と彼などは疑っている。

「メルカッツ令嬢はお見えか」

「は、すでに用意の談話室に。随員は控えの部屋に護衛士が二名、同席者の女性がおひとりです」

同席者と聞いてシウトライトは「ああ」と嘆息した。伝えるのを失念していたらしい。

「故メルカッツ提督の副官だった、ベルンハルト・フォン・シュナイダー中佐の妹御だ」

来訪時に名乗りを受けていたので、当然ながらフェルナーは知っている。シュナイダーのことはある程度知っていた。士官学校の同窓であるが、妹がいるとは初耳だった。平民出身の彼は貴族が出自のシュナイダーと親しくすることはなかったが、別段悪い印象はなかったのを憶えている。

「食事はお二人分しかご用意しておりませんが」

「そうか、残念だが同席は遠慮して、塩抜きザワークラウトはご令嬢方にお楽しみいただくよう」

シウトライトを談話室の扉前まで送り届けると、フェルナーは腰に手をあてて天井を仰ぎ見た。軍務省の建物は簡素なオフィスビルで、廊下の天井にはまるで見栄えのしない照明がはめ込まれている。その一つが接触不良なのかほんの少し瞬いているのを見つけて舌打ちをした。いかに科学が進んでLED照明が長持ちするようになっても切れない光源というものはいまだ作れないらしい。自室に戻る道すがら庶務担当に連絡し、照明を取り換えるよう指示すると、談話室で話されているであろう話題について想像しようとして頭を振った。

「中将は何を企んでいるのだ？」

思いのほか大きな独り言だったので、口に出してからフェルナーは少しあたりを見回した。何も無い部屋の隅にじっと視点を結んであられもないことを考える。もし今、現体制に叛逆を企てるものがあるとするればそれは誰か。誰であれば質実ともにふさわしいか。いつ

だってフェルナーの思考は可能性を出発点にしない。それは彼を固定観念や権威主義から自由にする。

「さて、裏切り者にふさわしいのは誰かな」

不穏な独り言にフェルナーはひとり、再び誰もいない執務室内をくまなく見渡した。

ゾフィーの記憶と知識が正しければ、今彼女が座する場所は帝国軍務省のオフィスビルのはずである。今朝フェザーンに到着した際、通常と違う指示を宇宙港管制官から受けたところから今日の違和感が始まっている。

普段であれば民間用のドックに誘導され、入管まで二時間は艦内で待たされるのに、今日は居並ぶ順番待ちの艦船をすつ飛ばして軍用ドックへ誘導された。その後も必要な手続きのもろもろを一切踏まらず、小銃を提げた衛兵に先導され、言われるままに黒塗りの重厚な地上車に乗せられここまで運ばれたのである。明らかに異常事態だったが、誘導してくれた衛兵や、ここまで関わった人間……すべて軍人だったが、彼らがみな一様に一行を丁重に扱うので無暗に逆らうのも得策と思えず従ったというのがここまでの経緯だ。

ここまで同道したミハエルやヒルデブランドも同様に感じ取っていたらしく、オフィスビルに入って部屋を分けられるまで大人しく従ったのだった。ひとりペトラだけが、お嬢様然とした優雅な立ち居振る舞いで、いままもゾフィーの隣で供された紅茶を静かに楽しんでいく。ほとんど男装のゾフィーに比べて着ているものもレディーの名に恥じぬ佇まいだった。

彼女がその犀利な頭脳でこの状況を分析した結果、一つの諦観といくつかの疑問と危惧に行き着いている。まず諦観については言うまでもない。前回、ロート・アドラーと思しき一団と戦闘に至った案件の依頼主が現役の高位の帝国軍関係者で、彼女が何者であるか判った上で依頼を行っているということである。このクエストは、ゾフィーたちヴォルフス・ブリガーデが所属する武装商船グループを経由して依頼されたのだが、依頼主については極秘で、グループの元締めから詮索無用を条件に破格の金額で受けたのだった。内容が内容だったため、ペトラにも諫められたように少々暴走気味に受けた経緯があったが、最初からこういうルートが用意されていた気配を今や確信をもってゾフィーは感じていた。

疑問については一旦置いておくとして、危惧については少々うがった考えかもしれない。それは、ゾフィーの行動の真の目的を、今回の依頼主が看破しているかもしれない、ということである。ゾフィーはそのことを誰にも明らかにしたことはないし、しばらくは誰にも詳らかにする予定はない。ただ状況から推測し、近似値を言い当てるものはこの広い宇宙には存在するかもしれない。その危険性については低い可能性ながらも備えておく必要は大いにあるだろう。

細い顎に手をやって虚空に思考を結んでいるゾフィーを気遣わし気に見やっただペトラは、手にしていたティーカップをそつとソーサーに戻す。

「あの、ゾフィー様……」

部屋に通されてからしばらく経つが、ずっと無言でいるゾフィーにたまらずペトラが声をかけた。思考が大気圏を離脱していたゾフィーは、年少の同行者の不安そうな表情にようやく気づき、顎に当たっていた手をほどくと慈愛に満ちた色の表情をペトラにむける。

「なあに、ペトラ」

「どこか遠くへ行かれていたご様子でしたので」

ゾフィーの普段通りの様子にほっとしたのか、姿勢を正すとペトラはツンとしてみせた。

「軍務省のお茶は口に合わなくて？ 私にはコーヒーの方がいいのだけれど、女と言うだけで紅茶が出されるのにはうんざりするわね」

年長者の側がそうおどけてみせると、ペトラはクスクスと小さく肩を揺らした。しかしその直後、驚きに表情を止めると、小さな口をやはり小さな手でおさえてゾフィーの耳元に顔を寄せる。

「こちらは軍務省なのですか？」

ペトラの声はかすれるほど小さかった。彼女の驚きはこの場所の正体よりも、そのことを断定しているゾフィーのその慧眼に対してだろう。ここまでの行程は断片的には拾えるものの、確たる材料には完全に欠けていた。かく言うペトラも自分の想像と推測が及ぶ限り、ここがどこなのかを考えてみたが、結局は皆目見当がつかなかったのである。またしてもゾフィーは少ない材料から一番太い道筋を選んで、

と言うよりも当てずっぽうに（ゾフィー自身は常に確信を持っている）間違った道筋をその強運で捨て去って正解にたどり着いた、と言うのだろうか。

「だって、軍用ドックに通されてずっと衛兵さんが先導していたのよ。軍関係なのは間違いなし、乗せられた車や宇宙港からの時間的距離、衛兵さんの軍装が憲兵でなかったことから、きつと軍務省関係者だろうと思っただけ。まあ決定的だったのは、ここに到着したときほんの一瞬だったけどフェルナー准将がいらしたのを見かけたからなの。だからきつとそうね」

ゾフィーは歴戦の勇将であるメルカツ提督の娘である。軍関係者に知っている顔があるのは理解できるが、この状況でなんという視野の広さだろう。その豪胆さにペトラは舌を巻かざるを得ないのだ。「それにしても待たせるわね。どんな大物がいらっしやるのかしら」
「……………」

ゾフィーが放埒にそう言い放った時、談話室の扉がノックされた。ゾフィーは掴みかけていたシヨコラーデを小皿に戻すと、冷めつつある紅茶で喉を潤してからメゾソプラノで「どうぞ」と返事をする。扉が開くと同時にゾフィーらは静かに立ち上がったが、入室してくる人物を認めると低頭するのも忘れて思わず口走った。

「シュトライト中将……………」

呼びかけられた男は少しだけ表情を和らげるとその場で直立して二人に敬礼を送った。

「フロイライン・メルカツ、ご無沙汰しております。ご壮健そうで何より」

ゾフィーはひとつ深呼吸をすると落ち着きを取り戻して、軽く低頭をした。若い女性らしく一度は驚いて見せたが、一度呼吸を取り戻すとそこには対外的に交渉する際に無表情になる普段通りの彼女の姿が戻っている。

「失礼いたしました。閣下、こちらは私の友人でペトラ・フォン・シュナイダーでございます。今回のお招きに必要欠くべからざる人物であるため同道させました」

ゾフィーがペトラを紹介するのに対して小さく頷くと、シュトライトはペトラにも柔らかい表情を向けた。

「フロイライン・シュナイダー、実は私とあなたは面識があるのですよ。もつともお小さかったあなたは憶えておいでではないでしょうか」

そう挨拶をされてペトラは驚きと恥ずかしさを同時に表情に展開させたが、なんとかスカートの裾を掴まんで会釈をしたのち「いったいどちらで」と率直な疑問を口にした。

「口に出しては憚られるが、ブラウンシュバイク公の園遊会で、シュナイダー子爵があなたをお連れになったことがありました」

「まあ、お恥ずかしい」

温和に対応するシュトライトは二人の令嬢に着席を促すと自分もその対面にかけて。ゾフィーは新しく出されたティーカップから熱い紅茶を口に含んで、やはり無表情に視線を口髭の中将に向ける。

「メルカッツ提督は残念でした」

最初の一言は沈鬱な表情でのりだだったが、ゾフィーはその無表情で弔意を固辞した。思えばシュトライトとメルカッツはリップシュタットで同じ旗を仰いだ不本意な同志であった。決して望んで参加した盟約ではなかったが、同じとき同じ場所にいた両者の現在地は現世とヴァルハラに分かたれている。そのことに何らの感傷を憶えるわけでもないゾフィーは、やはり無言でシュトライトへ本題を促した。横目でその様子を見守るペトラは、時折ゾフィーが見せる光を絞り切ったような、眠たげな目を見て少なからず戦慄を憶えるのである。

「そう、感傷は不要ですな。では、単刀直入に」

シュトライトがそう言つて姿勢を正すと、ようやく男装の麗人は口元に微笑を浮かべた。それを同意の合図とみて誠実な理性の人と呼ばれる男は、その呼び名に相応しくない冷徹な目でゾフィーを射抜いた。

「あなたがたの、いえあなたの行動の目的は、前王朝の消えた皇帝、エルウィン・ヨーゼフ二世を探すことではありませんか」

「……………」

シュトライトは抑揚少なく、言葉に相応しくない音量でにじりよつた。ゾフィーは微動だにせずその視線を受け止めている。その一見眠たげに見える瞳には何の感情も映っていないようだった。

「いいでしょう。お話にならずとも結構です。私も勝手に話しているだけですからな」

「……………」

再びの沈黙に今や部外者になりつつあるペトラはそつと息を飲んだ。もしそうだとして、その人物を探す理由は何なのだ。生前メルカッツは銀河帝国正統政府解体後、姿を消した元皇帝の行方を追い続けていた。しかしそれは少なからず長年軍務に携わった帝国軍人として、帝室の恩顧に報いるためであつた。いまゾフィーがエルウィン・ヨーゼフを探しているとして、その理由はいったい何だろう。

「実はこういう噂が巷にあるのですがご存知ですかな」

「噂ですか？」

ようやく口を開いたゾフィーは淡々とした表情でシュトライトに続きを促す。シュトライトは冷たい視線のまま口の端に微笑をのせた。

「そう、故リヒテンラーデ公の私蔵した莫大な財がこの宇宙のどこかに未だ秘されているという噂……。そしてその情報を、逃亡中のエルウィン・ヨーゼフが期せず所持しているという」

シュトライトは発言の効果ををはかるようにじつくりとゾフィーの表情を読んでいたが、結局そこに何も生まれなことを悟ると小さくため息をついた。

「さすがに名にし負うメルカッツ提督のご令嬢。私の降参です」

「……………」

「できればご協力を願いたい。リヒテンラーデ公の莫大な隠し財産は本来帝国の国庫に納められるべきもの。間違ってもテロリスト……地球教勢力などに渡ってはならぬもの。あなたが提督から密かに受け取っている情報なり、それに類するものがあると私どもは踏んでおるのですが、いかがですかな」

シュトライトは深々と頭を下げた。その様子にペトラは心の内に狂乱を感じていたが、座して乱れぬゾフィーを横にそれをおくびにも出すことは許されないだろう。もはや彼女はゾフィーに畏怖すら感じていた。

「承知いたしました。しかしシュトライト閣下、私を拘禁なり捕縛なりなさって自白させれば済む話。ことは急を要するはず。そうされぬのはなぜです」

ゆつくりと頭を上げたシュトライトはそう問われて静かに応える。

「私どもは、死せるラインハルト陛下に顔向けのできぬようなことは成せぬのです。偉大なる敵将のその娘御に危害を加えたとあっては、いずれヴァルハラにてお叱りを受けるのは必定」

そう言うときシュトライトは言下に、ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツツの威光にかけてそちらも誠意を尽くせと言っているのだ。思えば最初からゾフィー側に拒否する権利はないのである。何せここは民主共和主義を掲げる国ではなく、絶対の権力者が存在する世界なのだ。そしてゾフィーはこの体制に短くも二十六年浴して暮らしてきたのである。言外の言葉の意味が嫌でも判る。

「幾つか条件がありますが、よろしいですか」

「無論です。あなたの権利はあなた自身が主張されるべきでしょう」

ゾフィーはシュトライトの言葉にようやく柔らかく表情を崩した。ここで主張しえない事項は、たとえ正当な権利があることでも認めぬと言うことだろう。貴族の令嬢にあるまじく、ゾフィーは唇を湿らすと慎重に言葉を発し始めた。

「まず……」

ここでの協議は妥結に至った。正午に参集したこの密会は、解散の頃には陽が西の空に傾ききった頃だった。ここでゾフィーとペトラはかなりの精神力を使い、ずいぶんと過大な条件をシュトライトに呑ませることに成功したのである。許可を得て音声の録音と、いずれの公文書の作成を取り付けたのだった。

「しかしフロイライン、すいぶんと遅しくおなりですな」

「閣下、これで私も商人の端くれですから。それだけに契約は神聖な

もの。全身全霊で履行致しますわ」

軍務省を辞した帰り道、シュトライトが用意してくれた軍用車を断って拾った民間の地上車の中で、ペトラはようやく沈黙を脱した。実際のところ精神の疲労が凄まじくいつそ眠ってしまいたいくらいである。

「お姉様の神経はワイヤーロープでできておいでなのではないですか」

ペトラが会談の感想をそう総括すると、それまで何やら口の中で独り言を繰り返していたゾフィーは、おもむろに絹のようなシルバーのロングヘアーを無茶苦茶にかきむしりはじめた。

「まずい」

「ゾフィー様？」

「どうしましょう、ペトラ」

かき乱されたままの髪でペトラを振り向くと、再びゾフィーは「まずいわ」と繰り返す。

「私、父上から何も預かっていないのよね」

「……………」

「これは早くベルンハルト兄様を探し出さねば…………」

ペトラは呆気にとられた様子でゾフィーを凝視した。その視線を受けて破顔したゾフィーは慌てて乱した髪を整える。胆力があるのは間違いないが、このあたりの抜け目もまたお姉様らしい、とペトラはほんの少し救われる思いをその姿に感じたのだった。

ゾフィーが軍務省の賓客としてシュトライトと面会する二日前、レオポルド・シューマツハはその軍務省の仮の住人となるはずの、とある元帥のもとを訪れていた。

執務室の扉を前に、シューマツハはひとつ深呼吸をした。別段緊張を強いられる相手ではなかったが、胸の内を探られるような態度を取らぬよう心の準備が必要だった。襟を詰めなおすと、彼は衛兵に来意を告げる。すぐに副官が駆け付け丁重にシューマツハを部屋の中へと迎え入れた。

「やあ准将、活躍しているようで何よりだ」

デスクに収まってそう歓待しながら、ワーレンは左肩を右手で押さえつけるようにもみほぐしていた。いくら科学が進んで失った四肢に不自由がなくなっただけでも、そこに付いているという感覚は打ち消しようがなく使用者に違和感を与えるものらしい。

ワーレンの左腕は、帝国軍人なら周知のことだが義手である。これも知らぬ者がないことであるが、地球教本部を壊滅させた際に間者によって毒薬を塗布したナイフで刺されたのが原因だった。五体満足のスューマツハには意識で理解する以上のことはできないが、一抹の同情は禁じ得ない。健常である自分を無条件に後ろめたく思う気持ちくらいは持ち合わせているが、それもまた欺瞞であるな、などと思いつくから、動乱の時代に生きながらなかなか自分と言う人間も度し難いなどと思う。

「元帥閣下の急務と伺い、馳せ参じました」

「直属でもないのに悪かったな。卿は宇宙海賊対応の任務に就いているという話だったので、シュトライトに無理を言って来てもらった」
執務卓からソファー席へと移動しながらワーレンは用向きの入り口部分について口にした。右手を差し伸べ着席を促しつつ、従卒の少年にコーヒーを注文する。

「どうだな、復命後の軍の居心地は。シュトライトは良くしてくれるか」

ワーレンは従卒がコーヒーを運んでくると、呼ぶまで誰も入れぬよう命じて立ち去らせた。執務室には午後の陽光が窓辺から斜めに差している。氣象局の予報は一日中曇と言うことだったから、厚い雲のほんの切れ間から漏れ出ている陽射しなのだろう。夜には雷雨になるらしかった。

「中将閣下は合理主義者ですから、私が役に立つうちは好きにさせてくれるお心積もりのようです」

「そうか、なかなか悪くないと見える」

ワーレンが言うと、儀礼的にカップに一口つけてシューマツハは目礼した。両目にはどこまでも落ち着いた色が灯っている。この場の上位者は観察するような表情で対象を見つめていたが、本来腹を探るなどというまどろっこしい芸当は持ち合わせていない性分がそれを諦めさせたようだ。透過ガラスになっているテーブルのモニターに情報呼び出すとさっそく要件に入った。

「先年より跳梁を許しているロート・アドラーだが、かねて地球教残党との繋がりが密接だとされているのは知っておるな」

「小官はむしろ地球教残党そのものという見方をしております」

ワーレンの問いかけに、少し興奮気味にシューマツハが答える。ここでは少々近視の度合いが強いという見せかけをしておく方が賢明だろうと判断したからだ。今は例の少年が言ったように、擬態が必要であったし、ワーレンに妙な印象を持たれて後日不利に働くようなことがあっては埒もない。ここは駒に徹するのがよからう。その反応に、少壮の元帥は声を出して嗤った。

「ほう、それはどういった根拠かね」

「連中は連中なりにですが、行動に方針を持っておるように思われます。ほかの宇宙海賊と比して、統率が取れているのも実際。これまで生きてまま捕縛できた者がいないのも、かの教団に酷似しております」
「なるほど。筋は通っているがその見方は少々危険だな」

シューマツハの擬態には気付かない様子で、気負いを制するように言うと身を乗り出して少し声を抑える。自然とシューマツハも姿勢を前へと傾けた。

「地球教残党というものが真実残っているかどうかは怪しい話だ。しかしこんな都合がよく影響力を少なからず有している記号もそうそうあるまい。今後とも人々の記憶があるうちは亡霊たちが蘇り続けるだろうな」

なるほどとシューマツハは内心で同意した。今後人類が携える辞書には「テロⅡ地球教」という記述が加えられることになるかもしれない。

「だが地球教を謳われては対処しないわけにはいかない。かのヤン・ウエンリーの語録に、陰謀で歴史は動かせない、というものがあるぞうだ。偉大な敵将の言を反故にしてはカイザー・ラインハルトにヴァルハラで会わせる顔がない。それに我々は先年、奴らの妄動により皇帝と皇太后ばかりか、国母たる御方までお命を狙われた。結果的に当時の軍務尚書が失われることになったのは哀惜の極みだ」

感傷的な表現でワーレンは自身の心情と責務についての意思を表明してみせた。一部皮肉が含まれていることに無論シューマツハは気付いたが、敢えて触れるようなことでもあるまい。つまるところ「地球教」を騙ったからには徹底的に撃滅、排除するという宣言だ。「それについては異存ありません。閣下のお力になるよう微力を尽くします」

シューマツハはそう言うのとそつと頭を下げた。

「よかろう。では要件に入ろう」

ワーレンが語った内容は要約すると非常にオーソドックなものだった。何らかの餌をもって敵を誘引し、撃滅の方策を打つ一方で、手薄になった敵の本拠地を叩いてしまうというものだった。話を聞きながらシューマツハは内心で首を傾げた。こうした方策は単純であるほうが応用も利くし成功率を高めることも困難ではない。別段不審なこともないが、足りないものが少なくとも二つある。それを無視してしまうような凡庸さはこの元帥に似つかわしくない。

「卿のさえない表情の答え合わせをしようか」

「元帥、お人が悪いですな」

シューマツハがため息をつくときワーレンは快活に笑った。どうや

ら合格らしいな、と少しだけ緊張を解く。

「しかし至難ですな。敵の根拠地を特定するのは」

思わずシューマツハが溢した弱音を拾い上げると、ワーレンはこともなげに言つてのけた。

「実はすでに特定してある」

「なんと」

シューマツハは思わず身を乗り出した。あれほど探しても見つけ出せなかったロート・アドラーの根拠地を、帝国軍はすでに察知しているという。それを探り出すためにシューマツハは自分の手のものをロート・アドラー内に紛れ込ませてまで情報を集めていたというのに。

「正しくは数か所に絞れたというところだな。ついでに言うと、賊の首領も特定できている」

シューマツハはここにきて降参することに決めた。ここを訪れるまでに期していた考えはすでに意味をなさない。目的を果たすにはここでワーレンの軍門に下るのが近道らしいと判つたからだつた。

「その人物については小官も存じております」

歯噛みしながらようやく言つてのける。額から汗が一筋流れたが、相対するワーレンは平然としていた。表情で続きを促しているのがしれる。

「元フェザン自治領主府、高等弁務官一等書記官だった、レオニード・グラズノフ」

シューマツハが言い当てるとワーレンは「よし」と言つて指を鳴らした。

「やはり卿に任せよう。どうやら因縁浅からぬようでもあるしな」

この人は、帝国はどこまでこの真相を掴んでいるのだろうか。もしかすると自分が真実だと思つていることなど、宇宙のどこかにある真理の一端ですらないのかもしれない。シューマツハは乾いた口内によく湧き出した唾液をぎこちなく飲み下した。下手なことを言つて藪蛇になることは今は避けたい。ここは大人しく任務を受領しておいて一旦退くのがベストだろう。

「卿が賊に潜ませている者たちはどうするかな。今後も有用ではあると考えるが……」

ワーレンの言にシューマツハは数秒応えずにいたが、盛大に肩を落とすと真つ青な表情を上位者の面前にさらした。本当にお手上げである。フェザーンの口車に乗ってやって、幼帝エルウィン・ヨーゼフ二世を誘拐した際も、充分に権力者たちの魑魎ぶりに対処しえたと思っていたが、ただ権力を志向するものと権力の持つ影響に責任を果たすものとの違いには雲泥のものがあるようだった。

「閣下はどこまでご存知なのか」

率直に問われてワーレンは思わず肩をすくめた。別段責めているつもりも弱味を握る気もないのだからシューマツハの態度に軽く困惑していると言うのが正直なところだろう。口に出してはごまかすように情報源を吐露する。

「さてな。私は今話したようなことしか知らぬよ。情報を提供してくれたのはケスラーだが、彼なら他にも何か知っているかもしれない」
「どうやら少年のことは知られていないとみてよさそうだ、とシューマツハはひとまず安堵した。それとも憲兵総監たるウルリツヒ・ケスラーはそのことも知っていて敢えて僚友に秘しているのだろうか。」

「ところで餌の件だが、使いたい駒がある。おそらくグラスノフには有用だろう」

シューマツハが内心で当惑している間にワーレンは話題をもとに戻した。それによって彼も落ち着きを取り戻す機会を得た。

「協力者を得という話でしたが」

「ユリアン・ミンツを知っているだろう」

そう尋ねられてシューマツハは脳裏に亜麻色の髪をした美青年を思い浮かべた。正統政府に参加させられていた頃、ハイネセンで知り合う機会があった。当時においてはさして重要人物だったわけではないが、僚友たるベルンハルト・フォン・シュナイダーに引き合わされたのを憶えている。

「ヤン・ウエンリーの後継者ですな。イゼルローン共和政府軍の司令官だったという」

いずれ後見のメルカッツ提督の手腕による用兵だったろうが、ヤン・ウエンリー亡き後、帝国との最後の艦隊戦で事実として帝国の大軍と拮抗しているのだ。寡兵だったイゼルローン軍が一局地戦闘において一時的に帝国軍を圧倒し、停戦から講和へと至らしめた。実際はラインハルトの不調による間隙を縫って、ユリアン達が奇襲に成功したというのが本来の筋であるが、当時において多くの人は真実を知らないため、それぞれがそれぞれの都合により独自に解釈するに至っている。事実が詳らかになるのには幾世代かを渡つての後世のこととなるだろう。シユーマツハとしてはメルカッツの存在があつてこそなのだと考えているのも無理からぬことである。

ただ、そのメルカッツもその戦闘で死没してしまった。自分はいつまでおめおめ生きているのか。感傷に浸りかけるシユーマツハの意識を現実に戻したのは快活な帝國元帥の声音だった。

「そのユリアン・ミンツの手の者が先日とある用件で助力を求めてきてな。その見返りに今回の件、協力すると申し出てきた」

経緯は判らないが異常なことだとは思つた。発言を逡巡するシユーマツハを、ワーレンは興味深げに観察している。

「協力の申し出はよいとして、グラズノフ……ロート・アドラーに対して餌として機能するかどうか疑問です」

シユーマツハの疑問に対してワーレンは一呼吸おいて続ける。

「実は協力者の一行は、私が地球教の本拠地を叩いた際、内部に侵入していた者たちでな、どうやらその際に地球教の重要な機密を持ち出していたらしいのだ」

「……誠ですか、それは」

「ということにしてある」

シユーマツハはそう聞いてうすら寒い感覚を憶えた。ロート・アドラーとは地球教の残党である、ということになっている。だがその実はサイオキシン麻薬などを主要とした旧地球教の資本や闇物資を利用することによって莫大な利益を得ている宇宙海賊だ。

どういうわけか、旧フェザーンの一官吏に過ぎなかったグラズノフが牛耳っているが、もとは地球教の一活動部隊である。かつての地球

教の機密と聞けば、拝金主義者のグラスノフと狂信者たちは、それを奪おうと考えるだろう。機密を所持していると帝国軍がそれらしく噂を流すだけで簡単に食いつくに違いない。何より餌になる随員がその噂にリアリティーの配色を勝手に施してくれるのである。

実際のところグラスノフが欲しがっているのはおそらく合成麻薬であるサイオキシンの麻薬の製法に関する情報だ。シューマツハが知る限り、地球教の残党はサイオキシンの麻薬の製造方法のすべてを知悉しているわけではないようで、材料となる素材のいくつかの精製に不明があるらしく、その情報の獲得に躍起になっているのだ。ロート・アドラーと接触を繰り返す中でシューマツハはその事実に行きついたわけだが、ワーレンをはじめ帝国軍はまだそのことに気付いていないだろう。断片的な情報は集まりつつあるはずで、いつか正解にはたどりつくだろうと思われる。だがそれまで時間は稼げるはずだ。

脳裏で考えをまとめつつ、しかしやはりその手は有効だろう、とシューマツハは胸中で一人断じた。

「では作戦について具体的な説明を行う」

明快な声音でワーレンが言うと、シューマツハは怜悯な視線を声の主に向けた。

目の前には小銃を提げてこちらに油断ない視線を送りつける見張りが三人、いずれも屈強そうな上半身を窮屈な軍装に押し込んでいるのが拘束されている人たちに威圧感を与える。それを効果として見込んでいるなら三流程度の策士は務まるだろうが、どうやら単純に用意が間に合わずあり合わせで着こんだに過ぎないらしいのは、準備の杜撰さが見て取れると言つて言い過ぎはないだろう。

「で、そんな連中になんでわざわざ捕まってやる必要があるのかね、船長さんよ」

両腕を拘束された状態で自称エースが、隣人のやはり拘束された元独立商人の耳元に抗議する。

「虎穴に入らずんば虎兇を得ずというだろう」

「ふん、もうちよつと気の利いたことが言えないものかね」

いつものやりとりにシュナイダーは少々食傷気味な腹具合を感じて、思わずわき腹の当たりに目をやる。冗談と判つていても、その流れに乗るには相当の訓練が必要なようで、こういう時にうまいセリフひとつ出さない自分に苦笑いするしかなかった。自分のユーモアセンスには諦めを呈して、シュナイダーは二人の会話にごく普通に参加することにした。

「それでこの場合、虎兇は何にあたるのかな」

「いい質問だ、シュナイダー中佐」

ポプランとの舌戦に飽きていたボリス・コーネフが決して皮肉ではなく、助け舟とばかりにシュナイダーの質問に食いついた。すぐ隣で盛大な舌打ちをするポプランを一瞥し、船長はシュナイダーに片目を瞑って見せる。

「それはもちろん、情報さ」

もったいぶつて言つた割には抽象的過ぎる回答に、後ろ手に拘束されたままのエースが「またそれか」と顔をしかめた。

「虎穴に入っただけでは虎兇とやらを得られんのは現状が示唆するに余りあるが、これからの方策は？ 無論あるのだろうか」

「皮肉を言いなさんな。俺もこんなに早く捕まるとは思っていないかったからな」

ポプランの挑発的な質問に、ボリス・コーネフは端然と応える。今それを考えているところだ、と付け加えると不機嫌そうに天井を仰ぎ見た。見張りの男たちが交代なのか部屋から揃って出ていくのを横目で見送りながら、シュナイダーは声を一層抑えると同行者たちに提案をした。

「何か策があるのなら、状況を打破する程度のことではできると思うが……」

淡々と言うシュナイダーに、残りの二人は思わず顔を見合わせる。「それはつまりどういうことかね、中佐」

シュナイダーはボリス・コーネフの疑問に対して、後ろ手に拘束されているはずの両手を二人の目の前に披露して見せた。「こういうことだが」と言つて慣れないウイंकを付け加える。

「あんた特殊工作員の記章持ちか？」

ボリス・コーネフはあぐりと口を開けると、シュナイダーの表情と解錠された拘束具とを交互に見比べて嘆息した。

「今度やり方を教えてくれ」

楽し気に笑いを漏らしたポプランは背中を向けると拘束具の解錠を促す。シュナイダーは手早く二人の戒めを解く。

「機械なんてものは脆弱なものだな」

「そうと知って使い方に気を付ければそうでもない」

「人間と同じだな」

人生観やら処世観やらを口々にしながら男たちはあわただしく立ち上がった。いつ見張りが戻ってくるかわからないが、逃げ出したことにはぜひとも気付いてもらう必要がある。問題はそのタイミングだけだ。

「地球の時と同じ展開じゃないか？」

壁に身体を寄せてあたりを警戒しながらボリス・コーネフが感想を漏らす。

「リアクションを待つというやつか。あの時は大博打だったぜ。帝国

軍がうまい具合に来てくれなければどうなっていたか」

「そのあたりユリアンの奴は持っているからな」

ポプランとボリス・コーネフが思い出話をしているのを眺めていると、二人は示し合わせたようにシユナイダーを顧みた。視線がぶつかってシユナイダーは驚いたように表情を止める。

「さて、おたくは持っているかな」

「俺の見たところ中佐は持っている方だろうな」

身勝手にポプランが請け負うのを呆れてやり過ぎすが、ボリス・コーネフも悪乗りを止める様子はない。

「それはぜひとも期待させてもらおう。ひとまず没収された手荷物の奪還を敢行したいのだが、さてシユナイダー中佐どっちへ行つたものかな」

無造作に通路へ出て左右を見渡す。微かに人の気配を感じる方を指さし、シユナイダーが先行した。隔壁の脇に張り付いて中から見張りが出てくるのを待つと、それほど待たないうちに一人出てきたので音もたてずにシユナイダーが羽交い絞めにする。

「なにをつ……」

見張りが叫びかけるのをポプランは左手で抑え、空いた右拳をみぞおちにめりこませる。息の合った連携にボリス・コーネフは口笛を鳴らして称賛したが、他の二名はそれには構わず視線を交わすと、気絶した見張りを床に転がして部屋の中に躍り込んだ。中には三人いたがシユナイダーとポプランとで一人ずつ対処すると、最初に伸びさせた見張りのブラスターを回収していたボリス・コーネフが、最後の一人に照準を合わせたまま部屋に踏み込んで決着がついた。

「貴様らどうやって……」

喘ぐように言つて両手を挙げる残敵に、しっかりと照準を合わせたままボリス・コーネフはつかつかと歩み寄る。

「少しは独創的なことを口にしてもらいたいもんだな」

シユナイダーらは自分のことを棚に上げて悪態をつく船長に同意を示しつつ、両手を挙げている敵兵から武器を奪い取る。

「さてと、いくつか質問に答えてもらいたい。ここがどこで、残りのお

仲間はどうだろうか、ぜひとも穏便に教えてもらいたいのだが、どうかね」

さきほどまで自分たちの自由を拘束していた器具をあてがいつつ、ポプランは憎々しげに言葉をたたきつける。

「こいつらが地球教徒なら聞くだけ無駄さ。とつと舌を噛ませてやればいい。何なら手伝ってやってもいいが？」

そう言ってきつく締めあげると拘束された男は悲鳴をあげた。どうやら地球教徒ではないらしい。見苦しく命乞いを始めるので小銃の銃底で殴りつけて静かにさせた。

「化けの皮が剥がれたな」

シユナイダーが断じると他の二人も頷いて同意を示した。

三人が拘束されたのは、ワーレンのもとを発つてフェザーンを出発してから五日目のことだった。元帥府で提示された情報をもとに立ち寄ったとある補給基地で捕縛の憂き目にあつたのだが、ことさらに自分たちがロート・アドラーであることを言い立て、シユナイダーらの乗船する一隻の艦に対して三十隻もの小艦隊で取り囲んでの出来事だった。民間船を偽装した工作艦は、一行のリーダーであるボリス・コーネフ船長の指示で何とか捕縛から逃れたが、船内に残ったマリネスクらとはそこではぐれてから後は互いに音信を絶っている。無論のこと追跡は受けているだろうから、無事で今もいるのかどうかすら不明だった。

「こいつは元帥に捨て駒にされたかな」

「……そういうお方とは思えんが」

ポプランが感想を述べるのにシユナイダーは抗弁してみたが、そうでないとは言い切れずその歯切れは悪かった。ただ、その時ボリス・コーネフはその件には一切言及せず、黙って腕組みしたまま艦橋のスクリーンに映る敵船集団を眺めていたのをシユナイダーは印象的に憶えている。思えば、捕まったあと船長はこう言わなかったか。こんなに早く捕まるとは思わなかったと。示唆に富むセリフだと今にして思うのは、シユナイダーの考えすぎだろうか。

「さてこれからどうする。ほかの連中が戻って来るのも時間の問題だ

と思うが」

「そもそもここが何処かすら判らないのではな」

ボリス・コーネフを除いた二人が意見を交換していると、そのうちから離れて室内を搜索していた当のフェザーン人は目的のものを見つけて、中から端末機のようなものを引っ張り出す。

「家庭用コンピュータの操作端末なんぞ持ち出して何をする気だ？」

ポプランが軽口を言うのにボリス・コーネフは精一杯嫌な顔をしてみせる。

「ナンセンスな奴だね。それに擬したスパイ道具に決まっているだろう」

「スパイ道具ね。どっちがナンセンスだか」

その言及に対しては「ふん」とだけ答えてボリス・コーネフは端末を操作する。エアコンやら照明を操作するような手順で作業を終えるとシユナイダーに端末を投げてよこす。

「これで三時間程度で帝国軍が迎えに来てくれるという寸法さ」

「つまり紐付きだったというわけか」

端末機を手の中で弄びながらシユナイダーは上目遣いに船長を視る。続けては、だがまあ当然と言えば当然か、と小さく溢した。

「しかしこの段階でこの手を使つては目的を果たせないのでは？」

だから、こんなに早く捕まるとは思わなかった、と言うわけか。元撃墜王の表情を窺うと先方も似たようなことを考えていたらしく、どちらともなく二人は頷き合った。ボリス・コーネフに至つては肩をすくめて「命あつての物種だからな」とうそぶいた。

「だが三時間は長い」

シユナイダーがそう言ったのは、にわかには室外が慌ただしくなったからだ。三人が逃亡したことに、見張りや連絡の取れなくなった他の連中が気付いたのだろう。あたりから怒号やら人の激しく動く様子が伝わってくる。

「さて、帝国軍を呼んでしまったわけだから、その三時間の間に手土産になるものを用意せねばならん」

「順序が逆だろうか」

フェザーン人が飄然と言うのでポプランが思わず突っ込んだ。二人のやり取りに笑いを誘われながら、生真面目な帝国人は手際よく小銃やらブラスタを昏倒している見張りからはぎ取る。予備のエネルギーパックをそれぞれに手渡した後、見張りのホルスターから炭素クリスタルの軍用ナイフを抜き取ると、少しの間それを眺めてから鞘ごと懐にしまった。

「シユナイダー中佐、お前さんは白兵戦技にも長けているのか？」

「なに、ポプラン中佐の戦歴には及びもつかんさ」

「いやいや、俺のは喧嘩殺法だからな。戦歴などとたいそうなものではないぜ」

そう言つて緑光のような瞳を片方だけぱちくりとやる。うまくやるものだなとシユナイダーは妙なことに関心を示した。

「さあ、お客さんだぞ」

ボリス・コーネフの呑気なセリフが発せられて、のちに三人対二個小隊と判明した戦闘が口火を切った。幸いなことに三人の立てこもった部屋がこの施設の管制室だったことと、敵の半数がマリネスクたちを追つて移動戦力ごと出払っていたこと、敵がロート・アドラーの最下部組織でかつ新参のグループだったことが戦闘をシユナイダーたちに有利に運ばせた。何とか三時間の攻防を乗り切り、帝国軍の来襲を迎えた一行は奇跡的に無傷だったのである。

管制室のコンピュータから、ここがリップシユタット戦役で遺棄された無数にある補給基地のひとつであることを知り得たのちは、施設内の隔壁を操作しあちこちで敵戦力を分断することに成功していたし、対艦砲台を無力化することで、来援した帝国艦艇をスムーズに基地内へ誘導することができた。

シユナイダーに言わせれば運がよかつたに過ぎない、ということになるが、ポプランが述懐するところによると、「優秀すぎるぜ、やつこさん」と言うことになる。だてに帝国軍の宿将の副官を務めていたわけではないらしい、とのことだった。

やがて帝国軍艦艇が百隻ほどの規模で来援し敵兵力は降伏をした。

生き残った者は残らず捕縛され、シユナイダーはじめポプランたちは
一様に彼らが地球教徒ではないという感想を強めたのだった。

「私はロート・アドラーを過大評価していたらしいな」

迎えに来るなりそう述べたのは、ワーレンに本件を託されたレオポルド・シューマツハ准将だった。その発言の意味するところは、シュナイダーたちが三人で敵集団に抗しきれたからというわけではなく、あると思われていた統制を持ってなかったことに対してだろう。これまで手に入れられなかったロート・アドラーの機密にあたるものが、シュナイダーの調査によりごろごろと出てきたのである。

「組織のバランスが崩れているのでは？ 急造の集団にはありがちなことです」

シュナイダーは旧知の上官の感想に思うところを述べた。そうしてシューマツハと再会を喜び合う時間を得たが、会話のたいは戦没したメルカッツの話が占めたのは自然なことだっただろう。ところがそれ変わった話題の内容にシュナイダーは驚くことになった。

「貴官には話しておいてもよからうかと思う」

そう切り出した内容は、消えた皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世の消息だった。それは故メルカッツが探し求めてやまなかつた情報だったのである。

シュナイダーには生きてあるうちに成さねばならないことが二つあった。ひとつはゾフィーに会って、メルカッツの遺品を届け、伝えるべきことを伝えること。そしてもう一つがエルウィン・ヨーゼフ二世の消息を得ることだ。

「エルウィン・ヨーゼフ二世は生きていますか」

この人物のことを今となつてはなんと呼べばいいか判断のつかぬシュナイダーだったが、メルカッツは死に際にまで皇帝陛下と呼称した。ならばそれに倣うべきなのだが心の中に抵抗感があるのも否めない。

「公は……、エルウィン・ヨーゼフ二世は生きています。そしてこれは内密だが、実は私の保護下にある」

「なんと……」

補給基地から乗り移ったシューマツハの乗艦にある彼の執務室で、シュナイダーは思いがけない告白を聞いて意識のやりどころに迷った。エルウィン・ヨーゼフ二世が生きている。このニュースはどれほどの銀河に影響があるだろうか。シュナイダーは沈思せざるを得ない。プラスの影響を持ちえないトピックであることは明白である。この事実に関わる人々に暗澹たる気持ちを与えて余りある。メルカツが生きてあればどう捉えるか。きっとお喜びにはなるだろう。しかしやはりこの先のことに思いをきたして憂う気持ちを膨らませたに違いない。

「准将はエルウィン・ヨーゼフをどうされるおつもりなのですか」

意に介せずリップシュタット盟約に参加し、やはり意に介することなく銀河帝国正統政府に参加したかつての仲間。それがシュナイダーとシューマツハの関係性だ。それだけに連帯の意識は余人には理解できない深いところにある。互いに口にして確認することなどないが、その感情は恐らく同じ色をしているだろう。

かつての主君を擁したシューマツハは、帝国軍の一員として存在するいま何を考え行動しているのか。

「そうだな。どうするのか、そろそろはつきりせねばなるまい」

その返答はシューマツハの無策を呈するものではない。覚悟を決めるといった色あいが濃かった。

「公はいま、ロート・アドラーの下部組織の一団を率いている」

「まことですか」

「無論、ロート・アドラーに真から与しているわけではない。擬態だ。素性も秘匿されている」

ウィン・ヨーゼフ二世は何らかの目的をもって行動している。そして帝国准将であるシューマツハは軍には内密にそれを支援している。つまり、ことの主と従が彼の第一印象とは逆ということである。そこまで素早く看取したシュナイダーは、他に無人の室内にいながら声を一段低くした。

「准将たちの、いやエルウィン・ヨーゼフの行動の目的はいったい何な

のです……」

シュナイダーの心配げな視線にひとつ頷いたシューマツハは、ことの発端から話をし始めた。その様子はシュナイダーに語り聞かせるのではなく、この会話を通して彼の意識にあるものを整理しているかのようにだった。

「この始まりはリップシュタット戦役以前に遡る」

シューマツハの低く太い声に、シュナイダーの意識は四年前に逆行する。あの当時、こうまで世界が変転するとはまったくもって想像の外だった。自分の境遇も人間社会のありようも、願ったとしてもこうドラスティックな展開が起こることはないだろう。そうした物思いも手伝って、彼はシューマツハの語る物語に意識を沈めていった。

後世の歴史家が論ずるところでは常識的なことだが、リップシュタット戦役は、当時のリヒテンラーデ・ローエングラム枢軸が巧みに扇動した結果、門閥貴族たちが妄動的に付和雷同し激発させられた歴史的事件である。最終的に門閥貴族たちが滅亡し、続く謀略の嵐の中でリヒテンラーデ公が没落するのだが、当のリヒテンラーデ公は別なシナリオを用意していたとされる。それはローエングラム候を陥れ失脚させたのち、幼帝を封じて理想の政治を執ることだった。

「あるいは、リヒテンラーデ公はローエングラム一派が弄したほど辛辣なことは考えていなかったかもしれない……」

シューマツハは私見を挟みつつ会話を進めていく。シュナイダーは黙って頷くのみだった。

リヒテンラーデ公は当時もそれ以前も手中に皇帝を擁していた。フリードリヒ四世の治世から引き続き権勢を誇っており、その体制は盤石かと思われていた。しかしラインハルトの登場が、帝国どころか全銀河の調和さえ失わせしめた。人類が五百年かけて積み上げてきた微速の歴史を、ラインハルトというひと振りの剣がすべてを打ち毀したのだった。それからの歴史はわずかな期間、急加速をすることになるが、今また人類史は緩やかな停滞に近い速度を取り戻しつつある。それは人類史においてしばしば起こる事象で、何もこの時代に特筆することではないだろう。ただし規模においては人類史上最大で

最速、それがこの時代の印象を際立たせる最も大きな理由なのだろう。

リヒテンラーデ公は時の権力者であったが、全銀河の趨勢を指向できるほどの立場にはなかった。当時においてそれを可能にできる存在があるとすれば地球教に他ならない。リヒテンラーデ公もまた地球教との密かな交友を持つ権力者だった。

「おや、卿はあまり驚かないのだな。私はこのことを知った時、一種の虚脱状態に陥ったよ」

シュナイダーは生唾を飲み込んだ。実を言うとシュナイダーはこのことをおおまかに知っていた。知り得たのはユリアン達が地球から持ち帰った膨大なデータによってだが、シューマツハの漏らした感想には完全に同意を持ったのは確かだった。

「まあどちらもそれぞれを利用しているつもりだったのだろうな。この頃の地球教はことを急ぐあまり、歴史の影の支配者と言う立ち位置から、単なるテロリズム指向集団になりつつあった。おそらくはルビンスキーの登場が変質の大きな原因だろうと私は見ている」

人類史において竜頭蛇尾をもっとも体現した集団が地球教である。これは後世の評価であるが、膨大な資料を解析するさなか、シュナイダーはまさにそれを感じたのだった。時の権力者、ゴールデンバウム王朝においてはリヒテンラーデ公、自由惑星同盟においてはヨブ・トリューニヒト、そしてフェザーンの黒狐。その誰もが地球教と密接な関係にあり、かつ相手を利用し己の権勢を確固たるものにし、最終的にはそのくびきから脱しようとしながら滅亡していった。ワーレンの元帥府からの帰途、車中でボリス・コーネフが口にした禁忌の品……宗教とは人類にとってそれにあたるのではないか。そんな示唆を得たシュナイダーだった。大きく息を継ぐと身体の中に溜まった重いものをため息と一緒に吐き出す。

「リヒテンラーデ公は早くからフリードリヒ四世のあとは、エルウィン・ヨーゼフ二世を擁立することを企図していたようだ。ほかの有力者を排除する方法については何らかの算段があったのだろうな。それこそ他でもない地球教を存分に利用するつもりだったかもしれない。

あの頃ブラウンシユバイク公の専横ぶりを隠れ蓑に、リヒテンラーデ公の謀略は百発百中だったというから」

ふと思い当たることがありシユナイダーは言葉を挟む。それは唐突な事件だった。

「例えば、クロプシユトツク事件なども？」

シユーマツハは静かにしかし深く頷いた。あり得ない話ではない、とシユナイダーは心の中で首肯した。考えれば、あの事件でブラウンシユバイク公を効率よく排除できていれば、そのあとあそこまでローエングラム一派が力をつけるような出来事は起こらなかったはずである。その事件を主導したのがリヒテンラーデ公であっても、今思えば何の不思議もないのだった。それとも、それもこれもこじつけた考え方にすぎないだろうか。

「エルウイン・ヨーゼフ二世は、生まれたときから難病を抱えていたんだ。脳下垂体が成長に伴って肥大せず、成長ホルモンの不足によって身体成長が遅れる小人症という症状だ。もちろん劣悪遺伝子排除法に抵触する」

そうか、とシユナイダーは得心がいった。当時皇太孫だったエルウイン・ヨーゼフ二世の年齢が、早逝した彼の父親であるルートヴィヒの没年と合わない、という奇怪な事実があり、あれこれあらぬ噂に塗れていたが長らく黙殺されていた。シユーマツハの話が事実であれば、小人症の事実を隠蔽するために、エルウイン・ヨーゼフ二世の生まれ年は偽装されたのだろう。シユナイダーの察しは的を射ていたらしく、シユーマツハは僚友の鋭敏さに素直に賛意を示した。

「さすがメルカッツ提督が子飼いにしただけのことがある。その通りだ、公は五年、年齢を減じて公表されている。現在九歳ということになってるが、実際は十四歳におなりだ」

宮廷のなんとも歪な一面がまた目前にさらされて陰鬱な成分がシユナイダーの表情に拡がった。自分たちの、メルカッツの忠勤が何らかの報いを受ける日は来るのだろうか。それとも故人はそれをすでに得ていたのか。決して得られぬことを理解して軍務についていたのか。例え生きてあつたとしてもかの人の心中を知り得ることは

ないだろうと思うから、そのことについて答えを探そうとは思わない。ただ何らかの決着があり、自分を納得させられるだけのものが欲しいと感じた。それがきつと報いというものだろう。

「さらにエルウィン・ヨーゼフ二世には、地球教トリヒテンラーデ公による陰謀が仕掛けられた」

かの幼帝が、しばしば勘気を起こし手の付けようのなくなるというのは、旧来より囁かれていたことであるが、それが陰謀の主たちの手によるものだとしユーマツハは言うのである。

「四年前、公を誘拐した際に私は彼を野生動物のようだと感じた。時折理性を回復するが、平常はとにかく喚き暴れてひどいものだった」
シユーマツハは少し思い出したように失笑をした。首を数度横に振ると真顔に戻って「失礼」と呟く。

「とにかくひどいもので側仕えに雇った少女が大怪我を負わされたりしたものだ。亡命時、船に乗せてくれた商船のキャプテンは山猫の類と、公のことを表現したがまさにその通りだった」

そう聞いてシユナイダーは少し首を傾げた。ハイネセンに到着しからのエルウィン・ヨーゼフは聞くほどに暴れることもなく、この年頃の子供にしては比較的落ち着いた少年であると感じたものである。そうは言ってもシユナイダーが日頃顔を合わせる機会はほとんどなく、その印象自体はメルカツツから伝え聞く程度のことだったが。

「その頃には薬の効果が薄れていたからな。時折禁断症状が出て、公はずいぶんお苦しみになったが……」

「薬……ですか。禁断症状とはまさか」

シユナイダーの驚愕に応じてシユーマツハは真剣な表情で頷いた。「サイオキシシン麻薬には催眠効果もある。精製の度合いを変化させることで得たい効果を顕著にすることが可能だ」

エルウィン・ヨーゼフ二世は幼児の頃から日常的にサイオキシシン麻薬を変容させた薬品を投与されていた。このことは後世においては、限りなく事実に近い疑惑として研究の対象になっているが、当時の人々は幼帝が度々激昂する現象について深く考えず、単なる奇行とし

て放置していた。それが誘拐によって投与の連鎖から逃れたことで、誘拐に関わった人たちがいち早く事実が付いたというのが真相だったのである。

シユーマツハは少年が口にした「今はもう別の人間だ」という自覚を思い出す。サイオキシンの麻薬の禁断症状から脱して正気に戻った後で、自分はエルウィン・ヨーゼフの錯乱した意識から分裂して生まれられた精神だと彼は誤解したのではないか。真実は、ようやく精神が健康に回復したということではないのだろうか。

「准将が帝国軍に復帰までしてなそうとしていることは、地球教の残党を討ち、幼帝の心を救うことなのですね」

シユナイダーの憶測を含んだ確認に、自嘲めいた表情を浮かべてシユーマツハは首を振った。そんなご立派なものではないと零す。

「卿も知つての通り、帝国軍はいまワーレン元帥の一軍をもつてロート・アドラーを討滅することを決定した。放っておいてもかの集団は元帥によって撃滅されるだろうな。だがそれでは収まらないのだ。公のお気持ちがな」

ものごととは、そうと判つていても思いもよらぬ一面を、一面によらず持っているものだ。シユナイダーはなぜか悄然とする気持ちを捨て余す自分を見つめている。世の中はなんと偏見に満ちているのか。自身の内面からそのことに気付くことがあるということに、ただただ新鮮な驚きを感じていた。

「それともう一つ俗な理由があるのだが」

「それは？」

沈鬱な気持ちを払拭するようにシユーマツハは年少の同郷人に笑顔を見せた。どこか人好きのする、悪い笑顔だった。

「実は故人となったリヒテンラーデ公には莫大な隠し財産があるのだが、それが公の、エルウィン・ヨーゼフの生体認証を必要としている。ロート・アドラーの根拠地を探しているのは、地球教が保持していたもう一つの符牒を手に入れるためだね」

なぜ、とは考えるべきことではないのだろう。シユナイダーは自分の世界の、宇宙の狭さを、宇宙だと思っていたものの狭さを痛感せざ

るを得ない。

「隠し財産を手に入れた後はどうするのです」

シュナイダーは言いようのない疲労を強く感じていた。だがそれは聞いておかねばならないことだった。

「そうだな。私には私に命運を託してくれた幾人かの部下がいてね。その者たちと、公、この宇宙が住みにくくなった善良な者たちを集めて街でも作れればいいと思っている」

シューマツハは遠くを見つめた。視線は部屋の壁を、艦艇の隔壁を突き抜け宇宙を渡り、どこか辺境の惑星の地表にでも届いているかのようだった。

「退役されるのですか」

「いや、それでは完全には自由になれんだろうな」

そう返事したシューマツハの瞳には企みの色があるのにシュナイダーは気付いたが、それについて言及することを今は避けておくことにした。

「さて、伝えるべきことは以上だ。少し休んだ方がいいな。卿の仲間たちとも今後の方針について共有すべきことが多々あることだしな」
シュナイダーたちを収容した小艦隊はフェザンには戻らず、マリネスクラを工作艦ごと拉致した集団を追っている途中だった。懸念は敵が拉致したクルーたちを害することがないかどうかであるが、ボリス・コーネフは不安に気分を曇らせる様子もなかった。

「あいつの立ち回りは恐らく宇宙一だろうからな」

シューマツハとの密談前、彼はそう言い放つと大きなあくびを残してあてがわれた個室へと消えたのだった。

濃く立ちこめたジャミングの霧を突き抜けてみると、目指す宙域は案の定戦闘状態に陥っていた。ワルキューレの狭いコクピットの中心から戦闘宙域を臨んで、巨漢のパイロットは母船に向かって通信を放った。

「お嬢の見立て通りだ。ロート・アドラーの構成集団と見られる小部隊に商船が追われています」

「商船、並びにロート・アドラーをA（アー）・B（ベー）と呼称します。それぞれの数は？」

ヒルデブランドに応えたのは厳めしき表情をまとったゾフィーである。相変わらず戦闘中は抑揚に乏しい口調で話す。双眸は細められておりどこか眠たげにも見える。それは彼女が神経を研ぎ澄ましているときの特徴だった。普段の鷹揚さは完全に為りを潜め、指揮席周辺は温度を下げたかのような錯覚を近侍のクルーたちに感じさせる。

「Aの一に対しBが一〇一！」

「一〇だと？」

思わず大声を出したのは艦内のドックで待命中のミハエルである。偵察に出たヒルデブランドを支援するためコクピットで通信を受けていた。

「装備はどうですか」

「軍用の武装のあるもの三程度。あとは輸送艦に艦砲を添加した程度のもんです」

ヒルデブランドの強行偵察機からの情報を受け、それぞれが思惑を巡らせる間、ほんの少しの無音状態が続く。沈黙を先に破ったのはコクピットで待機中のミハエルだった。

「お嬢、こちらの戦力はたかだか駆逐艦が五隻。こっちも武装を一部取っ払っている有様だ」

「ミハエル、泣き言はおよしなさいと前にも言いませんでしたか」

「……しかし」

ゾフィーはミハエルを黙らせると近くのクルーに静かな怒声を叩きつける。

「出られるワルキューレの数は？」

「じゅ、十二機三個小隊が即時出撃可能です。残りも随時発艦準備に入っており、増援は八機二個小隊が出撃できますー！」

ゾフィーは表情を動かさないまま頷くと改めてミハエルに指令を下した。

「待機中の三個小隊を即時発艦させなさい。B集団を後方より半包囲しつつ攪乱する。まず制宙権を押さえます」

ゾフィーの冷たい声音を受信して、ヒルデブランドが偵察宙域から即座に返電する。声からは緊迫感の成分が十二分に漏れ出ていた。

「お嬢、こちらは寡兵です。制宙行動など何分ともたない！」

「先刻承知です。こちらが寡兵であることを連中にわざわざ知らせるの？」

切り捨てるように言い放たれた言葉が両パイロットを絶句させた。目まぐるしく脳細胞が回転し河が海に注ぐように思考がまとまっていくな。

「そうかよ」とガラ悪く、しかし生き生きとした声色でミハエルが小さく呟いた。「Aを逃がす時間稼ぎをしようって言うんだな」

それは確認ではなかったが迷いのない言葉だった。ゾフィーは一息つくると第一陣の十二機が次々と発艦許可を申請するのに受領を与え、流れ落ちるように一機また一機と宇宙の深遠に吸い込まれていく様子を艦橋から見送った。

ジャミングの網を張り巡らせながらミハエル隊がB集団の後方に取りつくなり一斉射撃を見舞う。大軍が来ているぞとブラフをかけるのである。兎を追うのに夢中だった猟犬どもは、後方を扼されて初めて自分たちがハンティングの対象になっていることに気付く。彼らの心理はゾフィーたちには正確に読めないが、実際には完全な油断のあとの恐慌が訪れつつあった。

恐慌の理由は自分たちが本来の戦力より半数を減じていることであり、その功績は図らずもシユナイダーたちが作り出したものだっ

た。敵ははじめ商船を十五隻の集団で追い回していた。途中、補給基地での異変が伝わり五隻が引き返している。この引き返した五隻が敵の中心戦力だったのが幸いした。追っているのは輸送艦が一隻、巧妙に逃走し手を焼いたがほとんど捕捉していたし、逆檄についても深刻なことにはならないだろう。そう連中が考えて不思議はない。結果ゾフィーたちは本来の半分以下に戦力を低下させた敵と戦闘することになったのだ。無論、彼女たちは知りようもなかったが。

戦闘は徐々に激化する様子だった。先行したミハエル隊を迎撃するため敵戦力もワルキューレを展開させようとしたが、すでに序盤の制宙権を手中に収めていたミハエルたちに成すすべなく発艦するごとに撃墜されていく。敵は一層の狂乱状態に陥った。自分たちに二、三倍する兵力が襲い掛かっていると勘違いし始めたのだ。さらにゾフィーは敵の勘違いと狂乱を増幅させるための一手を打つ。五隻の駆逐艦による保有火力の一挙投入である。

「さて、後のことは後で考えることにしましょう。エネルギーの尽きるまで撃つて撃つて撃ちまくりなさい！」

戦闘中のゾフィーの指示に抗うすべなど搭乗員たちにあるはずもなく、指令は忠実に実行された。一斉射から数分間、それは通常三十隻程度の小艦隊が繰り出すエネルギー量に匹敵した。

「ゾフィー様！ 艦砲のエネルギーが尽きます!!」

一斉射から正確に七分後、砲撃主からの絶叫のような報告を耳にするなりゾフィーは右手を突き出し様、スクリーンの敵に向かって握っていた拳を広げる。

「最後のミサイルを全弾発射せよ！」

狂乱のさなかにある一〇隻の敵集団が感じた火力差は実際以上だっただろう。混乱の渦中で戦闘離脱に成功した艦が四隻、応射するために回頭しようとして大破した艦が二隻、ミハエル隊によって機動力を損壊させられ宙域に漂流をし始めた艦が三隻、撃沈されたものが一隻。追われていた商船はいずこかに逃亡を完了させていた。見失ったかと思いい、ゾフィーが指揮席へ後ろ向きのまま四肢を投げ出したその時、ヒルデブランドからの通信が入った。彼は戦闘には参加せ

ず戦域を離脱する商船を誘導していたのだ。

「お嬢、ご無事かと思いますが、お怪我などなされていませんか」

コンソールの小画面に出る忠臣の表情は心配色の一色に染め上げられていた。画面からも彼のコクピットが窮屈そうなのが伝わってきてゾフィーは思わず相好を崩す。

「幸いなことに無事よ。ミハエルの隊が心配だけど」

「合流地点のご指示を。例の輸送艦のキャプテン……キャプテン代理と言っています、お会いして礼を述べたいと申しております」

承知の返事をするゾフィーは即座に戦域からの全力離脱を指示した。展開中のワルキューレも收容せずヒルデブランドたちとの合流地点へと急がせる。こちらが少数と知られれば敵増援との戦闘になった際、先の戦闘でエネルギーを使い果たしている分圧倒的に不利になる。ここは逃げの一手だ。

ただゾフィーたちは知らない。敵の残存兵力も、途中で引き返した五隻の艦も、まとめてレオポルド・シューマツハ准将率いる小艦隊により拘束されていることを。

合流地点で全員が参集したのは戦闘が終わってから三時間後のことだった。途中、航行しながら随時ワルキューレを收容していったのだが、損傷はまったくなく、帰投したミハエルが困り顔で戦闘報告をした。

「奴ら本当にロート・アドラーですかね。こないだフェザーンでやり合った連中とは比べものにならない骨のない戦闘でしたぜ」

ゾフィーの感じていた違和感もまさにそれだったが、先ほどの作戦はなればこそ実行に移すことができた。一か八かのような作戦だったが、これで良いという確信が彼女にはあったのである。むしろこれ以上はないというほどに嵌ったのだった。もし、敵戦力に統率があり、先日の敵のような戦闘力があつたらどうしていたか。ゾフィーはそれを考えるのを禁忌としている。曰く、だってそうじゃなかったもの、と言うのが彼女の言いぶんだった。

「姉様は常に臨機応変を心がけておられますね」

戦闘時は自室に閉じ込められていたペトラが、尊敬のまなざしで

言った。言われたゾフィーはきよんととして、そのあとバツが悪いといった表情で苦笑した。

「臨機応変と言うのとはちよつと違うわね」

自嘲めいた表情で言った。臨機応変と言うのは、あなたの兄様のよ
うな為さり様を言うのよ、と。

「兄上ですか？」

「そう。目的があつて行動するじゃない？ 行動をすると結果が出る。しかしその結果は常に望んだものとは限らない。ここまでは判
るわね？」

ペトラは小さく頷く。まだ話の全体像は見えていないようだった。

「結果に対してリアクションをする。そうするとまた結果が出る。そ
れにまたリアクションをする。世の中はこれの繰り返しだわ」

「……………」

「私が思うにはね、臨機応変というのは、常に結果とリアクションとの
間のタイムラグがゼロになるように考えて行動することを指すの。
結果が出てから、リアクションを考慮するのでは遅すぎるのよ。それ
は行き当たりばったりと言うの」

「……………」

「行動を起こすときにはリアクションまで決まっている。つまり、行
動に対する結果の予測を可能な限り挙げて、それに対するリアクショ
ンを用意しておく。これを繰り返すの。これが臨機応変」

ね、あなたの兄様のようでしょう。当のシユナイダー本人がそれを
聞いたらなんと言うか。きっとゾフィー以上にバツの悪い顔をして、
もつと高次元でそれをやっている人がいくらでもいるよ、と謙遜では
なく口にするだろう。だが差し当たってペトラにはそれで充分らし
く、ゾフィーの臨機応変持論に大きな感心を示したのだった。

ゾフィーの乗艦に商船の代表者を招いて挨拶をした際、代表者に対
して彼女は商人と言うより腕利きのシェフのようだと感想を持った。
彼の作る料理は空腹と共に心も満たしてくれそうだ、などという妄想
を膨らませながら挨拶を交わす。

「先ほどはお助けいただきありがとうございました。私は商人でし

て、マリネスクと申します。元はフェザーンで商売をしておりましたが、今は私の雇い主であるボリス・コーネフに従って情報を商品に、まあ帝国軍関連のお仕事なども手掛けさせて頂いております。ハイネセン方面にも顔が利きますので、御用があればぜひ我々を思い出して頂きたいですね」

多弁なシェフだな、とぼんやり考えながらゾフィーも一礼をする。隣に控えているペトラとは違い男装のような格好なので腰を折つての一礼だった。

「ゾフィー・ドロテア・フォン・メルカッツと申します。私も商人の端くれ、扱っている商品は主に安全、ですね。こちらは私のパートナーで、ペトラ・フォン・シュナイダー」

「お見知りおきを」

ペトラが宮廷作法に則った完璧な会釈をするなり、マリネスクは「ああ」と言つて手を打った。変わらず柔和な表情の中に、突然親近感のようなものが湧き出している。

「メルカッツ提督のご令嬢ですな。いやいや、こんな邂逅があるとはまさに天啓」

「あの……?」

マリネスクの得心ぶりにゾフィーたちは困惑気味だ。メルカッツと言う姓はそれほど多い名でもないが、憶測ではなくこの商人はメルカッツの娘であると断定した。そのことにゾフィーは困惑と警戒を憶えたのだが、続くマリネスクの言葉でさらに驚く。

「イゼルローン共和政府にはずいぶん協力をしましてね。ご生前の父君にも何度かお会いする機会がありましたもので。そうですね、いやよく拝見するとお目許など父君そっくりですな」

「まあー」

そう驚嘆したのはペトラだった。その声に注意を向けたマリネスクは、そこで何かに気付いたようにはたと再び手を打つ。

「もしやあなた様は、お名前から察するにシュナイダー中佐のご血縁でいらつしやいますか?」

「マリネスクさんは兄上にもお会いになったことがおありなのですか

?!

思わぬ食いつきぶりに今度はマリネスクが当惑する番だった。自分の鼻頭を指先で搔くと、まあまあと両手でペトラを制する。口調はどこまでもものんびりとしていた。

「シユナイダー中佐の妹君でしたか。実は今朝方まで一緒に行動しておりました」

「なんですって!!」

驚嘆の声はゾフィーとペトラ兩人から同時に発せられたものだった。あまり動じることのないマリネスクだったが、この時ばかりは年若の女性たちのかましい声におされていた。

「え、ええまあ。それで、中佐はゾフィー様をお探しになっておいでなのですよ」

「え……」

そう聞いてゾフィーは思考が真っ白になった。無自覚に顔面が紅潮していく。ベルンハルト兄様が自分を探している。何のために、などは考えなかった。その事実がゾフィーの鼓動の速さを瞬く間に跳ね上げさせた。兄様が私を探してくれている……。

「何やらお話ししたいことがおありとか仰ってましたね」

「……………」

ゾフィーはもう両耳まで真っ赤だった。話したいことっていったい何なのだろう。特に約束も何もしなかった。家のこともある。彼女の期待するような内容ではないかもしれない。期待？ 自分は何か期待をしていることがあるのか……。

「あのー」

ゾフィーが自らの思考の渦に囚われていると、ペトラが突然マリネスクに詰め寄った。

「兄上は、私のことは何か申されていませんか？」

「あいや、特に聞いておりませんな。妹君がおありというのも初めて伺ったお話ですし」

そうマリネスクに聞かされてペトラはありありと落胆した。表情がごっそりと抜け落ちてしまい視線は足元を這い回っている。

「あの、ペトラ？」

「姉様、兄上を探し出してお仕置きをしましょう。私をお忘れになるなんて許せません」

ゾフィーはペトラの肩に触れようとしたが、あまりのわななきに出した手を引つ込めてしまった。見ると両拳を強く握りしめている。

「そんな許せないなんて、ね」

「姉様はいいですよね……」

「ああ、ペトラ……」

室温を数度下げた艦橋で一人マリネスクは目をしろくろささせていた。

ロイトリンゲン・ドライは主要航路から外れ、広大に拡がる危険宙域のほとりに浮かぶ帝国軍の秘匿された中継基地である。周辺に恒星系はなく軍事的な目的か、もしくは犯罪者でもない限り誰にとつても無用の地で、したがって辺りを航行する艦影など日頃からまったく見当たらない。軍用とあつて基地内は広く、軍用艦が一千隻程度収容可能だったが今の収容艦艇数は百隻そこそこだろう。現在駐留しているのはシューマツハ准将率いる対宇宙海賊の特殊編成部隊のみだった。シューマツハは管区制が敷かれつつある帝国領内において、辺境のとある管区で変事に即応する遊撃部隊として総数三〇〇〇隻程度の艦隊を任されており、現在はワーレン元帥の元帥府からの密命を帯びて特殊任務に就いている。ロイトリンゲン・ドライは軍でも一部高官のみがその存在を知る文字通りの秘密基地で、シューマツハの部隊が辺境管区内にいくつ保持し運用する補給基地のひとつだった。

その宇宙港第二指令室では感動的とは無縁な不毛な再会劇が繰り広げられていた。登場人物は不機嫌な元独立商人と、その右腕たる事務長である。その様子を自称エースと亡命帝国軍人、それに現役の准将が見守っていた。

「これは船長、ご無事で何よりですな。敵をだますにはまずは味方からといえますからね。いつも通り恨みつらみも何もございませぬよ」
あからさまに嫌味を言われてボリス・コーネフは「けっ」と悪態をついた。この人物がわかりやすい態度をとる時は、大いに相手の言い分に理があると認めているときである。

「お前こそ大人しく捕まっていれば危険も少なかったものを、宇宙海賊相手に一丁前に逃走劇をやらかしたらしいじゃないか。死んだら元も子もないんだぞ」

「まあ、その方が時間稼ぎにもなったでしょうし、船長にとつてもこちらの閣下にとつても、良い結果が得られたのではないですか。結果オーライと言うわけで」

唐突に矛先が向いたのでシューマツハは苦笑いをしてみせた。ボリス・コーネフの方はまだ何か言いたそうだったが、ふんと鼻息を残すと「言つてろ」と再度悪態をつけてふんぞり返ってしまった。

「まあまあ事務長、コーネフ船長を許してやってくれ。私たちもさきほど和解をしたところだ」

シューナイダーが間に入ると先ほどまで能面づらをしていたマリネスクも、気を抜いたように表情をゆがめてため息をついた。

「中佐がたも少しは気を悪くされるべきですね。この人は稀代の人たらしですから、知らぬ間にいろんなものを掠め取られてしまうのですよ」

「そのような」

「常識を共有できる方がいるのは心の平静を保つのに必要不可欠なものですな」

肩をすくめてシューナイダーが容認すると、マリネスクは通常と変わらない表情に戻って嫌味を締めくくった。

「俺のことを何だと思っているんだ。人聞きの悪いことばかり言いやがって……」

「日頃の行いというやつだな。たまには報いを受けて殊勝ぶってみせてはどうかね」

非常識の片棒であるポプランが追い打ちをかけると、とうとうフェザーンの辣腕化は黙り込んでしまった。まったくどいつもこいつもと呟いているのが聞こえてきて、マリネスクとシューナイダーは肩をすくめあつた。

「そんなことより客人を待たせているのではないのかね」

場を取り持つようにシューマツハが投げかけると、今しがたまで不貞腐れたような様子だったマリネスクがいつもののんびりした調子を取り戻して「そうでした」と答えた。彼が立って司令室から出ていくのを目で追いながら心穏やかでないのはベルンハルト・フォン・シューナイダーである。

宇宙海賊の隠れ家からマリネスクらを救うために進発したシューマツハの艦隊は、高速巡航艦と新造駆逐艦を抽出した三〇隻ばかりの

高速部隊で、他は基地制圧を維持するため敵の増援に備えさせていた。進発して程なく逆進してくる五隻の巡航艦と遭遇しこれを拿捕したのち、ジャミングの残る空域で漂う一〇隻の武装艦を発見するに至る。その後索敵に出たポプランのワルキューレ部隊によりマリネスクを救援したゾフィーの部隊が発見されたのだった。

「さていよいよ令嬢とのご対面だな」

深刻な表情のシュナイダーの隣でポプランは嬉々として両手を打っている。ゾフィーだけならむしろ会うために出向いているわけだから何の問題もない。ところがマリネスクの談によると、シュナイダーの妹であるペトラが同行しているという。ゾフィーが宇宙艦艇を引き回して賞金稼ぎを生業にしていることで十分に衝撃を憶えていたところに追い打ちをかける事実というものに、シュナイダーは端倪すべからざる思いを禁じ得ない。

それに養家であるシュナイダー子爵家の始末については、彼自身の思惑に現在のところなかったわけだから無論のこと打つ手など用意していない。だが自決が趣味でない以上いつかは直面し解決しなくてはならない事柄であることはかれにとって明白周知のことで、ある程度の筋については思惑がないでもなかった。しかしゾフィーとペトラが同道しているとは、そこに思い至らなかった自分に忸怩たる思いがあるのは確かだった。

「良心に恥じることがなければ狼狽するには及ばん」

「中佐、貴官何か勘違いをしているようだが」

ポプランに肩を気軽に叩かれてシュナイダーは抗弁したが、瞳に緑光を宿した男は平常通り洒脱に皮肉げな笑みを浮かべるばかりだ。

「許嫁の義妹がいながら上司の令嬢と浮名を流せば、まあ気まずくもなるだろうな」

先ほどまでの対立構図は改められ、翻ってポプランと共同戦線を張るボリス・コーネフをシュナイダーは精々恨みを込めてにらむ程度のことしかできなかつた。

「ゾフィーとは何も……」

「姉様と何ですか」

棘のある声にシュナイダーが振り向くとマリネスクの丸い身体の隣に妙齡の淑女がいるのが目に入った。確かに面影はあるが随分と子供だった頃の記憶しか彼にはないのだから少々目を瞠らざるを得ない。

「ペトラか？」

つまらないことを言ってしまったと思った時には手遅れだった。盛大なため息がペトラから漏れる。

「今年で二十一になりました。見違えましたか？」

精一杯尊大ぶってペトラは上目遣いに義兄を射すくめた。幼いころからシュナイダーに対してのみ取られるペトラの態度は身近なものの間では当たり前の話であるが、初対面の者たちはともかくすでに面識を得ていたマリネスクなどはその豹変ぶりに目を白黒させるばかりだった。

「軍務とは言え屋敷を出た切り丸七年！ 七年もの間音信不通で、あまつさえ叛逆者としての汚名まで着せられて」

「心配を懸けてすまなかった。それでも帰ってきたよ。家には迷惑をかけただろうけど、私は汚名だなんて思っていない。それだけは判つていてほしい」

言葉にするとなんと陳腐な言い草だろう。シュナイダーは我ながら自嘲を感じたが、それでもペトラは小さく頷いて判つております、と答えた。目には堪えた涙が溜まっていた。

「相変わらず兄様にだけは手厳しいのだから、ペトラは天邪鬼よね」

何でもない様子で会話に加わる人物に視線を移して、シュナイダーは思いがけず息を飲んだ。資料の画像で見っていた時には妙な違和感だけがわだかまっていたが、今生きてそこにある姿を目にすると七年間の時間が氷のように溶けて、当時十九歳だった彼女の面差しがようやく自然に意識へと注がれていくのを実感した。

「やあゾフィー。活躍しているようで何よりだよ」

「活躍だなんてお恥ずかしい。失敗ばかりしていますのよ。それでもペトラたちが支えてくれるから何とかやれていますけれど」

再会に抱擁などはなかった。人目があるのもそうだが、二人の間に

はそうした甘やかなものが流れたことは十七年来一時たりともない。あるいはそうした可能性もあったのかもしれないが、良いことはともかく悪い影響に敏い二人がわざわざリスクを得るようなことをするはずもなかった。またその鉄のような理性を打ち毀すほどの情熱が当事者たちに不足していたのも事実の側面のひとつだっただろう。

「失敗だなどと謙遜を。フロイライン、あなたの行動は傍目には一か八かだが、結果として最善のものを引き出すことに長けている。せつかくの再会劇を邪魔して悪いが、本来話すべきことを話しても？」

甘やかさに欠ける以上に間延びしつつあつた空間を集約したのはシューマツハだった。軍人の敬礼ではなく、胸に手を当て騎士爵に相應しい武辺さの残るきびきびとした動作で彼はゾフィーに頭を下げた。ゾフィーもすぐさま返礼する。

その時ちようどその場に姿を現したのはバイタルチエックを終えたミハエルとヒルデブラントだった。ミハエルは主人の兄であるシユナイダーがそこにいることに気付く前に、見知らぬ軍装の將軍に目を奪われている様子のペトラを見つけて心をざわつかせた。

「ミハエル」

シユナイダーに声をかけられてミハエルはようやく訪ね人がそこにいることに気付कि敬礼をした。

「これはベルンハルト様、ご無事で何よりです」

「お前たちこそペトラとゾフィーをよくぞここまで無事に。心から礼を言うよ」

気もそぞろにミハエルは役目ですから、と小さく応えると目線をシューマツハから外さないまま唸るように疑問を口にした。

「で、あちらの閣下はどちら様ですか」

階級章から准将であることは判るらしい。ただミハエルの声に敵意というか叛意のようなものを感じてシユナイダーは怪訝な気持ちを抱えたが、当のシューマツハを振り返るところだわりなく答える。

「レオポルド・シューマツハ准将だ。任務の内容は明かせないが、我々も閣下に協力してここまで同道してきたのだ。おかげで運よくみんなとこうして再会できることになったんだよ」

なんだ平民出か、と同じく平民出身でありながらミハエルは吐き捨てるように呟く。驚いてヒルデブランドが彼の肩を掴んだがその手はずげなく振り払われた。彼の主人がこの閣下に興味を持っているように思えたのか、護衛士らしく警戒をした様子だが相手が平民出と知って安堵とともに悪態をついたのである。シューマツハが貴族であれば、子爵家令嬢であるペトラとは家格が釣り合うかもしれない。そう思ったから意識をとがらせたのだろう。しかし彼の忠誠心ゆえの発言はその主人を不快にさせたようで、ミハエルは強い叱責を受けた。

「ミハエル、恥を搔かせないで頂戴」

ペトラに鋭く言われるとミハエルは不満を露わにしたが項垂れて黙り込んでしまった。その間にシュナイダーとペトラはシューマツハに非礼を詫びたが、平民出の准将は気を悪くした風もなく謝罪を受け流した。誰もが居心地の悪さを感じていたさなか、無分別に明るい声を発したのはポプランだった。

「お前さんから見ればパイロットのようだが、先日フェザーンで宇宙海賊の一機相手にまずい追いかけてっことをしていた連中かい？」

そう言われてミハエルとヒルデブランドは反射的に声の主をにらみつけた。とうのポプランはいつも通り飄然としている。もたれていた隔壁から背を離すと視線を据えたまま二人に近づく。

「あんたは？」

「そう恐い顔をしなさんな。俺はシュナイダー中佐の相棒さ」

ポプランの言葉に二人は明らかに反応した。相棒呼ばわりされたシュナイダーは黙ってこめかみ辺りを人差し指で搔いてみせる。表情は動かさず視線だけを交差させてヒルデブランドは生唾を飲み込んだ。

「あのエース機はあんたか。三機墮としただろう」

「調子がもう少しばかり良ければ、全機墮とせただろうな」

挑発的なポプランの言い様に二人と一人は睨み合う格好になったが、ポプランが緊張を毀すように皮肉気に表情を崩した。

「ワルキューレのシミュレーターがあつたな。二対一でいいから揉ん

でやる」

軽妙な歩調で退室しがたらポプランはシュナイダーにわらいかけた。

「やれやれ仲裁役が必要でしょうな」

ポプランに続いてミハエルとヒルデブラントが出ていくのを追ってマリネスクがとぼけたように言い残して行った。四人を見送るとペトラは改めてシューマツハに頭を下げた。

「准将閣下、私の家士が無礼を申しました。この通り謝罪致します」

ペトラが言うのを手で制してシューマツハは微笑んでみせた。こんな笑い方もするのかとシュナイダーは少し驚く。いつも達観や諦観を感じさせる人物だと感じていたからである。

「平民出なのは事実です。それを恥じるわけでもありませんから、貴女の謝罪は不要ですよ」

シューマツハの許しを得てペトラは心底安心した様子で両頬を紅潮させた。いわくありげな妹分の変化を目の当たりにしてゾフィーは一人首を傾げた。隣に立つシュナイダーの様子に何の変化も顯れないのを見て再度首を傾げる。気のせいかしら、と小さく漏らしたのを聞き咎めてシュナイダーが「何？」と問いかけたが、ゾフィーは首を横に振って何でもありません、と素っ気なく返した。

さて、とシューマツハが話題を転じようとした時だった。ポプランたちが出て行った隔壁が開き、シューマツハの部下である下士官が呼吸を荒げたまま走りこんできた。

「准将、緊急入電です」

「カシュニッツ軍曹、どうしたか」

落ち着いた声音で問い質したが、聞かれたカシュニッツの方は十分に平静を失っていた。そのことに気付かなかつたのはシューマツハにしては珍しく不覚だっただろう。この場に軍務の部外者がいるにも関わらず軍曹は斟酌せずに報告を口走った。

「エルウィン様がロート・アドラーからの極秘招集を受け全艦で出立された模様！」

「軍曹！」

報告の途中でシューマツハは遮ったが、この場にいた人たちの耳から阻むことはできなかつた。言ってしまったカシュニツツは遮られたことで事の重大さに気付き青くなっている。事情を聞かされていたシュナイダーも二の句を継げず、ゾフィーとペトラの表情を盗み見た。ゾフィーには明らかな驚愕の色が浮かんでいるのが見て取れた。

「准将、エルウィン様と言うのは……まさか？」

「……………」

ゾフィーの問いにシューマツハはしばし答えられなかつた。

18. 5 幕間その②

帝国暦四八〇年はいまだ帝国、同盟、フェザーン自治領の三すくみ状態が意図的に均衡を保たされている時分で、銀河帝国首都オーディンには緩やかで退嬰的な空気が流れている。人々の多くが、この同盟とのなれ合いにも似た戦乱状態が半永久的に続くは無条件に信じ込んでいる時代である。それは時流に敏い者の鼻をも鈍らせるほどの芳香を放っており、思考はこの反平和的平和状態に毒されていた。

この世界は間違っている。その想いを動機に、後世に獅子帝と呼ばれることになるラインハルト・フォン・ローエングラムもこの頃はミューゼル姓を名乗る没落貴族の子弟に過ぎず、ゆるやかに腐敗していく世界に違和感程度のもを抱いているに過ぎなかった。

首都オーディンには大小様々の貴族たちが有する上屋敷の集まる一角がある。そこに一代限りの騎士爵として皇帝より叙勲されたウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツの屋敷があった。メルカツ家の当主は五十をいくばくか過ぎた齢の軍人で、帝国軍大将の地位にある眠たげな眼をした巖のような初老の人である。一代限りの騎士爵とは言え、彼の実家は門閥貴族のうちに数えられるメルカツ伯爵家で、辺境に領地を持つほどの大貴族の末だったし、彼自身は戦場往来すること幾星霜、多くの武勲に飾られた軍人としての人生を歩んでいる。実際のところ実力、人望とも申し分なくいつかは宇宙艦隊司令長官の座も手中に収めるだろうと実しやかに囁かれてはいたが、権力におもねることのない彼自身の気質が、大将から先の出世を邪魔しているともっぱらの評判だった。家族ぐるみで社交には無頓着、日頃から質素な暮らしが門閥貴族の中ではことさらに目立ち、彼らの反感を密かに買っているのである。

この頃帝国は自由惑星同盟を僭称する叛徒との半永続的な戦争状態にあり、この家の当主はほとんど屋敷にあることなく星々の大海にその身を委ねることが一年を通じて殆どのことであった。その当主が久々に屋敷に帰ってくると報告を受け、当主の一人娘であるゾフィーは表情には隠して心を浮き立たせていた。先行して屋敷に

戻って来ている父の側仕えの一団から身体の大きな一人を選んでい
たずらに声をかける。

「シュトライゼマン伍長……だったかしら。父上はいつお戻りか知っ
ていて？」

若き日のヒルデブラントはこの家のご令嬢に気軽く声をかけられ
てひどく恐縮した。まさか一介の家士にすぎない自分が主人の娘に
名を憶えられているとは夢にも思わなかったためである。

「ひ、姫様、私のようなものに気軽くお声をかけられては……」

そう諭されてゾフィーは丸くした自分の口に白い手を充てた。不
思議そうに首を傾げると、うつむくヒルデブラントの表情をのぞき込
む。

「でも声をかけないとお話できないわ」

そういうことではなく、とヒルデブラントはあたふたするが、いつ
までものぞき込んでくる視線にぶつかって更に慌てふためいて、つい
には息を飲んで空を見上げてしまう始末だった。

「シュトライゼマン伍長、我々の姫様に常識は通じん。諦めてお問い
に応えろ」

仕えて長い同僚の先輩家士に言われ、ヒルデブラントは巨体を縮み
こませておぼおぼと声を発する。

「た、大将閣下は軍務省へ回られたのちお帰りの由にございます」

「え？」と反問してゾフィーはヒルデブラントの顔へ自分の耳をこだ
わりなく寄せた。あまりに小さな声で彼が話すものだから、少女の方
が身を寄せたのだ。ゾフィーの幼くとも豊かな髪が揺れて、ヒルデブ
ラントの鼻腔を甘い香りが通り抜けた。

「なあに？ あなた声小さくて何て言ったのかわからないわ。もっ
と大きな声で話して」

屈託なく笑ってヒルデブラントの小心を窺める。彼は小さなお姫
様に早くも屈服してしまった。平民出で徴兵されて軍人になったが、
貴族の家に仕えると言うのはこの時代平民にとって名誉も何もない
ことだ。出世の糸口や安定した生活をそこに夢想する者は多くある
だろうが、勧んでそうなる者などヒロイックシンδροームやナイトシ

ンドロームに雇った精神病患者くらいであろう。ヒルデブランドも他の多くの者と同じように兵役が無事に人生を通りすぎるのをただ待つばかりであった。

主君など必要ない。まして貴族などとはは奪い、掠め、騙り、盗む、贅沢な衣服を纏った野盗に過ぎない存在だとすら思う。たまたま配属された艦隊で、司令官付きの衛兵となったのは、単純に身体が大きいかからで、こうして司令官の屋敷まで随行して日常も護衛をしなければならぬことにうんざりしていた。噂に聞くメルカッツ提督は貴族の中では割とまともな人物だと評判だったが、いつも黙り込んで厭めしい顔つきを崩さない人物で、何を考えているのか得体のしれないとヒルデブランドは怪しんでいた。平民の兵士たちの中には軍神とばかりに彼を崇める風潮もあったが、生来争いごとが苦手なヒルデブランドはそういうひりついた連中と付き合う気などないからこれまで朱に交わることもなかったのである。そのヒルデブランドが他のメルカッツ信奉者よろしく赤く染まってしまったのは、九歳の少女だったゾフィーとの出会いが始まりだった。

それからと言うもの、ゾフィーは小心な巨漢の男を気に入ってしまい、何かにつけてはヒルデブランドを呼びつけるようになった。ほどなくゾフィーが貴族の子女向けの寄宿学校へ進むようになると、屋敷から通う際は送り迎えを担うようになり、気が付けば護衛士として正式に届けられていたのである。そのことにうんざりしたり気を滅入らせたりすることはヒルデブランドにはもうなかった。

ゾフィーの護衛士に就いて一年が過ぎた頃、比較的長かった出征からメルカッツが帝都に帰還した時のことである。いつも通りメルカッツの親衛隊が当主に先んじて屋敷に帰ってきた際、普段は屈強な平民出身の下士官ばかりの中に、長身瘦躯の悪く言えばなまっちよろい青年が混じっているのにゾフィーが気付いた。

「ねえ、あの方も衛兵かしら」

ゾフィーの視線の先で荷物の中を仕分けをしている青年を見て、ヒルデブランドはすぐにメルカッツの従卒としてシュナイダー子爵家から遣わされている子息であるとわかった。春になればここから士官学

校へ通うことになっていて、屋敷内に彼の部屋も用意されているという。メルカツツが自分の側仕えに貴族の子弟を置くことは珍しかったから、瞬く間にベルンハルト・フォン・シュナイダーの存在は屋敷に仕えるものの噂になっていたので。

「お屋形様はシュナイダー子爵家のお坊ちゃんにゾフィー様を添わせるおつもりに違いない！」

ハウスメイドたちはその噂に色めき立った。シュナイダーが色白で聡明そうな顔立ちの上、長身でスタイルが良かったものだからそれは瞬く間にさも真実かのようにもてはやされたのである。

いつかはそういう縁談が来てゾフィーがこの屋敷から去ることは規定のことだった。一代限りの騎士爵であるメルカツツ家は跡継ぎを必要としない。跡継ぎが居ても相続する門地や屋敷があるわけではないのだから、一人娘のゾフィーが家格の釣り合う貴族の子弟に嫁ぐのはこの帝国でゾフィーが生きていくには当然の帰結だった。

なればこそ、少しでもマシな男に添わせて頂きたいものだと、日頃から心に期していたヒルデブランドは、屋敷内の評判や日々触れ合うごとに知れるシュナイダーの為人、どうやら彼に興味を持ち始めている小さな主君の様子に、一抹の寂しさを禁じ得ないもののベルンハルト様であれば、と安堵していたのである。

「ヒルデブランド、ベルンハルト兄様はどんな方とご結婚されるのかしらね」

新無憂宮に皇帝の新たな寵姫が召し抱えられたと巷に噂が溢れかえった日、寄宿学校から一時帰宅していたゾフィーは、彼女の護衛士に何とはなく想いの一端を吐露した。ソリヴィジョンのニュースや電子新聞では、新しい寵姫、グリューネワルト伯爵夫人の話題で持ちきりだった。絵画から出てきたような美しい面差し、この世の者とは思えぬほど透き通って見えるようなじに黄金のオーラをまき散らす豊かで長い髪と氷を削り出したような深いブルーの瞳。ゾフィーは自身のシルバーの髪を指でからめとりながらため息をついた。

その様子にヒルデブランドは首を傾げたものだ。ベルンハルト様が娶られるのは貴女様ではないのか。シュナイダーがメルカツツ家

にやってきた日から五年が経つ。間もなく彼も士官学校を卒業し、少尉に任官して星々の大海に飛び出していく。その頃にはせめてご婚約なりとも発表されるだろう。彼は何の疑いもなく信じていた。実際彼は非常に感心していたのである。ベルンハルト様は清く潔いお方である、ゾフィーと会ってもその身体どころか手にも触れない貞淑さに。それは同時にヒルデブラント自身の貞淑さに通じるものだったかもしれない。

この五年の間、ヒルデブラントの期待とは裏腹に、ゾフィーはある種の活発さを発揮していた。寄宿学校で馬術クラブに入会したのをきっかけにスカートを日頃から履かなくなった。いつも半男装のよくな姿で馬には乗るは、ライフルは嗜むは、すっかり嗜好が淑女めいたものから離れていっていた。拳句には父親の書齋に籠って戦術理論の書籍を読み漁り、果てはワルクューレのフライトシミュレーターへの搭乗時間が八〇〇時間を超えるに至ったほどである。父親であるメルカッツ提督はそのあたり非常に奔放で、ずっとゾフィーの好きにさせていた。最近では馬に乗る、ブラスターを撃つ、軍事教練の講義を受ける、フライトシミュレーターに乗る、そのどの時にもシユナイダーと一緒にすることが多くなっていた。そこに甘やかさをかんじさせるものは一切なかったが、ゾフィーは満足していた。グリューネワルト伯爵夫人が後宮に入った年、シユナイダーにすでに婚約者があることを知っていたゾフィーは、せめて彼の近くに自分の居場所を作ろうとしていたのかもしれない。彼女の父と同じく、貴族出の軍人として生きていくであろうシユナイダーの近くに。

ヒルデブラントはずっと後になるまでシユナイダーに婚約者があり、ゾフィーと結ばれることがないことを知らなかった。その相手が義理の妹であるペトラなのだと言いつつには何とも言い知れぬ感情を心にわだかまらせた。そして今になって思えば、いろいろとかみ合う符牒の数々があつたことに気付くのだ。

だがこれからはどうだろう。世の中は変わった。ベルンハルト様は内戦によりシユナイダー家を継ぐ資格を失った。ローエングラム王朝に為つて、貴族社会は遠からず完全に瓦解するだろう。その後

は一九世紀末から二十世紀半ばにかけて、一度人類が味わった貴族的なものがかほのかに残る時代が再度訪れる。因習にとらわれる必要のなくなった二人が採りうるべき道は幾重にも存在するはずだ。

久々に肩を並べて星々の大海を指さしながら、何事かを話し合う主君とその想い人を遠くに眺めて、青髪の巨漢は乏しくなってきた頭髪をまさぐって静かにため息をつく。

「しかしなんだな。もうちょっといいムードにならんもんかね」

シミュレーターから出てきて汗だくになった肢体を拭いながら、元同盟軍の撃墜王が同じく遠目に二人連れを眺めて言い放った。ヒルデブランドは応えず黙って立ち上がる。

「くそ、シミュレーターだぞ。いったいどうやったらあんな操艇ができるんだ！」

さらに汗みずくのミハエルが別のシミュレーターから転げ出てきた。ヒルデブランドは僚友にタオルを投げ渡すとそのままシミュレーターポッドに大きな身体を押し込む。

「いい心がけだ。コテンパンにのしてやるから覚悟するんだな」

嬉々とした表情でオリビエ・ポプランが彼の挑戦を受けて立つ。電解水をチューブから口に含むと再び元のポッドに乗り込む。

「とんでもないバケモンだな。こんなスコア見たこともないぜ」

モニターに映し出される模擬戦の戦果データを閲覧し、悔しさに壁を拳でたたきつけるミハエルが、ガンルームにいる二人の男女に気付くことはなかった。

アントン・フェルナー准将は、午前の執務を終わらせ軍務省オフィスの無機質で簡素な食堂でランチを摂っている最中に来客を告げられて思いがけず渋面を作った。付け合わせのザワークラウトが酸っぱすぎたのが原因かもしれない。食後のコーヒーは濃い目に淹れてもらおうと考えていたところである。

「来客はどなたか。急ぎの様子かな」

食事中的上官に来客を告げるのだから相手はフェルナーの上位者だろうことは察しがつく。またこのご時世に軍務省を訪ねてくる人物には心当たりがないでもない。問われた事務官は敬礼をしたまま伸ばしていた背筋をさらに伸ばした。

「シユトライト中将閣下であります」

「応接室にお通ししろ。お一人か？」

口元をナプキンで拭うと席を立つ。すると事務官の背後からシユトライトその人が現れたので、さすがにフェルナーも少々慌てた。

「いや准将、ここでよい」

「はあ、ここでですか」

あたりを見回すと、給仕がフェルナーの食事の片づけにテーブルに近づいているところだった。

「悪いがすぐに片づけてコーヒーを用意してくれ。人払いをなさいますか？」

後半はシユトライトに向けての質問で、問われた人はいつもの無表情のまま首を横に振った。それで話の内容の重要さを量るが、その表情からは特に読み取れることがなくフェルナーは鼻白んだ笑みを浮かべた。

「食事など執務室に運ばせればよかろうに」

勧められた席につくとシユトライトは何でもないことから話題を取り出した。こうしていつもペースを握られる、とフェルナーは内心なかなか面白くない。

「主人気取りでそのような振る舞いをしようものなら痛くもない腹を

探られるでしょうから」

一矢報いるつもりで憎まれ口を叩いてみるが、目の前の上官は表情を微動だにさせない。

「全王朝時代ならそうであろうが、卿は少し気にしすぎるのではないかな」

「確かに気にしすぎるのかもしれませんが。しかし閣下も含め我々は後進組ですから、元帥府組から睨まれてはいろいろとやりにくい」

ここでフェルナーの言う元帥府組というのは、リップシュタット動乱以前からの家臣たちのことである。帝国軍の上層部である元帥や上級大将といった人たちにはさしも疎外感を感じることはない。だがリップシュタット以降配下となったものたちは、有能であればこそ仕えることを許されたわけで、以前密かにミッターマイヤーがごく近しい者に漏らしたように、当時の大将以下の人材については能力差が著しく目下の懸案だと言わしめたことが未だに解決されずにいる。つまりある階層においては古来の配下の者より新参の鞍替え組の方が能力的に勝り、結果に相応しく遇されているに過ぎないにも関わらず、そうでないものの反目を買いやすいのである。人事局もそれを考慮して、シュトライトやフェルナーの昇進は実際の功績からは遅れ気味にしてあるのだった。実際ならシュトライトはすでに上級大将に手がかかってもおかしくないほどの貢献度だし、フェルナーも准将に留まっていることが不思議だと心あるものには指摘されるくらいである。いずれにせよラインハルトが存命であれば懸念にも及ばぬ事項であるが、さしものカイザーも死して後人々の心の負の側面を焼き尽くすほどの炎は持ち合わせていなかったようだ。

「卿の細心には悪いが今日は昇進の内示を持ってきた」

「わかりませんね。なぜこの時期に？ しかも中将閣下から受けることになるというのは」

言いながらもフェルナーには察しがついている。時期はともかくシュトライトがやってきたのはつまり軍務省の新しい主人が決まったということであろう。

「いつまでも食えんな、卿は」

「お口にあうように整えておるつもりですがね、召し上がってみる方がおりませんので」

そこでようやくシュトライトが表情を崩した。今はともかく先々は悪くないパートナーシップを結べるかもしれないな、とフェルナーは未来の上官を評した。

「しかし大将では軍務尚書の椅子には足りませんな」

言下にフェルナーはシュトライトの昇進を言い当てたわけだが、未来の軍務尚書はそれを否定しなかった。ようやくコーヒーに手を付けるシュトライトを観察しつつ、中將はブラック派か、とフェルナーは脳内に記録する。

「これまでの功績をもってまずは大将に、この後の功績をもって上級大将へとのことだ」

「このあと？」

自分も飲みかけていたコーヒーをソーサーから上げたところで止めて、フェルナーは鋭く正面の人物に目をやる。

「ロート・アドラーの、ひいては地球教残党の討滅任務の達成ということになっている」

一度上げたコーヒーカップをソーサーに戻してフェルナーは尖った自分のあごに手をやる。

「しかしその案件はワーレン元帥の専任では？」

「……実は譲られた」

なるほど、と黙ったままフェルナーは頷いた。シューマツハ准將を使ったことに当初から違和感を抱いていたが、こういう心積もりがあったわけだ。シューマツハは復命してからはシュトライトの配下だったのだから、見るものからすれば任務成功後シュトライトの功績となるのは自然な流れだ。

「上層部の方々もなかなか苦労をなさっていますな」

皮肉をこめてフェルナーは言ったが、シュトライトが殊勝な表情のままなので察することがあった。おや、この案件はもつと上からのものようだ。

「皇太后陛下におかれては卿のことも随分お気にかけていたぞ」

「……それは畏れ多いことで」

かつて自分はラインハルト暗殺を進言し未遂に終わったものの実行にまで及んだのである。かけられる温情が篤ければ篤いほど心に負うところが多い。そのことにいと尊きお方たちはお気づきにならないか。それともそれすらも計算のうちか。計算などはそれこそ畏れ多いか。思うところが留まらない様子のフェルナーにシュトライトは苦笑した。

「だがなかなか辛辣なメニューも用意されているぞ」

「それは？」

フェルナーの問いにシュトライトは顔を上げて辺りを憚る様子を見せた。幸いに食堂には誰もいなかった。

「卿も掴んでいることと思うが、この件にエルウィン・ヨーゼフ二世が関わっていることはすでに皇太后陛下のお耳に入っている」

思わず舌打ちをしかけてフェルナーは思い留まった。

「今更踏み絵を踏まされると、卿は思うか」

しばし沈思したのちフェルナーは「いえ」と答える。

「踏み絵を踏んだと、他の者に知らしめられるのに利用されるおつもりでしような」

「我らが軍務省を仕切る大義名分となる」

「大義名分が必要ですか、このローエングラム王朝においても」

ため息とともに吐き出したフェルナーの心情にシュトライトは珍しく同調した。

「人の作る世である以上、きつと必要なのだろうな。いかにラインハルト陛下が名君であらせられても、残照であつては焼き尽くすにはあたわん」

もう少し長く在位にあれば違った結果もあったかもしれないが、とは思ったものの両者とも口にするとはなかった。以前を懐かしんで思考停止するには彼らには残された時間が多すぎるのだ。

「しかしシューマツハ准将は納得しますかな」

フェルナーは最大の疑念を口にした。彼の緻密な調査と独特の発想法から、エルウィン・ヨーゼフ二世がシューマツハの庇護下にある

こと、そしてそれまでの経緯をほとんど正確に推察するに至っている
フェルナーである。シューマツハの心情に寄って考えると、フェル
ナーやシュトライトの指向する未来と、シューマツハのそれとは結果
を違えることになる。それを彼が良しとするか。まず間違いなくせ
ぬであろう。現状帝国軍の高級軍人にあるシューマツハだ。ことと
次第によつては、ローエングラム朝二度目の叛乱事件になりはせぬ
か。

「その点についてはこれからだが密約の用意がある」
「ほう」

「卿は航路の整備と中継基地や寄港地の再設定を担っているであろ
う。管区制の網目の合間に存在せぬ穴を空けてもらいたい」

シュトライトの淡々とした口調にフェルナーは口の端を吊り上げ
て笑ってみせた。額にはうつつすら汗をかきはじめている。

「コロニーか、遺棄予定の中継基地であれば……」

「二世代だけだ。いずれは接收するし、機密扱いではあるが記録にも
残す。後世に禍根が残らぬように万全を期す」

「いかに万全を期しようと禍根は残るものではありませんかな」

言つてから少々意地が悪かったかとフェルナーは思いなおす。
シュトライトもそんな夢想はしていないだろう。だがわからないで
もないくらいにはフェルナーも感情を持ち合わせている。情勢がそ
うさせたとは言え、盟約に参加したのは自分たちで、形式上は幼帝を
奪還すると謳い、果ては趨勢が決するにあたって主旨を変えたのだ。
ブラウンシュヴァイク公に対しては何ら矜持を穢されることはない。
以前と変わらず忠誠心を求めるには資格のない器であったと思う。
だが幼帝に対してはどうか。ゴールデンバウム王朝の血脈を恨むカ
イザーラインハルトのような動機で今日まで生きてきたわけではな
い。良いとまでは言わなくとも悪い君主でなければフェルナーはよ
り生存の可能性の高い側へつくだろう。慈悲を与える余地があるの
ならそうすればいいのだ。それを甘受するかどうかは相手の器量次
第なのだから。

「しかし生きてみると、以前には思いもしなかったところへ辿り着く

「ものですか」

「それは確かだが、我々はいまだ終着地点に至ったわけではなく、この先何が起こるか予測するくらいしか適わん」

「まあ、その通りですが、何とか閣下は苦勞性であられますな」

二人はそろって冷めたコーヒーに口を付けた。フェルナーは給仕を呼ぶと二人分のコーヒーの替わりを命じる。給仕の少年がコーヒーをポットから注ぐ間、二人は静かに注がれる芳醇な黒い液体を黙って見つめていた。

漆黒の宇宙に拡がる星々の海原に漂う数百の光点を見つけたとき、オリビエ・ポプランはこの世界で唯一の彼の居場所であるコクピット内で軽やかに口笛を鳴らした。

「推定艦数約三百といったところだな。さすがにバトルシップは見当たらないが、クルーザーや駆逐艦はごろごろいやがるぜ」

「戦闘艇部隊はどうだ？」

通信に応えたのはシュナイダーの同盟公用語だった。そうだな、と帝国公用語で相槌を打ってから、ポプランは敵が構成する艦艇数からワルキューレの收容数を割り出して答える。

「ざっと四百機といったところか。ただ数ほど戦闘力はないだろうな。パイロットってのはそうそう簡単に育成できるものではないんでね」

「それに貴官ほど腕の立つエースクラスはまずいないだろうからな」

シュナイダーの碎けた口調にポプランは吹き出した。残念ながら彼の鳴らした指の音は通信にはのらないが、愉快気に笑う声がシュナイダーのイヤホンを心地よく震わせる。

「わかってきたじゃないか中佐。戦争なんてものは正気でやるものじゃない。せいぜい肩の力を抜いて、あの娘との甘い夜を思い浮かべてだな……」

「ポプラン中佐、確かに戦争などと言うものは茶番だがな、それだけに遊びでやるものでもない」

通信に割り込んできたのはシューマツハだった。この戦域の最高位であり本作戦の総司令官である彼が一介の偵察機からの通信に耳を傾けていることがまず珍しいことである。

「正論だな。しかしつまらん。下っ端のささやかなおふぎけに上役が口を挟むなんてのは野暮の極みだぜ。下準備はこつちに任せて司令官は司令官らしく昼寝でもしておけばいいものを」

「ヤン・ウエンリーと比べられては迷惑だ。非才はそれらしく準備に奔走するものだよ」

「別に比べてなどいないが……。だがコンプレックスを持つと言うのはいいことさ。成功へのエッセンスとしては必要不可欠なものだからな」

どこまでも軽薄さを崩さない僚友にシユナイダーは片頬を吊り上げてほくそ笑む。ふと人の気配を感じてそちらへ振り向くとゾフィーが彼に驚いたような表情を向けていた。

「兄様ってそんなお顔もなさるのね。意外だわ」

「そんなに驚くようなことでもないと思うが……」

シユナイダーの抗弁にゾフィーはとんでもないと言いつつ首を激しく左右に振った。

「父上と兄様の組み合わせときたら石像か肖像画が歩いているようなものだと評判だったのですから」

「それはさすがにひどいな。私もジョークのひとつやふたつ言えるさ」

「例えば？」

鋭く突っ込まれてシユナイダーは降参した。ゾフィーはくすくすと肩を揺らせて楽し気に笑う。

「そういうえばあちらへ行つてからは提督もよく笑っておいでだったな」

シユナイダーが述懐するとゾフィーは笑うのをやめて表情を再び驚かせた。困ったような色を見せて両眼を瞑るとついには唸り声をあげはじめた。細い指を唇にあてると首をそつと傾げた。

「まるで想像がつかないわ」

「時々はジョークも仰つたりしてね」

「どんな?!」

そう言つてゾフィーがシユナイダーの肘の当たりを掴んでゆすつた。ごく小さい頃何かをねだつたりささやかなわがままを言うとき彼女はよくそうしたものだ。鼻腔をくすぐる豊かな髪の香りがシユナイダーを包んで、目の前にいるゾフィーがすでに幼なかつた少女ではないことを思い知らせる。さきほどポプランと通信で交わした「あの娘」というフレーズがリアリティーをもって胸に迫ってくる。シユ

ナイダーは自分が平静さを失っているのを悟られまいと自制を強く自分に促す。

「バーミリオン会戦の後で自室に戻られる途中に、今は無限の未来よりも一夜の睡眠が欲しい心境だ、などと仰られたよ。かくいう私は部屋にたどり着けずにエレベーターの中で七時間ほど寝てしまったがね」

ゾフィーは嬉し気に彼の話を聞き、メルカッツのくだりでは心底驚きを顕し、シユナイダーのところでは抱腹するほど笑いこぼした。

「イゼルローン要塞のエレベーターってよほど寝心地がいいのね。一度体験してみたいわ」

「……君の話術の才能を少し分けてもらいたいよ」

しかしイゼルローン要塞か。あそこには様々な語りつくせない思い出がある。思い出そうとしてもなかなかこれといった事象があつたわけではない。だが何かの拍子にあふれ出てくるそれらはいつもシユナイダーの心を温める。失敗を恐れない生き方があることを教えてくれた場所だった。それはメルカッツだけではなく彼にとつても同様の感想だった。

「コマンドポスト、取れるか？」

再びポプランから通信が入る。強行偵察を終え帰投している最中のはずだ。通常であれば敵勢力の索敵を避けるためにも隠密に帰投する手はずをとるはずである。

「グラツパゼロワン、どうぞ」

コードネームには何の酒がいいかと尋ねたら、問われたエースは少し考えてからネタ切れだなどと白状した。グラツパを提案したのはシユーマツハ准将である。イヤホンから聞こえるポプランの声は少し緊張感を帯びていた。

「敵さんが動き出した。予想より少し早いな」

感想を前置きにポプランが敵勢力の状況を報告する。銀河水準面に対して六時から十二時の方向へほぼまっすぐ針路をとっている。速度はそれほど早くなく、戦闘配備状況から警戒感は薄いとみられた。艦艇数は約三百と推測され、その構成はクルーザークラスと駆逐

艦が三対七程度。補給艦や工作艦ではなく、ガンシップや雷撃艇もちらほら見られた。混成集団と言うよりは統制の取れた陣容である。

「グラスノフというのは文官だろうか？ 艦隊指揮などできるのか」

「貴官は大艦隊同士の戦闘に慣れ過ぎていようだな。これくらいの小規模戦では実戦レベルの巧者などはいて捨てるほどいる。一撃が取り返しのつかない戦況を生み出すのが小艦隊同士の戦闘だ。それだけに準備が重要だし先手を獲る必要がある」

ポプランが帰投しつつ投げ込んでくる通信にシューマツハが自身の述懐を返した。シューマツハは本来自問することで状況判断を進める性質の持ち主だ。ただ相手によつては言葉のキャッチボールをすることにより深い洞察にたどり着くということを会話の中から実感しつつある。オリビエ・ポプランは相手の考察や迷いといったものを引き出すことに関して優れた引き出し手であるようだった。

「それで、公の部隊は確認できたか」

「ああそれなら確認してある。敵右翼の先端にひととき統制の取れた三十隻程度の一隊がある。おそらくあれだろう」

ポプランの通信に乗せられてくる画像を拡大してシューマツハは唇を薄く噛んだ。